72-215ロ
1200501287180
72
ロ
215

始

隈元大尉著　於金州冬營

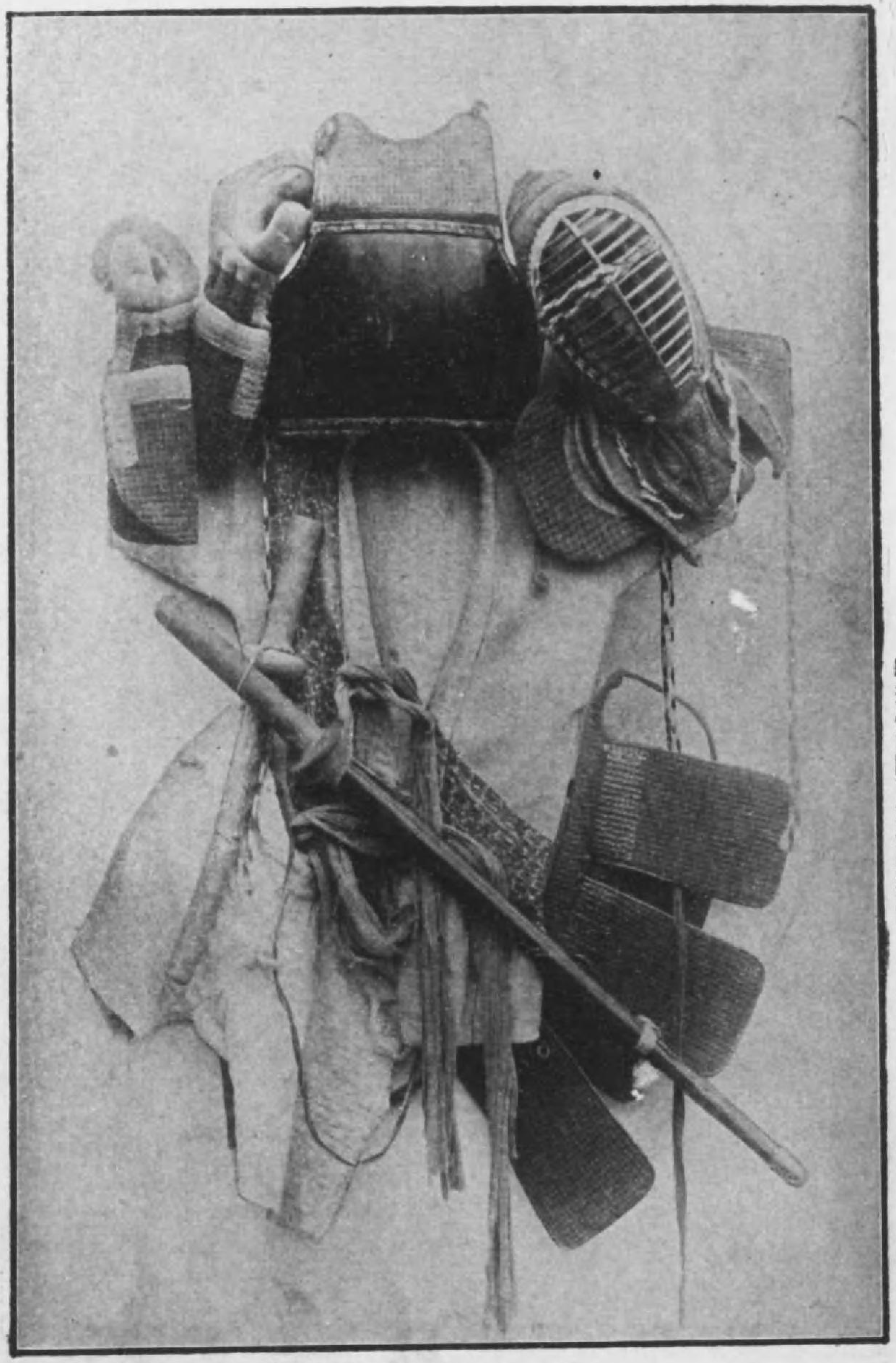
武術教範　全

發行所　武揚館

原形四倍

龜井伯爵閣下於金州撮影

小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷



龜井伯爵閣下於金州撮影　小川一眞寫眞影刻銅版及印刷

龜井伯爵閣下於金州撮影　小川一眞寫眞影刻銅版及印刷

陸軍大將從二位勳一等功二級侯爵大山巖閣下

我武

張揚

明治廿八年一月一日於金州城

第二軍司令官從二位勲一等伯爵大山巖書

龜井伯爵閣下於金州冬營撮影　小川一眞寫眞製銅版及印刷

陸軍中將從三位勳一等功三級子爵山地元治閣下

折りえても
心ゆるすな櫻花
さそふ嵐の
ちりもこそ
すれ

小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

陸軍中將正四位勲二等功三級男爵乃木希典閣下

明治二十有八年一月元旦於金州城冬營
應限元大尉之需誌古歌
征清野戰第一師團長從三位勲二等男爵山地元治

勇園義
而長

義因勇而行

右松蔭先生士規七則之一書以為序

龜井伯爵閣下於金州撮影　小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

陸軍少將正四位勳二等功三級男爵西寛二郎閣下

明治二十八年元旦
於普蘭店陣中
陸軍少將乃木希典
寫

薬代り をこしつ絲瓜を
今年より うゑき
あらためし

詠士[illegible]

明治廿八年一月元旦旧清
國金州城外八里荘陣
中ニ於テ記ス

陸軍中将正四位勲二等

西寛二郎

稽古徹今發明
神聖之大道尚
武右文鼓舞
天地之正氣

書東湘翁誨勵子弟之
語以為序
明治乙未五月於復州城
南瀾頭陣中
陸軍歩兵大佐松永正敏

天地のそむくとしては
消えさらむ
さくら難ふと
太刀の稲妻

明治廿八年夏日

新編大日本帝國[illegible]

應需[illegible]書之

陸軍歩兵中佐大久保直道

題詞

武道唯忠孝艱難報國家丹青名不朽生死思無邪富嶽玲瓏雪芳山爛漫花東方高潔氣萬古發光華

兵學萬人敵躬當百戰場風霜多變幻龍虎各騰驤大勇唯如怯真柔善制剛古来豪傑士劍我而相忘

著書談豈易訓誡太丁寧一部論人道千秋定

武經地成長不敗微極到無形寄語干城士從今有典型

乙未五月於復州陣中

青厓山人國高胤

武道教範目次

第一篇　綱領

武道……一
文武一途……四
躰育……二八
兵字構へ……七八
無念無想……八三
龍之卷……九一
心之卷……一一一
審判定義……一二〇
禮式……一二八
館則……一四〇
講武會……一四八
修身……三
箴砭……七
流旨……五八
心氣力……八〇
氣位……八八
虎之卷……一〇一
試合定義……一一九
平均時間……一二三
入門概則……一三一
進叙式……一四六
寒稽古……一五一

試驗……一五三
錄斷臺……一五四

第二篇　短柄劍術

劍道……一五六
短柄……一六二
先制……一七三
切返……一七七
後先……一八三
野戰……一八七
懸懲……一八八
體當……一九〇
大技……一九三
組打……一九六
有無……一九八
健淬……一九九
以劈擊敵……二〇一
拔刀隊……二〇六
入死地……二一七
會得……二一九
劍術基本……二二二
打込稽古……二四六
太刀生死辨……二五一
試合審判……二五六
對試合規典……二五六
劍法之形……二六〇

劍舞……二六九

第三篇　練體柔術

やわらノ體意……二八一
練體柔術之辨……二八二
體勢……二九一
融化……二九三
中心……二九五
懸待……二九八
暗後制勝……三〇一
決心……三〇三
矢當曳……三〇四
分任心妙……三〇六
名人愼事……三〇七
九觀……三〇九
天道不爭而勝……三一七
增信保信……三一九
柔術試合審判……三二二
柔術基本……三二七
初段……三三三
二段……三三九
三段……三四三
四段……三四六
五段……三四八
六段……三五五

七段……三五七
八段……三六〇
九段……三六三
十段……三六四
十一段……三六九
十二段……三七二
十三段……三七六
十四段……三八一
十五段……三八二
十六段……三八六
十七段……三九四
十八段……三九八
十九段……四〇二
二十段……四〇三
二十一段……四〇八
二十二段……四一四
二十三段……四一八
二十四段……四二一
二十五段……四二二
二十六段……四二五
二十七段……四二九
二十八段……四三二
二十九段……四三六
三十段……四三七

武道教範（増訂三版）

第一篇　綱領

隈元實道編著

第一章　武道

夫れ、武道は、建國尙武の遺風を追ひ。士道を修め。廉恥を勵み。以て士風維れ正しく。以て士氣維れ振ひ。以て士節維れ高く。以て士心維れ固く。至大至剛なる、精神を發達するに在り。

惟ふに、帝國臣民は、萬世一系の尊榮なる　皇室を戴き。世界無比の光輝ある歷史を有す神武天皇、蜻蛉洲の不臣を戡定し給ふに寶劍を以てし。以て九五の位を蹈み玉ひ、　皇統連綿天壤と窮りなく。世々威烈の加る所ろ、三韓胡元皆な畏服せさるはなし。畢竟皇威に因ると雖とも亦、世々吾々の祖先が、身を以て國に奉するに、斯の武を以てしたる結果なり。故に世々吾々の祖先が、經營辛苦したる、其の遺志。其の餘風。其の事蹟。其の希望。一皆な武道に固有す。

斯の武は、邦土の國粹としては、大和魂たり。祖先の遺傳としては、武士道たり。武士道は、大に武勇を尚ひ。特に節操を重んじ。至誠を以て、士の士たる本分を盡す者是れなり。

大和魂は、忠君愛國、義は山嶽より重く、死は鴻毛より輕しと覺悟し。粉骨碎身、斃れて尚ほ屈せさるの赤心是れなり。

是に於て、武道に豁達すれは、祖先の遺志繼くへく。祖先の餘風慕ふへく。祖先の事蹟鑑むへく。祖先の希望充すへく。豁然貫通して、大ひに元氣を振起し。誓つて國家の干城たらんとす。嗚呼武道の德も亦た軼なる哉矣。

振氣館尚武之歌

瑞穂の國は、昔より——武勇義烈の、名も高く　外つ國人も、仰きける——秋津島
根の、荒男なり　誰れかは武勇、なかるへき——去れと人々、學ばすば　道にも
暗らき、譬へあり——好し蟷螂か、斧あるも　腕に覺への、徽りせば——鷲に睨ら
まれ、獅子に叉た　追れつ手向ふ、術もなく——枯野のキヽス、泣く計り　憐れ

果敢なき、様を見て——猿も腸はた、斷つとかや　況して萬物、靈長の——心ろに
問はヽ、如何せん　左れは尚武の、氣を振ひ——朝な夕なに、敷懸けて　星を戴
き、霜を踏み——奮ひ勵みつ、磨くへし　境苦ならねは、學成らす——艱難障碍に
打克て　温故知新の、識をもて——規矩に法とり、習ふへし　卿等が祖先は、治
に亂に——渉りて戈を、枕らにし　生死委ねし、此の武術——精神込めし、此の武
道　遺風守りて、進みなバ——親に孝なる、のみならで　君に忠義の、梓弓——
弦妙着々、會得せん　蛟龍雲を、得るの素は——他なし忍耐、勉强そ　蘊を蓄は
へ、機に敏とく——膽を養ひ、義に勇み　緩急事に、後れじと——平生拮据、錬磨
せバ　人も干城と、仰がなん——世々の祖先も、嘉みしなん　嗚呼尚武の氣、振
はすバ——國の御稜威も、振ふまじ　固有尚武の、氣を振ふ——爲めに其の名も、

振氣館（二句連鐵唱之）

第二章　修身

謹て德育詔勅を鈔し、國民的道德の淵源を明にし、進んて、軍人勅諭を鈔し、武道

的訓敎の基礎を彰にし。以て、劍挌兩道に於ける、精神の啓發を期す。又た何をかこれに加へん。

皇室に忠に。父母に孝に。兄弟に友に。夫婦相和し。朋友相信し。恭儉己れを持し。博愛衆に及ほし。學を修め業を習ひ。以て智能を啓發し德器を成就し。進んて公益を廣め世務を開き。常に國憲を重んし國法に遵ひ。一旦緩急あれは義勇公に奉し。以て天壤無窮の皇運を扶翼すへし。

一　軍人は忠節を盡すへし　　二　軍人は禮儀を正しくすへし
三　軍人は武勇を尙ぶへし　　四　軍人は信義を重んすへし
五　軍人は質素を旨とすへし

臣 實道謹鈔

第三章　文武一途

惟ふに、文武は、一にして別なり、別にして一なり。文を談する事至れは武となり武を論する事極むれは文となる。正成兵庫記にも亦、曰く文武の名は異なるに似たるも其の實は一なり。治まれる世には、政道の正しきを文と云ひ、亂れたる時は征罰の正しきを武と云ふ。猶は靜かなるを水と云ひ、動くを波と云ふか如しと。昔日封建時代に於て、士家の二三男に生れたる者、文は獨観に、武は目錄に、兩達したる證明あるにあらされは、士家の相續を許されさりき。故に文武一途は、所謂武門武士の本分とし、勵精したるを知るべし。然り而して維新以後、社會の風潮文弱に流れ。武道と云へとも、武强腕力の事のみと速了し、去る者なしとせす。斯の武の爲めに歎せすんはあらす。天下事なく、山靜かに雲穩かなれは、鉛槧を專らとする文者時に勝ち。天下事あり、天崩き地震へは、劍楯を事とする武夫勢に勝ち。彼れ此れ相凌きて、以て相制せんとするは共に非なり。古人旣に文武の道は、岐して二途となすへからす、合して羽翼となすへしと云へり。若し夫れ、無文絳灌の如く、無武隨陸の如く、偏廢する所ろあらは、不具人にして愧るなきを得さるへし。近く之を維新の元勳其の人の履歷に照らすも、一に皆な文武一途の達人ならさるはなし。試みに之れが二三を擧示せんに、坂本龍馬は、千葉周作の高弟たり。木戸孝允は、齋藤彌九郎の塾長たり。勝山縣兩伯は、刀鎗師家の子孫たり。

西郷大久保先輩は、自顯流の達人たり。而して皆な文を能くす。抑々天下の人傑たる者は、吾が精神を立て丶、而して左文右武、均しく之れを羽翼にす、故に文を學ふ、腐儒の爲に効はす。武を講す、劍客の弊に流れす。克く達観する所ろある是れなり。是に於て、文武の道は、一に其の人に在り。賢は其の大を學ひ、不賢は其の小を學ふと云ふにあらす。賢は、小の理を以て大の理に取り、大の理を以て小の理に取り、以て自得の補ひとなす。但だ不賢は、小に喩て大に喩らす、又た大に奔て小ゝ疎く、遂に一も得る所ろなきのみ。要するに、本舘は、武術一片に過ぎざる如しと雖も、其の精神に至ては文武一途ならずんはあらす。即ち是れ、青年有爲の學生に限て、入門を許す所以なり。若し夫れ武ありて文なくんは、武強のみ。文ありて武なくんば、文弱のみ。實に文武の道は、相待て而して人物を造る、決して偏廢すへからす。因に記す昔し或る學者藩邸へ來り、頻りに聖賢を引き以て論難風生、勢ひ當るへからす。實に口辯は學者の俤、寡言は武夫の習ひ、藩士頗ぶる舌戰に窮し、恭しく學者の佩刀を見んことを請へり、何ぞ圖らん錆びて拔くへからす、乃ち藩士喝し曰く文事ある者、必らず武備ありとは、汝か本尊たる孔子の家語ならずや、汝ち片輪者倘は議論あるかと詰め寄せしかは、學者大に耻ちて、頭まを掻きつゝ逃け去りしと云ふ。學者にして刀の錆ひを耻つ、其の之を耻る丈けは、學者も亦た武に志ありと謂ふへし。

古來道場の壁書に、曰く此の堂に登り、文武の道修業の輩は、心膽を練るを第一とす。假令ひ、萬卷の書籍を讀み破り、劍搏の奥義を極め得るとも、心膽未錬の時は、皆な是れ徒習にして緩急の用に立つへからす。平生事の細大となく、能々心懸け修業可被致者也と。須らく留意すへし。更らに文武一途を約言すれは、精神教育即ち是れなり。

第四章　箴砭（是れ武士の規鑑と見て可なり字義は唐の太宗の治績を讀みて帝王侯伯か坐隅又は胸に砭すと云ふ如きに出つと知るへし）

凡そ、武道の貴き所以のものは何そ、曰く武人特色の精神ある是れなり。

夫れ、之れか素たるものは何そ、曰く剛毅。曰く勇敢。曰く耐忍。曰く懇誠。曰く威重。曰く果斷。曰く勉勵。曰く躬行。等の資徳を備へ、言行を愼み品位を高め、以て大に爲す所ろある是れなり。

其れ之れか應用は如何、曰く勇敢以て難に當り。曰く剛毅以て衝に立ち。曰く耐忍以て久きに堪へ。曰く懇誠以て衆を懷つけ。曰く威重以て人を服し。曰く果斷以て事を處し。曰く勉勵以て功を積み。曰く躬行以て率先する是れなり。是れ即ち武人特色の精神にして、武道の貴き所以なり。若し此の要素を失はゝ、奈何に技藝に巧妙なるも、角技者流にして、吾人の所謂武人を以て視るへきものにあらさるなり。世間に、技藝の巧妙なる者は之れなしとせす、然れとも眞正なる武人は、天下に甚た稀れなり、斯道の爲めに歎せすんはあらす。

嗚呼、難哉眞正なる武人。實に眞正なる武人の德性は、一朝一夕に養成し得へきものにあらす、必らすや道義を守り、自ら知るの明かにして、自ら信するの厚く、造次顚沛の間と雖とも、此に於てするの良習慣を造るより、外あらさるなり。克く其の習慣を造るの久きに渉り、自然に達士の風骨を備ふるに至るへし。換言すれは、眞正なる

武人の德性は、所謂日本武士の武士たる性行を養成するに在り。技藝優劣の如きは、固より論する所ろにあらす。併し武藝は、劣等にして可なりと云ふにあらす、却て吾人が熱心に期成せんと欲する所ろは、絕對的天下無双の達人たらんとするに在り。而して技藝優劣の如きは固より論する所にあらすと云ふ、少しく自家撞着に似たりと雖とも、決して自家撞着にあらす、比較的に精神の發達を尊尙し、技藝の進歩を第二の地位に置くのみ。是れ當流特色の一たり。

夫れ、武藝は、精神教育に連れて、進歩するにあらされは、眞正の武藝とは、認むへからす。

既に、克く精神教育に連れて進歩す、始めて之を眞正の武藝と謂ふ。是に於てや、武藝と謂ふ觀念は、吾人の自信力となり、自負心となり、克く責に任して、克く耻を知り、自主の精神益々振起せらるゝものとす。英雄豪傑が、胸中に充滿せるものは、唯た此の自信力のみ。唯た此の自負心のみ。然り而して節制其の宜きを得るもの、乃ち眞の英雄豪傑たるへし。再言すれは、吾は常に武藝を嗜なむ、武藝を嗜なむ程の者は、

武に儁秀なる如く、文に優等の譽なかるへからす、道場に勇强なる如く、陣頭に拔群の功なかるへからす、と自奮自勵す、復た奪ふへからす。唯た夫れ此の氣慨あり、志操確實品行端正、外襲敢て誘惑すへからす。唯だ夫れ此の氣慨あり、意氣壯烈風采嚴格、傍人敢て侮辱すへからす。唯た夫れ此の氣慨あり、白刄踏むへし爵祿辭すへし、世人の名利に走り、富貴に誇り、虛譽を貪るが如きは、雲烟過眼に附し去て、世俗塵垢の外に、超然卓立せり。唯た夫れ此の氣慨あり鼎鑊甘んすへし、刀鋸肯んすへし、朔風膚を刺し酷霜指を墜す、其の困苦缺乏に堪へて、以て正々堂々進んて敵陣を衝破し、先登第一を名乘る。武藝の能先つ斯の如し、亦た以て當流特色の一此に出すんはあらす

武人は治者ゝして被治者にあらず故に道を信するに厚ふして利前へゝ横たはるも動かす、害後ろに發するも動かす、其の本領を守て進退し、之れに依て勝ち、之れに依て敗す、敗して悔ひす、勝て誇らす、勝敗共に唯た經驗を得るを喜ふのみ。丈夫の心事須らく斯の如くなるべし、一身世に處して事を行ふも、尙ほ且つ一定不變の根據を固ふし、彼れ來て攻るも動かす、彼れ去て脅やかすも動かす、毅然不動たらすんはあらさるなり。

凡そ吾人が世に處するや、目前毀譽眞耶僞(南洲)謗者任汝謗嗤者任汝嗤(象山)と獨立獨步し、自ら高しとするの槪なくんは、他の刺擊に遇ふて動搖し、褒貶に依りて攪亂し、遂に素志の貫徹する所ろなかるへし。

彼れ來て攻るも動かすとは、讀んて字の如く明了なるも、彼れ去て脅やかすも動かすとは、聊か辨せすんはあらす、然れとも例を史に取るに及はす、此に鳥あり徃て之を追ふも動かす、吾れ木蔭に匿るれは蒼皇飛ひ立つへし、是れ即ち去るは脅やかす一手段なる所以なり。此の故に、人の我れに對し、去て脅やかさんとするも、毅然不動たるへしとの意なり。(驚愕は現在に屬する不意の事に起る故に慣れたる事には驚愕せさるなり怯懼は未來に屬する過慮の事に起る故に見へぬ事は危懼す)

古への武人は、深く武道の奧義を窮む、故に氣自ら專門を負ひ、心自ら見識を持せり。隨て、我か流義の本領を守て亂さす、我か流義

の機軸を執て讓らす、終始貫徹したるものなり。所謂武門武士は、一種の特性を有し、常に相喜ふに折衝を以てし、苟しくも禍福を問はす。相陳ふるに勇猛を以てし、假りにも未練を云はす。寶とするに威武を以てし、絶へて文弱に倣はす。榮とするに忠死を以てし、決して生辱を取らす。思想極めて清廉純潔なり、隨て試合に於けるや意氣揚々自ら顯はれ、快刀一擊以て兩斷する如く、怪力一搏以て突飛する如く、勇壯活潑一々事を眞劍に比し、實地に鑑みて講窮せさるはなし。若し之れに反して、一擧輕佻の所作を交へ、又は一點邪曲の手段を施し、以て勝を貪ほらは、必らす之を擯斥して、思想の賤劣なるを爪彈せり。

世時の變遷社會の事情、大に古今を殊異する所ろあり、強ち人をのみ責ひへきにあらすと雖とも未來良將校たらんと欲する生徒は、日本武士の性行を養成せすんはあらす所謂武門武士の反は、町人根性なるものにして、無識貪婪ケチ卑屈コセツイテ分を

掠め其の手段方法の正邪曲直は、顧みる所にあらす。今の支那下等人種と一般に、利己主義の熾んなるもの即ち是れなり。昔は先輩の批評其の肯綮に中り、武友の褒貶其の急所を打つ、一に皆な其の人の性行の上より判斷を下す、故に非常に刺激を與へり。輿論の制裁斯くの如くなるか故に、劍搏共に壯快なりき。今の世話掛なと丶名つくる者は、正道に導ひかす。却て狡術を敎ゆる弊あり、是れ各自の競爭心より、速成制勝を貪はるの病なり、豈に慨せさるへけんや。

彼れ等か期成は、遠大にあらすして近小に在り。故に恰も老兵か惡癖を新兵に唆き込みて、得たり顏すると一般に近効を誇るの外に、爲す所を知らさるもの丶如し。彼れ等が試合を見るに、見世物的の所作にして、人を笑はせる樣に曲し、聞苦しくも勝敗を口爭し、或は審判に不平を洩らし、疲勞を喞ち、負けたる者の癖として、云ひ譯か間敷、卑劣根性を吐露するのみならす、不作法にも、竹刀を放投け、而小手を脫棄て、道具を踏越へ、或は倒臥し、恬として耻ちす。彼れ等が祖先も、武道達人なりしならんに、彼れ等は祖先の遺風を顯彰せす、却て破壞して、自・武術を翫弄視す、武

道達人なりし彼れ等が祖先は、泉下に憤泣せるならん。

凡そ技藝の巧美は、古人或は今人に及はさるなり。知識の發達は古人或は遠く今人に及はさるなり。然れとも身躰の剛健は、今人却て古人に及はさるなり。德義の敦厚は、今人殊に古人に及はさるなり。夫れ、古人は、剛健敦厚を以て風をなす。随て、我か流義々々の本領を守て亂さす、我が流義々々の機軸を執て譲らす、終始貫徹するの元氣と節義に富みしなり。今人は遊惰輕薄を以て俗をなす。蓋し士風の衰へたるに因せすんはあらさるなり。士風の衰へたる者に向て道義を説く、馬耳東風たるも怪むに足らさるのみ。噫

夫れ道義の敎は、専ら人の情念を、高尙に涵養するより入るものにして、之を例せは「劍太刀いよ〳〵研くへしいにしへゆさやけく負ひて來にし其の名そ」と云ふも、平凡の耳には、何の佳味なかるへし。然れとも、敎育あるもの〻耳底には、殆んと言ふへからさる感情あらんとす。是に於て、師の心裡に、蘊蓄せる耿々たる至誠克く弟子の

腦裏に對照し、恰も忘れたることとの喚起せらる〻如くなるへし。

惟ふに、武道師範の敎法は、精神を以て精神を率ひ、躬行を以て躬行を督し、不敎の間に訓誨し、不言の間に感化せしむること、猶は孔子が曾子に向ひ、吾が道一を以て貫くと云へは、唯矣と、答ふるか如くなりしものなり。

武道師範は、天職を守て世に處し、専ら精神敎育に、熱血を灑注せすんはあらす。

凡そ、子弟及ひ子弟の父母が、希望は、何れの點にある歟、古歌に一筋に人をも身をもおもふかな打つ墨繩の直かれとのみ、夫れ然り。然るか故に、眞率正直なる準繩を履み、以て剛健敦厚の風敎を維持して、其の子弟及ひ子弟の父母が、希望に酬ひさるへからさるなり。然るに世に云ふ劍客なるものは、道義の何たるや、始めより顧みる所ろにあらす唯た己れの名利に、汲々として虛譽を貪ぼり、徒らに人の多きを以て榮とし、無理にも速成を以て得意とし、放演縦弄せしむるにあらされは、己れの好惡に任せ、無暗に吾が技術に傚はしめ、掣肘拘束す、實に老兵が器癖を新兵に喚き込みて、

得たり顔すると一般に、吾が身も賊なひ、人の子も賊なひ、遂に斯の道を賊なひ、紛らんとす。武道の教は、斯の如く淺薄なる人に、委すへきものにあらさるなり。是に於てか、コルドロワー氏の著述を引くも、無用の業にあらさるへし。夫れ、劍術に教師たる者は、恰も國土の敎化を任する僧侶に齊しと言ふへし。故に常に之を感銘せさるへからす、何となれは、血氣の少壯に交接するの多きことと、未た劍術教師の如きものはあらさるなり、而して其の情欲の爲めに、危險を冒し、或は不正の行爲を企つる如き者は、最も少壯の輩に多きにあらすや、夫れ然り。之れが過誤を修正し、或は惡習に陷りたる者を救ひ、以て正道を維持するものは、常に信任を措く所の、敎師の訓戒と、其の威嚴と、且つ之れと相交接するの頻繁なるに如くものはなし。云々

西洋に於てすら、劍術敎師を一種の道師と、認むる斯の如し。然るに世に云ふ劍客なる者は、滊車運轉者の如く、電話交換婦の如く、技術者として世に遇せられ、恬として恥ちす、歎すへきかな。故に我か日本固有の武道を、維持せんには、天職を守らすんはあらさるなり。

當流は、天眞爛熳、唯た夫れ、其の人の天性を發達せしむるを主眼とす。但たし技癖の染めは、痼疾となるへく。所作の忽かせにせは、輕佻となるへく。且つ風紀に害あるものゝ如きは、特に嚴格ユ矯正すへし。

當流は、世に云ふ劍客なる者の敎の如く、放濵縱弄せしむるにあらす、掣肘拘束するにあらす一定の規矩に法とりて、而して其の摸型に泥ます、專ら其の人の天性を啓發せしむるに務め、敢て輙く矯正すへからす。古來道場の掟書に直方之儀、相弟子中にて、彼我間敷事と戒めありき。生中半熟者の癖として、後進に向ひ、喋々直したかる隣は、免れさるものと見へて、而して直し與ふる利は却て直しろこなへる害を償ふ能はさるなり彼の植匠の方寸も草木の性質を見るに在り左れは杉は立つ松は蟠かまる武夫は已れ已れか心ろ心ろにと云ひ百人百種參差として唯た精神の向ふ所ろを一にするのみ

守破離三段の位ひよ達して、而して元に歸すへし。

守は、守つて專心規矩に法とる、是れ一段なり。破は、破つて新工夫する、是れ二段なり。離は、其の守破二樣の區域を離れて、天眞爛熳たる、是れ三段なり。乃ち元に歸す。但た技藝の痼疾及ひ所作の輕佻且つ他流崇拜の如く當流の風紀に害あるものは猶は前條但書の如し

若し、失行者あらんよは、單に一時の過失として、出來得る丈け、人の性は、善なる意味に解釋すへし。曰く汝は惡意を以て爲したるにあらす、去れと汝を知らさる者は、之を汝の惡意よ歸すへし。汝請ふ人に誤解さるゝか如き、擧動をなす勿れと、懇諭するの類是れなり。

凡そ子弟の過誤を修正し、或は惡習に陷いらんとするを戒しめて、以て正道を維持するは、道師の本分たるか故に若し子弟に失行あらんには、道師自ら薫督の不行屆きに由るものとし、内に取ては已れを責め、外に向ては衆に耻ち、而して榮辱毀譽を俱に共にするの至誠を推して人を棄てさるときは、人を惡習の中より救ひ出すに難からさるものとす。餘は本條の意義、一讀明了なるを以て復た贅せす。

凡そ、子弟の善意を以て、言ふ所ろ及ひ行ふ所ろを歡迎するは、其の自信を增さしむる所以なり。而して、之を冷淡よ看過するは、其の發達を壓するに均しきものとす。

夫れ、子弟の善意に出る、言行を冷淡に、看過するは、其の自信を薄くし、遂に自棄せしむる所以なるに依り、務めて、其の善意を歡迎誘導せすんはあらす。然り而して、出藍心に出てゝ、師に優らんとするは、嘉奬すへし。傲慢心に出てゝ、不遜ならんとするは、排斥すへし。之を要するに、泉源を淸うし、士心を固ふし、事々物々、其の機に臨みて、其の善意を啓發せしめ、或は、之を修正し、又は、之を訓誨し、以て、輕佻の俗に趨らんとする、今日の潮勢に逆立して、始めて、武道の本領を發揮するを得べし。

抑々、人を導きて、武藝に練達せしむると、同時に人物を上達せし

むるは、武道の緊急主眼とする所ろ。若し、此の主眼を失はゞ、武藝と稱するに足らす。故に、常に、高廣なる感想を、惹くに注意せさるへからさるなり。

凡そ、人物養成の事は、古人若しくは今人に就て、標準を設け、之れに齊しからんことを思ひ、又は、之れに優らんことを思ふの厚きに、成就するものとす。例せは、氣宇の大小は、技藝の大小をなし。技藝の大小は、氣宇の大小をなす。乃ち、巍々峨々たる高山を仰き、之れに譬へんと欲せは、已れか氣も、亭々として高き感あらん。渺渺漠々たる大海に臨み、之を呑み干さんと欲せは、己れか心ろも、洋々として廣き感あらん。是れ此の、高且つ廣なる感想は、古來英雄を山間孤嶋に生せしむる所以にして、孑々たる小池を愛し、細々たる函庭を翫ふ、都會人の夢視する能はさる所ろなり。隨て、大取りより小取りと云ふ、町人根性にて、チョッチョッと手先き計りにて、分を掠めるに過きす、都會輕佻の弊、氣宇の小なるに因せすんはあらす。

先師の常話に云へるあり、曰く、後進を薫陶するに、薫陶を受る後進か、善く從順に

して、善く理解するほと、樂しきものはなしと。今や、本館學生中に就て、理解力の深き、記臆力の好きは、温故學舍を以て、最となす。概ね、雄毅なる耐忍力に富み、確實なる志操を有し、世論に惑はす、政治に拘はらす、專心、文武一途に勵精す。而して、演習するや、孜々として講窮し、倦ます。欣々として相手を、厭はす。遞々疲勞せし場合と雖も、未た曾て、師令を辭せす。蹶然呼應して起つ。隨て、進歩の迅速なる、彼の如し。或は、講話長座の場合と雖も、未た曾て、容儀を紊さす。肅然敬聽して守る、隨て、技倆の意表なる、此の如し。猶は、稟性好武、殆んと教へを待たさるものあり。加ふるに、軍人たらんと欲する、進取力を以てす。勇にして、而して温なり。質にして、而して義なり。是を以て、特に、望を屬し、且つ衆の標となす。果せる哉、此の種の人物、年々歳々踵を接して、武官となれり、後進は、宜しく之を模範とすへし。初め、屢々、温故學舍を覗くに、跳擲康娯の間、自ら勇壯活潑にして、他日快刀亂麻を斷つの氣象も亦た、太刀先きに顯はれて磧々たり。但た惜らくは、斯の道の敎として、導く者なきか如し。此の一團青年にして、吾れに訓練するを許さは、儁

秀を遺るに難しとせす、進んて先師の業を再興するを得んと、企圖せり。古語に、天下の英才を得て、之を教育するは、君子の樂しみなりと云へり、窃かに、之を教育する積りと云ふ、積り其の者か、常に、寝食を忘れしむるに至れり。且つ又た日本全國の雄猕たる將校の子弟に對して之れか爲めに寝食を忘れさらんと欲するも得へけんや。

昔て、或る講堂に會す。諸學生は、暮況に紛れ、空腹を抱へ、恰も烏合の兵か、潰ゆる如く、蜘蛛の子か、散る如くなるに、本館生徒某は、殿して退かす、人靜つて、後に進み來り、久濶を逃へ、師弟の禮を表す。其の言辭の間に、再たひ、本館へ出席する能はさる事情は、判然たり。左右の人々讃歎して、曰く、武道の要、師弟の誼、斯の如くならさるへからす。今日世間の書生を見るに、逆旅主人多般態出門轉盻成路人と、古人の歎せし如く、昨日甲校を去りて、乙校に入りたる生徒は、今日途上相遇ふも、舊師に禮せす。輕薄極まる今日に於て、七尺去而不踏師影と云ふ、武夫淳厚の美風、尚ほ存するを見る、振氣舘の風習、推して知るへしと云ひき。斯く例を舉け來れ

は、師を以て、自ら居るの嫌ひありて、其の位地に立つ者としては、云にくきのみならす、高一も、誤解せらるれは、自ら驕傲にして、人に尊敬を求る者の如くなるへしと雖も、併しなから、知識技藝の授受は、いさ知らす、武道の本領は、道義心の啓發を、第一とするものなれは、師弟の間に、禮儀作法なかるへからさるを說くも、亦た、止むを得さるに出るを諒すへし。夫れ眞正なる武道は、人をして、常に、高尚の思想を抱かしめ、善良なる敎習は、人をして、常に、優美の言行を保たしむ。思想、既に高尚なり。禮儀作法自ら備つて、野卑粗暴ならんと欲するも得へからす。言行、既に優美なり。進退應對自ら整ふて、倨慢無禮ならんと欲するも得へからす。左れは、本館に於て、修練したる人は、注意萬端ニ渉て、他の標準となすに足ると、學校其の他に於て、讃歎せらるゝ樣ありたきものなり。是れ即ち、眞正なる武道を表彰する所以にして、須らく、武夫たる者の當に務むへき所ろなりとす。

武力は、内に心膽勇猛自持すへし、外に自負ふるへからす。體勢は、優に天眞爛熳自然なるへし、乙ニ容體ふるへからす。而して、自つ

から風高凛然として衆に超へ、品位泰然として群に抽んづる所ろ、即ち、武骨凛烈なるものなかるへからさるなり。一二の例外なきにあらさるも、概して、人々生涯の浮沈は、風采態度に依てト知せらる。乃ち、武官は、武官らしき風采なかるへからす。文官は、文官らしき態度なかるへからす。然るを況んや、心事に於けるをや。時に、猛省せすんはあらさるなり。剣掃一則に、曰く、身は嚴重を要し。意は閑定を要し。色は温雅を要し。氣は和平を要し。語は簡徐を要し。心は光明を要し、量は濶大を要し。志は果毅を要し。機は愼密を要し。事は穩當を要すと。須らく日々心思言行を此の十要目に較正して、日新の功を積むへし。古への武人は、自己の言行日記を懷ろにし、事々物々直筆して、後何時にても、之を師友に見られ、耻る所ろなき様に、君子愼獨の徳を養成したるものなり。尤も、看讀寫作は、武夫の習慣上に於て、嗜み來れり。蓋し、多看せされは、

陋に陷るへし。温讀せされは、忘れ失ふへし。抄寫せされは、記臆せさるへし。作業せされは、成功せさるへし。故に、務めて、先師貽範の書を謄寫し、武友知音の名を筆記する等より、看讀寫作の習慣をなせり。

那翁は、戰史を研窮するに、唯た、之を通讀するに止めす、常に、筆を執て、一々之れに評註を加へること、恰も、朱子派漢學者流の如くし、兵事上に於ける、判斷力を養成し、而して、天稟の如く、之を應用せしものは、實に、非常なる勉強力に依て、得たるものなりと云ふ。左れは、日々に、心思言行を較正すると、同時に、看讀寫作の習慣を造り、延ひて、兵事上に及はすへし。

凡そ、人傑は務むる所ろ、必らす群衆に異なる所ろあり。克く、人の堪へ難きに堪へ。克く、人の忍ひ難きに忍ひ。克く、人の爲し難きを爲す。是れなり、而して幼者は、慈母の家庭涵養に之れが素をなす、嚴父は、之れに與からさるか如し。例せは、病兒あらん、慈

母は、之を膝下に押へて、藥を下す、嚴父は、目を蔽ふて震慄たり。隨て、健兒自ら武に勇めは、却て、之を姑息に危險視するにあらされは、苛酷に、之を懲戒視し、續くに、叱責を以てするの過激なしとせす。慈母は、極慈極愛下藥の勇を移して、克く、健兒を薫陶し、克く、文武に勵精せしむ。若し夫れ、世に云ふ、繼母なれは、其の兒多くは、卑屈根性を免れす。是れ即ち、家庭教育は、母其の人に存するを証するに足るへし。是を以て、武道の奥旨は、慈母家庭の涵養に基くもの多し。噫父子の間は、善を責めすと云ふと雖も、世の父兄をして、子弟を視る、慈母の如くならしめは、復た、何そ、武道の振起せさるを憂へん。」

菅原大臣の母のよみける歌に、久方の月の桂も折るむかり家の風をも吹せてしがな

右の一首を引て、以て、前説を確かめんとするに先たち、古歌の意味を解釋するは、無用の業にあらし。菅原の母のよみける、久方の、は、月の冠辭にて秀才進士の及

第を讃美するに、月の桂も折り驕かすと云へる、故事あるに依り、之をあやなして、月の桂も折るばかりと云へり。家の風をも、は、家風なり。吹せ、は、其の家風を受けて、儒家は儒家、武家は武家、夫れ〲、家風々々に依り、箕裘の藝を襲き、以て、祖先に耻ちす、父親に劣らす、勝れ、勝れたる人になりて、家聲を揚げがしと、切に切なる希望を、てしがな、と述ふ。大伴宿禰家持が子に喩しゝは劍太刀いよゝ研くへし古へ由(前に出づ)云云我が祖先の遺風を述へ、以て、我か家は、斯の如く、忠孝の芳名を負ひ、尚武の勇名を負ひ來れる、立派な、潔きよき、家柄なるぞ、大伴の、氏と名におへる、ますらをともよ、海行かば、みつくかばね、山行かば、草むすかばね、大君の側に死なめ、我か家の、腰に取り佩く、劍太刀は、由來尚矣そ、故に、之を敬重して、愈々、劍太刀を研磨し、益々、武道を修練して、蘊奥を極め、緩急あれは、義勇奉公、以て、祖先の遺風を顯彰すへしとなり。之を讀て、誰れか感激せさらん、若し、之を聞て感動せさる者は、吾人の友にあらさるなり。却說、菅原の母の歌と云ひ、大伴の父の歌と云ひ、何れも優劣あるにあらすと雖も、善く、幼

見を感化し、親子倶に共に一つ心ろになり、剛毅凛烈寒暑風雨は、ものかは、困苦缺乏は、何のそのと、猛に奮勵し、一心不亂に、目的を達成するは、前者の切に切なる希望的の訓導、善く、功を奏すと謂はさるを得さるなり。併し、是等は、本館に於ける、現在少壯の年輩に向ては、實に無用の談なれとも、將校生徒及[illegible]者の母堂を、延別請武會に招待する所以の理由を明かにし。併せて、家庭教育は母其の人に、重きを置く所以の理由を確むと云爾。

第五章　體育

夫れ、體育の必要は、識者の公認する所ろ、更に辨せすして可なり。但た、其の運動を行ふと、同時に制勝術に長し、以て、精神を發育せしむる、一擧兩三得なる、術を擇はさるへからさるのみ。我々の將士たらんと欲する、目的に於て、體育運動法の善良なるものを求むれは、未た、劍搏兩道を措て、他に、其の完全無缺なるもの在るを見さるなり。然り而して、諸種の運動法は、學ふに足らすと云ふにあらす、總へて、體育の裨益は、暫らく其の何種の技たるを問はす、此の習慣より、彼の新習慣に移り、彼の習慣より、復た、他の新習慣に移る、毎に、著大の効益を見るものとす。故に、劍搏兩道を吾か精神に立てゝ、而して諸種の運動法も亦、學んて時に習へは、身躰の發育をして、益々、最高度に達せしむへし。

凡そ、武道の範圍に屬するもの、古來劍搏に次て、弓馬槍術及ひ角力水練潜賦の如きも、亦多少、學はさるへからさるものなりき。今ま、之を躰育上より、観察して、其の要を摘示せんに、先つ、弓は、臂の屈伸を善くし、胸膈を擴張し、視力を精確にするの効は、正に之れあり。然れとも、青年有爲の學生は、學ふへき業にあらす。其の業務もすれは、徒らに、飲食を賭し、優遊の弊を醸す病あれはなり、馬は、受動的の運動にして、消化機の作用を助け、意氣を爽快にす。槍は、腰の据へ具合ひ、堅固なると、臂力の堅實なる益は、之れあり。然れとも、今は普く世に行はれす、而して、突きを入るゝ、筋通り、單に、一筋なるが故に、武級一段を隔つれは、後進は、一本々突きを入るゝ能はす。先進は、待て、之を膝避し、之を防拂し、以て、返突する等、愉快なるも、後進は、割合ひに、面白ろからす。角力は、遊技と雖も、亦た武技の列に叙するを得へし。而して、

躰育上に其の益少小ならす、其の性の、劇烈に過くる嫌ひあるは、相撲勝負の法として、肢體の地に觸るゝを、敗となすか故に、無理に、抗拒して倒れ重さなり、挫傷するのみ。且つ、地取りせすして、直ちに、勝負を試みんとするか故に、強硬にして、四肢を逆に捩(コヂ)り、危害を生するのみ。柔術は、先つ之れか危險なる部分を除き去て、應變滑脱の術に、圓滿自在なるもの、即ち是れなり。水練は、上肢の翼張下肢の跳躍を以て、浮游するか故に、諸筋を發育し、且つ、肺臟を强健にす。而して、人の水難を救ふの必要は、何人も同しかるへしと雖も、殊に、海陸軍人たらんと欲する者は、須らく學はさるへからす。西南の役、明治七年臺灣の役に實驗するに、亂流前岸に達し、或は、敵舟を奪ひ、以て、拔群の功を奏したる者多し。尤も浮游するに、腹力を要するは、一たひ試みたるもの、肯了する所なり。何となれは、浮游しなから、嚙きて息きを吹出せは、必らす、沈むを以てなり。夫れ、浮游するに、尚ほ腹力を要する斯の如し。此の理を推すも、我か練體柔術の上に於て、終始腹力の脱けさるを必要とする所以を解すへし。(戒意の臍下丘嚢の如きものあるを云ふ如めか)漕艇は、橈櫓何れも四肢平均の發育に與かりて、効益あり。而して、橈櫓は、一

人若しくは數人にて、胸心手心の呼吸深味あるへし。橈漕(オール)は三五七人を要して、協同一致の働らき、意氣揚々たるへし。孰れも、熟練するに從ひ、臍に根さして、腰より漕くものなりと云へり。次に、柔軟體操も、務むへし。器械體操も、勵むへし。最も、障害物競爭及ひ遠行等は、時々催擧せさるへからす。試みに思へ、短兵奇襲を行なはんに、敵は、必らす、險に據り、壘を高ふし、溝を深くし、柵を樹て、備ふるは明かなり。左れは、第一に、山川跋渉の勞と、障害百難の險に、打克ち。第二に、實敵に打克つへきなり。而して、接戰は、僅かに、二三分時間のみ。戰ひ克ては、追はさるへからす。若し利あらされは、退かさるへからす。占むれは、守らさるへからす。縱横奮擊し、戰ひ疲れて、復た、戰ひ、櫛風浴雨困苦缺乏、殆んと、言ふへからさるものあるは、戰ひの常況なり。然るに、今ま彼の板間裡に於て、巧みなる者をして、數里歩行せしめは、面色忽ち衰へて、活氣を失ひ、深淵に臨ましむれは、青くなり。歸れは、不紀律なる狀をも、耻ちす、倒眠すへし。斯の如く不心得の者は、如何ほと、劍搏に巧妙なるも、曲藝者を以て、目すへきのみ。決して、達人を以て、聰るすへからす。若し、之れに達人の、名

を貸さは、異日腰脱け武者の笑を取り、併せて、武道の上に迄も、汚辱すれはなり。故に、劍搏を學ふ者は、須らく萬藝に渉て、如何なる事柄も、人に後れじと、覺悟せすんはあらさるなり。

抑々、劍搏兩道は、萬藝に應用し、得て以て、其の境遇に於ける、最上の地位を占むるものなり。即ち、最上の分別、最上の行爲、一として、人意の表に出さるはなし。是れ、所謂武士道の本領に於ける、廉耻節操自信自重義勇公正忍勉等と名つくる中心所愛の高尙なる地位に、進むものあるか故なり。於是乎、劍搏兩道は、獨り、體育上に著しるしき効あるのみならす、修身上に著しるしき効あるを知るへし。然らば、其の運動を行ふと、同時に、制勝術に長して、以て、精神を發育せしむる、一擧兩三得なるもの、劍搏にあらすして何ぞや。

甲冑の遺物に徵すれは、英國人は、古人小にして今人大なり。日本人は、古人大にして今人小なりと云へり。其の因は、一に、品行の正否、及ひ、運動の有無に、基つくものとす。左れは、吾人は、品行最も嚴正にし、運動も亦た、活潑にし、以て、人體復古を

謀らすんはあらさるなり。

今の普通体操は、瑞西人に始り、各國も、之れに多少の改良を、加へしものなれは、幼童及ひ女子の躰育は、之れに托するも可ならん。然れとも、青年有爲の男子に於ては、之れに滿足せす。必らす、他の活潑なる演習を行はんと欲し、且つ、將來に無用なる、技藝を好まさるは、勢ひの然らしむる所ろなり。此の故に、再三言なからも、其の運動を行ふと、同時に制勝術に長し、以て、精神を發達せしむる、一擧兩三得なる、劍搏兩道の必要は、智識の發達と、志氣の伸長とに、隨て、益々切實なるを見るへし。我か劍術基本は、兵式號令を用ひて、兩個相對し、幾百名にても、一號令の下に運動し。熟練するに從ひて、活機活動的の演習となり、勇壯活潑なる運動なり。志氣伸長的の演習にして、全身周到する運動なり。即ち、体に根さして、腰より働らくが故に、身體手足眼口等、一に皆な同時に働らかさるはなし。殊に、肩關節を圓滑にし、胸膈を開張し、肺臟を強健にし、歩法を自在にし、氣息を永續す。彼の一部一肢の働らきをなす、球竿棍棒若しくは紅璽（フェンシング）流劍術や、興行的拳突（ボックシング）の比にあらす。而して、將來の有用と云ひ、活潑の

演習と云ひ、青年有爲の學生に適應せる、無貳の運動法たるを斷言するも亦た、敢て溢美にあらさるなり。

元來、大体に就き之を云へは、西洋の悠長なる運動法は、我か日本帝國臣民の慓悍なる、性質に適せさるなり。蓋し、小は慓悍を以て立ち、大は悠長を以て立つ、是れ、萬物生存競爭の理に於て、自然なりとす。是を以て、日本は、未た、米飯を喰ひ、味噌汁を吸ふの間は、我邦固有の劍撲兩道を、諸運動法の首位に尙置し、依て以て、祖先の遺風を負ふ、天性を補育せすんはあらさるなり。

却說、社會終局の競爭は、躰力ま在りて、遠距離競走なり。其の近距離に於ては、左まて、躰力の强弱に關せす、素早き者、往々勝を僥倖せさるにあらす、然れとも、遠距離に至ては、躰力の最强壯なる者にあらされは、大勝を占むる能はす。今ま、此に例へは、躰力甲乙丙の差ある者あらん、相約して、近距離を一廻りとし、遠距離を三廻りとし、以て競はんに、丙は一廻目迄は、素早く見ゆるも、二廻目には、足も手も動かす、落伍すへし。乙は二廻目迄は、可なりなるも、三廻目には、氣も息も繼かす、落伍すへし。甲

は之に反して、最初の一廻或は後れ、二廻目も亦た或は尙は未た先んせす、而して最後の三廻目に至ては、獨り挺出全勝を占むへし。社會終局の競爭即ち是れなり。之を試ろみに、陸海軍將校の服役年限表を、概括して、以て、前例の競走に比すれは、士官は一廻(四十歲以上五十歲以下とす、)佐官は二廻(五十歲以上六十歲以下とす、)將官は三廻(六十歲以上七十歲以下とす、)に、堪ゆる躰力を有する人物なりとす。蓋し佐は將より、尉は佐より、各服役年限の短縮なる丈けに、躰力も亦た其れ丈けなるは、爭ふへからさる事實なるか如し。夫れ、同期生徒にして、同一の智育を受け、同一の將校團に入り、而して、一は七十歲迄も、心勞躰勞共に克く堪へ、一は四十五歲內外に止まる、事由の根原は、智力にあらす躰力に在り。西哲曰く、活潑なる精神は、强壯なる身体に寓すと。即ち人の元氣は、强壯なる体力を待て、始めて、振興するものなるを云ふ。然り而して、躰力の强弱は、人生大發育期に於て、充分に、其の身体を鍊揑し置かされは、後ち悔ゆるも、既に及はさるなり。

夫れ、千軍万馬の衝は、元氣萎靡せる人の、當るへき所ろにあらす。國家干城の重は、身体虛弱なる者の、任すへき所にあらす。然るに彼の受驗的に合格すれは、足れりと爲す、

（昨昔甚だ多し）輕薄なる者の如き、若しくは、器械的に依頼すれは、餘れりと爲す偸安なる者の如きは、假令ひ、一時の僥倖を得るも、焉くんそ克く偉勲を千載に輝やかし、芳名を青史に留るを得ん。加之、海軍々人の如きは、平和の日と雖も、海外に往て、一國を代表す。若し、豪氣勃々たる鐵骨男子にあらすんは、他國の侮りを受けん。若し之を思はす、徒らに、當世風の才子を氣取り、以て、身を安逸に置き、以て榮を顯達に貪はらんとするは、利已主義一片にして、忠君愛國の精神なき者なり。好しや、小銃の鋭利を恃み、大艦の堅牢を楯とせんか、其の之を指揮する者は、誰そ。幼時最も身體を鍛揑せし、最も強壯なる體力を有する人物にあらすや。抑々、機械と技術の進歩は、日々に新たなりとするも、其の激戰に際して、最後の運命を決するものは、強壯なる身體に寓する所ろの、活潑果敢なる精神のみにして、今日も、ネルソン時代も、實に此の一點に至ては、曾て異なる所ろなし、硝烟摸糊として艨艟其の間に隱顯し、彼我何れをも辯せさるか如き場合ひに、神色自若とし、備さに學理を應用し、自在に艦隊を指揮し、器械に役せられす、器械を使ふ者は、所謂活潑果敢なる精神、唯た、是れ一あるを要するのみ。熟練經驗は、之れか補助たるに過きす。何となれは、若し、此の精神に乏しき者をして、艦長たらしめん歟、魂飛ひ氣沮み、信號の誤解、視覺の不明、果斷の缺乏等、擧けて言ふへからさるものあれハなり。

顧みれは、世上に、劍は一人の敵學ふに足らすと、云ふ項羽か語を取て、以て、劍を拒ひの辭となす者ありと雖も、此の語たるや、項羽其の者にして、始めて壯語となすのみ。若し暴漢路を遮り、前に立たは、恐怖之れを避る歟。苟しくも、天下有爲の學生たらんものにして、悍然之れを排し、直進するの氣力なかりせは、何を以て理否を正さん。何を以て敵國を鬪はん。吾人は事を好む者にあらす、殊に、暴行毆打は、刑法の禁する所ろなりと雖とも亦た、氣節の上に就ては、此に迄も論及せさるを得さるなり。抑々、青年十八九歳の頃ろは、猛威人に迫る如く、見へる程なるへきものなるに、暴漢路を遮り、前に立つに、悍然之れを排して、直進するの氣力なかりせは、他日、理否を正し、敵國を鬪ふ、氣力も亦た、之れなしと謂はさるを得さるなり。或る人の話に、支那印度等の内地を旅行するに當ては、我れに無禮をなす者あり、我れに武藝の嗜みあれは、蹶起と

して、拳骨二三を彼れか頭に加へ、又は、之を加へんするけぶり迄にて、彼れは伏謝し、事の濟むへきに、腕に覺へのなき悲しさには、生中に彼れを懲らさんとして、却て、反抗せられては、厄介なりと、先きの先きまても、取越し苦慮し、姑息にも、辱しめを忍ふの手段を取れり。左れは、項羽か壯語も、當にならすと嘆聲せしことありき。

凡そ、宇内萬國の教を設るや、三つあり。而して軆育其の首に居る、豈に偶然ならんや。實に、人は、元氣なかるへからす。元氣は、人の氣力なり。氣力は、人の軆力より生す。而して、軆力の伸張と、腦力の發達と、相隨伴するものたるは、前述するが如し。本邦人は十中八九常に病者の如くにして、事物に倦み易く、元氣の缺乏、殊に甚たしとす。之を天然に委して顧みさるは、國家の爲めに、富强を謀る所以にあらさるなり。

夫れ、戈は氣を以て雄く、功は勇を以て成る、單に、個人の爲めに謀るも、鄙[illegible]に、重んすへきは軆育にあらすして、何そや。軆健にして德厚く、智豊にして識富み、忠孝仁義の道を辯へなは、顯榮の途に行くを欲せさるも、顯榮の堂に登るへし。何分にも、軆健ならされは德智も亦た空し。

西哲、又た曰く、弱き身體は、心意に命令し、强き身體は、心意に服從すと、蓋し、强き身體には、積極的一層活潑なる精神を有するか故に、其の自動に追隨服從しつゝあるを云ふ。之れに反して、弱き身體には、消極的一層懶惰なる精神を宿するか故に、其の精神に命令せさるを得す。曰く、汝は奮發して之れを爲せ、曰く、汝は力めて斯くせよと、無理に加鞭するを云ふ。是れ、弱き身體の癖として、瘦せ我慢に、神經の增長する所以なり。神經も亦た、或る注意を、智力の硏磨に中集せしめ、一時は、頗ぶる鋭敏なるか如くも、心意自動的の思索にあらすして、心意他動的の作用なるを以て、耐忍持久する能はす。神經の作用に依て、得たる記臆は、忘失し易しとす。

是に於てか、世人は、軆育の必要を知れり。劍搏の効驗も、亦た知れり。而して、劍術と云へは、骨を碎き。柔術と云へは、息を絶つものゝ如く。速了せらるゝも、無理ならぬ感情なり。畢竟、未熟若しくは俗に耶魔師と云ふ、類の者、早急に施して、即功を衒はんと欲す、故に、生兵法大疵を生す。

元來、柔術はやわらと云ひ、和術又は體術とも云ひ、順彼制勝の術なり。彼れに順ひて、

彼れを制す、即ち、彼れの知加長を借りて、彼れに勝つ迄なり。其の初めや、形を以て、技を教へ、身體の運轉、筋骨の發育、力量の增加等、多年に漸を積むに於て、始めて、成育の良功を見るのみ。

術語に草木の成長と題して、以て、今年培根し、來年を俟つ、尙ほ早急に失す。來々年の成熟を期すへしと。蓋し、其の芽を引き延はさんとすれは、其の根を枯らすに依り、次第々々に、自然の發達を補育する迄を度とし、以て、一朝一夕に望むへからさるを訓誡せり。故に、初心は、進歩の遲緩不滿足に思ふ程なるを適度とす。猶は、開戰の初めは、遲緩にし、最後に急射突貫する如く、控御して、指南せすんはあらさるなり。

劍撲兩道は、試合ひ應用こそ、其の天性に一任し、其の天性をして伸長せしむるを要訣とすと雖も、大範圍に於ては、道義及ひ生理上の監視を嚴密にし、擧止動作一皆な之を律するに、軌範を以てし。以て、彼の暴力を弄し、弱小を凌き、或は初心に不叮嚀なる如きは、一々懲罰ふ處す。

武夫は、思想淡泊なるか故に、紀律の節制を確守し、德義の重要を信念し、以て、規則

正しく遵守するものなり。随て、茲に一人の新入門者あれは、武夫は、同胞兄弟一人を增すの歡迎心、自ら、面色に顯はれて、恰も、手に手を取り、游泳助手する如く、極めて叮嚀にするものなり。

武夫は、起居動作飮食其の他万般の事に就て、規則正しく節制するものなり。又た、規則正しく行爲するにあらされは、他日軍門に入て、良將校たる能はさるなり。

我か武士道に於ける練體柔術は、固より、彼の職業と、伍を同うして、語るへきにあらすと雖も、猶ほ、獅子舞ひ角兵衛は、何にか爲めに、軟々として骨なき者の如くなるか。相撲取り大關は、何にか爲めに、肥滿重鈍なるか。併せて、之を研究せさるへからす。先つ、獅子舞ひなる者は、一部一肢の技藝を、朝から晩に、晩より曉に及ふ迄、三百六十五日、繰り返し、繰り返し、仕付けて、繼くに怒を以てし、鞭箠を以てし、以て、苦心苦役を極め、滋養を與へす、快樂を取らしめす、萬條の神經を以て、其の身を束縛するの結果、遂に、精盡き、力屈し、小人島人の如く、消殺的の畸育となれり。相撲取りは、之れに反し、柔術に似て、活機活動に抗爭す。其の勝負は、人々の得手に、限りなきに

あらさるも、其の施術に至ては、千差萬別、決して一様ならす。一勝一敗毎に、新思想と進取力とに、誘導せられ、意氣爽快たり。而して、朝は粥を啜て、僅かに二三時間、地取りをなし、終て、微温湯に、一時間も、神經系統を弛緩せしめ、馬食牛飲するの外は、文字を知らす、時事を知らす、天下無用の氣樂者なるの結果、遂に、骨太り、肉肥へ、別人種の如く、膨脹的の躰育となれり。一は、膨脹的に過き、一は、消殺的に失ひ、共に、軍務に用ゆへからさるのみならす、其の一生の事業は、人の遊覽に供するに過きす。浅ましと云ふも愚かなり、說て、此に至れは、我か劍搏兩道は、高尙なるか上にも、高尙に仕向け、決して他人の縱覽等を許さす精神教育の素養を專一にすへし。

古來、始業期（入門）を、先つ志學三五の春と定め、其の十三四歲以下は、寒暑風雨に堪へると、人の中に出るを以て、稽古とする位ひに仕向け、更に撿束ヶ間敷き、授業をなさす。生理と德操に乖戾せさる限りは、何事をなすも、褒めこそすれ、決して懲戒ヶ間敷き、訓誡をなさす。漠然たる武道武藝と云ふ、範圍内に游泳して、毫も、苦心を感せす、愉快なること、猶は、魚の深淵に於けるか如くし、而して、歲月を經るに隨ひ、知らす識ら

す、體馴れ、技熟し、氣大に伸ひんとす、尙は互格勝負を許さす、其の人の大發育期（髮皆はりする頃ろより鬚髯の生する頃ろまて）を待て、始めて、充分の修業をなさしむ。即ち、開戰の初は、遲緩にし、最後に急射突貫すと云ふ、其の機會は、乃ち、此の時なり。此の時躊躇すへからす。將校（即ち師範）は劍を振て、督戰すへし。實に人の大發育期に於けるや、志氣雄々として、伸長しつゝあるが故に、忽ち、苦もなく、上達の地位に進むものとす。之れより進步駸々たること、恰も、朝日の昇るが如し、習ふより慣れろの譬へに漏れす、幼習自然の結果は、此に至て、若々特得の技倆を顯はし、人羣の表に出つへし。又た、人の年齡に拘はらす、藝の上にも、此の數あり。例せは、春夏秋季を經過し來りつゝ、冬季に必至專修する是れなり。古來寒稽古の効は、此に在て存せり。而して、寒稽古の進步に、著効あるや、天下六十餘州、四十二萬の士族が、均しく經驗し、來りし所ろにして、今も尙は、四十歲以上の人士に、問はゝ、必らす、其の効能を稱するを、以て証すへし。尤も、寒稽古は、僅かに、三旬間なりと雖も、稍々、徐ろに、春夏秋を經過し、來りて、俄かに、劇しく、競ひ、專修するか故に、著しるしく進步せり。所謂寒稽古は、急射突貫、時機

の意味を有すと云ふへし。世人が、柔術は、幼習に如かすとなす、所以を案するに、蓋し、苦もなく、進歩せる結果の、斯の如くなるを見て、云爾するのみ。

若し夫れ、幼習に如かすとて、其の體力をも顧みす。早急に施して、即功を呈せんと欲せは、或は、消殺的の、躰育に陥ゐる憂ひなしとせす。故に、涵養の功は、氣永かに、天然を期して、以て、幼者の精神上に、快樂を與へ、快樂の爲めに、苦痛を知らさる樣に仕向け、且つ、幼少喜新の性を利用して、爲し得る丈け、日々に新たなる、感情を起さしめ、飽舊迎新の中に、進歩を薫督せさるへからさる等、須らく傅官の任を、負はさるへからさるものとす。

所謂快樂なるものは、困難の裏に、存在するものなれは、隨分に、困難は與へさるへからす。夫れ幼者の戲嬉するは、其の遊戲の困難に、打勝つと云ふ、要素を有す。何となれは、遊戲も困難に、打勝つと云ふ、困難なきに至れは、戲嬉せさるものなれはなり。此の故に、困難は、劍搏共に、相應に與へて、其の困難に打勝つ、快樂心を惹き與へる等の、呼吸は、先進たる者の工夫を要する所ろなりとす。但た、笑與の如きは、吾人か靈

場となす道場に對して不敬なるのみならす、生理上或は舌を嚙み、或は氣絶するの憂ひあり、故に、之を嚴禁すへし。唯た聊か、面白き樣に仕向けつゝ、困難に打勝つ要素を求むるは、妨けなしとす。又た、青年以上には、聊か激怒奮發する樣に、仕向けつゝ、引き立る等の、注意なかるへからさるなり。

家庭敎育に於ても亦た、然り、或る時間は、復讀し、或る時間は、運動し、或る時間は、何々すと、規則正しく、制限を設くると雖も、之れか爲めに、苦心せしむへからす。之を履み行ふを以て、自家の名譽とし、中心の快樂とし、常に、倦む所ろなき樣に、仕向けさるへからす。而して、企望を愉快に、持せしむるを要す。假令へは、來年優等滿點を取て、見せんと、幾分か、氣を負ふ、是れなり。若し、來年も落第する歟と、危むときは、苦心苦慮遂に、志氣伸長せさるなり。猶は、年重ねたる、人の早く老朽するは、前途の絶望、或は家事の煩累、或は品行の不正等、他人に明言すへからさる、苦心に傷害せられたる結果なるにあらすや、夫れ然り、然るか故に、企望を愉快に、持せしめすんはあらす。古人も、忿を懲し、慾を塞くを以て、養生の要訣となせり。懲忿は、惱み、若

しくは、痼(イカリ)を去るの謂ひなり、塞慾は、情若しくは物を絶つの意なり。天正の頃ろの養生法に、曰く、氣を盡し、心を苦しましむる事、第一の戒に候、珍物美味連續の飽滿夜間の過食等第二の戒に候、腎精を竭し、水源骨髓を燥らす儀、第三の戒に候、云云翠竹院道三、天正十四年、丙戌六月、村上次郎右衛門尉殿とあり。第三の戒は、青年にして、一たひ破れは、忽ち阿蒙となりて、精盡き、肉落ち、骨は枯れ、眼は窪み、前途負望の人物となる能はさるなり。其の第一、第二の戒の如きは、害なきにあらさるも、青年は、之を回復するに難しとせす。又た、或る史に依れは、昔し大和の國に、百二十歳の老翁ありけるを、義光朝臣、召して前代興亡の事とも、聞んとせられしに、老翁は、去る世の中の事は、一向に存せす、唯た、人は思ひを苦しめす、心に適せさる事は、強て爲ささる樣に、心掛くれは、老ひて益々壯健なりとの、傳を守れる迄なりと、述べしかは、義光朝臣は、大に、不興にて、汝の長壽法は、世の志士に、不奉公を勸むる方法にして、且つ、今日に、何の益もなきものなれは、我れは聞くを欲せさるなりとて、其の老翁を逐ひ返さしめたりと云ふ。明治の今日は、工夫に工夫を凝らし、心慮に心慮を盡して、優

勝劣敗、個人競爭の渦勢に、立たさるへからす。是に於てか、躰育の必要、愈々切實なるを見るへし。

元來、身體の强健なる時は、一の知覺、直ちに類似の知覺を惹起し、一の觀念、直ちに、是れと論理的(ロジツク)關係ある、他の觀念をも引出し、圓滿たるへしと雖も、身體の强健ならさる時は、諸種の知覺、及び觀念は、個々別々にして、推窮すへき極點にまて、達せすして止む、唯た、徒勞を重ぬるに過きす、文明の人は、多忙の爲めに眩暈するも、閑暇の爲めよ欠伸すへからす。左れは、今人は古人より、一層筋骨を鍛錬して、以て、事に當らさるへからさるなり。

躰育の必要を忘れて、智育の發達を幼者の腦に課し、以て役することの過度なる時は、腦の積量は縮少し、且つ腦漿は竭盡し、勢ひ他の精分を吸ひ來て、腦の働らきを助けさるへからさるか故に、身躰は發育せす、智力は早熟して、頗ふる怜悧なるか如くなるも、或る度に達したる後ち、俄かに其の進歩を停めて、次第に健忘し、愚鈍に變する者、多くは店頭の丁稚小僧に見るにあらすや、丁稚小僧が爲めに謀るよはあらすと雖も、商家に

て武藝を嗜む者あれは、家業を怠る如く見做らすは、誤了なりと云ふへし。夫れ何人と雖も、其の好む所ろを奪ふ時は、空しく其れ丈けの手を明けて、徒ら遊ひに日を消すへし。何となれは、間斷なく家業に從事するは、到底耐ゆへからさることなれはなり。左れは、其の好む所ろは、學はしめて爽快の心ろを以て、其の缺勤を償ひ返へさしむるの工夫は、商家に取ても利益ならんとす。然るに世には、堂々たる士家にして、武藝に費す時間を吝みて、却て丁稚小僧に等しき、徒ら遊ひをなす者あり、是れ思はさるの甚たしきものならすや。總へての精力を智育一方に集注して、躰力を錬搥することなきは、精力を竭盡し終る基ひなれは、規則正しく休養せしむるを專要とす。

吾人の所謂休養は、必らすしも無爲を意味するにあらす、善く其の勤働を轉換するを云ふ。

夫れ、吾人か武藝に費す時間は、勉學に費す所ろの休養たり。勉學に費す時間は、武藝に費す所ろの休養たり。要するに個人競爭の激烈なる今日に在ては、太古の如く、悠々として光陰を徒費するは、時勢の許さゝる所ろなりと覺悟して、以て時間を智育躰育の

上に割り付けさるへからさるなり。抑々智育躰育兩者其の權衡を得されは、神經過敏に失して、老婆の念佛同樣に愈々讀みて、益々措く能はす。遂に神童化して、馬鹿となり、卒業式は變して、送葬式となる。皆な是れ躰智兩者の權衡を得さるより、生するの患たり。老者も亦た健兒と相伍し、遊戲運動するは保養上缺くへからさるものとす。然れとも老者戶外の遊戲は、大方の嘲りを招き易く、幼者庭園の遊戲は、父母の心ろを痛ましめ易し。是に於て、其の遊戲運動時間を、劍搏演習に移せは、尙武の道と云ひ、武人の業と云ひ、老に取ては、大方の尊を加ふるも、嘲を招くことなく。幼に在ては、父母の歡ひを增すも、心ろを痛ましむることとなし。而して幼者は、筋骨を逞ふし、胸膈を廣くし、體質を強くし、軀幹を大にし、精神を活潑にす。老者は、血腋を流通し、水分を蒸發し、脂肪を減却し、貧血を補充し、俗界の百事を打忘れ、老而益々壯んなるへし。畢竟、劍搏の德は、幼をして心を壯にし、老をして氣を若(ワカ)くならしむるに於ても、顯著なり。其の他枚擧すへからす。

今ま此(コヽ)に專門醫の學說と、參照して以て、諸般の疾病に抵抗し得る、手段を示さん。

精神之部

一　吾人は、必らす先つ精神を確乎不拔の地位に置き、吾か身躰をは、如何なる疾病にも侵さしめすと、覺悟するを專一とす。一年三百六十五日、卵を啜り、乳を呑み、全身に眞綿を纏ひて、以て百歳の壽を望むは、愚の尤も甚き者と云ふへし。

二　吾人は、必らす常に精神を明潤にし、活潑なるを要す。一日中に少なくも一二回は努力を張りて、筋肉神經を緊張せしむるを良とす。擊劍柔術躰操等は至極佳良なる努力緊張法なり。世人の芥灸を以て、脚氣症に効ありとするものは、此の神經緊張を、誘起するに外ならす。又た草を分けて、朝露を踏むに効あるも、吾か固有の元氣を、振起するの作用に外ならす。

且つ云ふ、毎夜脚を洗ひ、定時安眠するを以て、藥を服するに勝れりと、左れは、古來劍術道塲を、土間にするは、脚を洗ふ習慣を造る迄をも、考へしものならんか、古人は、諸事に意を用ゆる、簡にして密なり。殆んと今人の思ひ、及はさる所ろまても、注意周到すと云ふへし。

人々、不惑の年頃ろに至れは、運動不足なり勝ちなるに、加ふるに茶の類を以てせは、定時安眠するを得す、精神恍惚として、多夢譫語し、或は架空無益の事を案し煩ひ曉に至る、是れ一種の病源にして、全く運動不足より生する所ろなり。此の塲合に於ては、柔術の初段より、順次に追想しつゝ、務めて吾か精神を柔術の演習に向け、段々と考へ往く間には、必らす早く安眠するものとす、即ち吾か精神が、柔術其の者は、吾れに疲勞を與ふるものなりと、承知して居るか故に、忽ち安眠を催ふせり、甚た拙き例なからも、人の襟に或る虫の附着するを見るは、吾れに何等の感なしと雖も、若し夫れ虱なるときは、吾か身も痒きを覺ふ如く、虱は痒きもの、柔術は疲れるものと、精神が承知し居るを以て、神經に感動を惹くものとす。是を以て、安眠を催ふす、理由を知るへし。

身體之部

三　一日、三回、食餌の味を變せさるは、身體の健全なる確徵なり。然れとも食餌の進み過きさるは、食餌の進まさると、一般に、疾病の端緒なりとす。胃腸の健全なる人に

在ては、腹の空りたるも、快ろよき感覺にして、適當の食物を取り腹の充ちたるも、快ろよき感覺なり。然るに、胃腸に疾病を來たす前には、必らす飢餓の感覺劇甚にして、不快を覺ゆ、此の時に食物を取れは、暫時にして膨滿の感覺を發し、同しく不快を覺ゆるものとす。是れ胃腸疾の始めなるか故に、必らす飲食を攝し、身體を勞働して、多少發汗（劍搏最も適すべし）するを求むへし。人は常に適度の運動をなし、胃腸の具合ひを損せさるを以て、第一の要點なりとす。躰强き者は、復た富人の奢侈を戒むるが如く、常に善く節制する所ろなくんはあらす。而して胃腸の健全、精神の活潑、體力の充實なるに、加ふるに、風雨寒暑に抵抗するの勇氣、勃々たる人に在ては、梅毒淋疾疥癬等を除くの外は、如何なる惡性の傳染病と雖も、決して之れに侵さるゝことなし。

四　胃腸の健全なる人に在ては、通常一日に一回便通を來たす者とす。而して其の時刻も、大概定まりたるは、尤も健康なる徵候なり。下痢は、勿論便通の甚た少なきも、胃腸疾の始めなるか故に、必らす改良することを謀るへし。食氣進みて却て便通秘結するは、病發の徵候也。此の時早く食餌を攝減し、便通を整理（牛乳又は酒を用ゆ）すれは、大抵治するものなり。然れとも、食氣の進むに隨て攝取するは、克巳の勇に富むにあらされは、持久する能はす、再々食氣元盛、便通秘結の症に罹る時は、身體に倦怠を覺へて、終日室内に倒臥し、愈々冗食を貪らひ、益々飢餓を覺ゆるに至る。或は之を屢々し、或は之を久ふし、遂に剛毅果敢の志氣に乏しく、理否共に屈して、或は他の凌辱を受け、或は身の愚鈍を歎し、常に悒々として樂します、而して活潑なる運動をなさんと、欲する勇氣もなく、貴重の日月を病床に徒費する者は、怠惰書生なるへし。彼の相撲取りが、努力强大なるは、天然に之を得たるにあらす、數十年の培養を俟て、之を得たるものなり。深宮の内に生し、婦人の手に長したる人は、寒暑風雨を犯す能はさるも、決して不思議なる事實にあらす。故に天下有爲の人傑たらんと欲せは、須らく體力の充實ならんことを求るを第一着にすへし。尤も、便通を整理する方法に就ては、習慣を生するものなれは成るへくは、服薬に換ゆるに劍搏を以てし、以て演習すれは、自ら整理する習慣を造るを緊す。又た幼少の旋り過きて、寢小便をなす等は、劍搏の効に依り、即治するものなり。

清潔法之部

五　身體を洗滌し、衣服を清潔にすへし。衣服は寒暑を凌き、且つ外飾の用に供するも、襯衣は、身體の汚垢と、蒸發氣を拭ひ去るの具たり。垢染みたる襯衣は、襯衣の効能をなさゝるなり。柔術服の下着に、見苦しからさる様に、袖なし襯衣を用ひ、小袴（サルマタ）の下着に、畚褌メリヤスの類を用ゆるは、寒暑に拘はらす、洗濯に便するか爲めなり。但し、冬は足袋を用ゆるものとす。是れ冬期は寒冷なるを以て、趾尖を浮へ、挫傷するの憂ひあれはなり。

演習上衛生注意

一　食後、又は空腹の時は、演習すへからす。　二　演習後、直ちに飲水すへからす。

三　演習最後沐浴し、乾燥の襯衣を用ゆへし。　四　夜飯後直ちに就寢すへからす。

五　頭髪は、刈り込み、爪は剪詰むへし。　六　演習中、必らす掛け聲を大くすへし。

右第五項迄は、理由を詳述するに及はさるへし。第六項は、世間に聾習の如く、誤認する者あるを以て、駁せすんはあらす。夫れ、掛け聲は、我か決心を示して、敵膽を

奪ふのみならす、體育上に大關係あり。對抗叱咤する呼吸の反應に因り、人生の最貴重的にして、人體の不隨意的に屬する、心臓肺臓をして、頻りに伸縮の度數を增加し、以て强壯健全ならしめ、且つ號令激揚遠達するに至らしむるものなり。然るに或る流にては、默然嘿々、何にか靜かなる所ろに、意味ありげに形容ぶるは、極めて生理不通の弊なり。又た甚たしきは、發聲は形手の相圖なり、なとゝ云ふ者あり、而して快心純氣に出るものなるを知らさるなり。是に於てか、當流は當流の規範に法とり、劍術は、面小手胴と叫ひ。柔術は、矢當曳と叫ふへし。各試合ひに臨みて、偶中僥倖に成ると、無念無想に出るとを、判斷する場合ゝ於て、掛聲は、最も必要なり。

却說、武人は、品行正しく、攝生厚く、以て身體を鍊揑す。故に精神を螢机雪窓に過勞するも、決して腦充血を來たすことなく、身體を櫛風浴雨に曝露するも、絶へて疾病を釀すことなし。彼の文弱者は、運動常に不足なるか故に、血行平均に充流せす。此の故に、靜座少しく事に從ふも、頭痛眩暈を來すへし。武人は、常に精神、快活にして、運動不足なし。此の故に、頭痛眩暈は、如何なるものか知らさるなり。是れ等の

効驗を以てするも、劍搏の功德は大ならすや。而して之を己れに得るは、一朝一夕の業にあらさるなり。故に朝な、夕なに、數憑け、月を積み、年を重ね、以て始めて、之を得へし。

夫れ、劍搏は、一進一止の程度を履み、次第々々に、上達するものなるを知らすんはあらす。

凡そ、何事も餘り習慣に過くれは、効なし。左れはとて怠り勝ちなれは、進歩するの期なし。孟子も云はすや、一日之を温め、十日之を寒さは、未た能く生する者あらすと、故に毎日、必死に修業しつゝ、稽古服の洗濯期を以て、自身の休業期とし、且つ學科受驗前には、三四週間復讀の爲めに、武藝を休止する等、所謂一進一止の程度を測る所以なり。若し餘りに習慣に過くれは、劍搏の技術は、觀るへきものあるも、調子柏子又た呼吸具合ひと云ふ、稍々輕業に類して、躰育の上には、効を奏せさるなり。昔は、寒稽古を霜月十八日より、翌月十八日迄行ひ、其の翌十九日は、一日全く休止し、又た其の翌二十日に、朝より晩迄、終日稽古をなし、當年の稽古納めをなせしな

り。

猶々旅行すれは、補育上に大利益ある如く、大試合ひの前一日休止すれは、鋭氣百倍するを覺ふ。乃ち此の習慣より、彼の新習慣に移らんとする、喜新快樂の間に、志氣も伸長し、體力も發達するは、更に疑ふへからさる所ろなりとす。猶は一眠、以て精神を一新する理に同し。

隈元振氣流

第六章　流旨　流旨五首

流旨

もなく照らす朝日は影つよく
　隙さへあらば打入ると知れ

手には茶巾搾りにしぼり懸け
　右手は卵子を握るとや知れ

り騖し延込む太刀の連れ足は
　波間に奔るうさぎとや知れ

は猛けて心ろ泰かに身は輕く
　雲間にあそふ隼ふさと知れ

しける風に柳きのすがたこそ
　應し返へしの極意とや知れ

振氣流系統之讃

汎涉諸流　深窮蘊奥　發一機軸　乃述五首
以爲流旨　以爲流號　初學眞影　又兼一刀
修新心流　習〇心流　豁然看破　悉廢華法
獨得技倆　出人意表　門生數千　槪達武聖
柄限三握　鋭氣活潑　帶分黑白　英姿颯爽
體善輕身　如鳥有翼　搆長兵字　如虎負嵎
劍揮圓滿　如卍字轉　摶專捨身　如巴星旋
略察懸待　如臨軍陣　事要决心　如投圓石
以是流祖　獨步天下　與頌云爾　豈偶然哉

惟ふに、學ふ所ろの淵源を開示して、而して其の善なる所以を審明にするは、後進其の人の爲めに、進歩を謀るに於て、缺くへからさるものとす。

經書にも、善に明かならされは、身に誠ならすと云へり。左れは、學ふ所ろの淵源を開示し、其の善なる所以を審明にするは、其の身に誠ならしむる所以にして、之を缺くへからさるは、恰も洋中に燈明臺なかるへからさるか如し。是に於てか、此の章は、吾か祖先の事に係り、敢て或は溢美の嫌ひなきにしもあらさるへしと雖も、吾か流祖が、斯の流旨を以て、舊藩に師範たりし、其の遺範を紹述し、其の向ふ所ろを指導するは、寧ろ當然の事なるを信す。抑々　皇政維新百度更革に際して、道場は廢止せられしが、道は不肖なから、斯の道の能として擇はれ、斯の家の嗣として襲はれし者なれは、殊に師父の遺業を沒了するに忍ひす、私に時あらは、祭祀に換ゆるに、再興を以てせんことを誓ひき。此に道場を建て丶、訓練を行ふ、一念唯た之れあるに基つくのみ。此の故に、吾か師父の遺業を恢弘せんと欲するは、元來の素志なり。然れとも、梧披敎諭に、善も誇る心ろあれは、不善となる。人に施すも、德

とする意あれは、仁に遠し。錙利の爲めに忠勤をなし、名望の爲めに孝悌をなす、皆な此の類なりと云ふ。亦以て反省の上に、反省を猛にすへき、箴言たらすんはあらす。是を以て、殊更に名利を絶ち、斯道は知らすと韜晦することあるも、未た曾て人に吹聽せさりき、唯た期する所ろは、純然斯の道の本領を盡さんと欲するに外ならされはなり。

當流の系統は、系統の讃あるを以て、更に贅せす。其の讃は、他人の頌する所ろなるを以て、故らに註せす。其の虫痕は、口碑に膾炙する所ろに考へ、且つ當流の耆老諸先輩に質すに、雄なりしと云へり。今は之れが詮索の必要もなきに依り、敢て詮索せす。

夫れ流旨の說明は、全篇に渉つて、始めて完了す。併しなから、其の廣く全篇に說き及ほす所ろの、泉源は斯の流旨五首に存す。故に須らく斯の流旨五首は、暗誦すへし。

限もなく照らす朝日は影強く隙きさへあらは打入ると知れ

隨て按するに、剣搏兩道の至訣は、此の初首に盡せり。先々之先なるもの、即ち是れなり。

夫れ、精神一到鋭氣充滿したる所ろ、恰も大陽の赫々森羅万象を照らして、以て機隙あらは、透射する如く、極めて敏活なるを云ふ。之を例せは、茲に密閉せる障子あらん、之を開けは、日光は、一瞬より鋭とく打入るへし。實に一瞬一髪の間に、乘すへき機會に乘して、失はさるに至れは、剣搏に活達したるものなり。

畢竟、此の初首は、氣位ひの最高最廣なる所ろ、須らく尋思工夫すへし。

此の初首は、剣搏兩道の綱領とし、第二第三首は、短柄剣術の事を述へ、第四第五首は、練體柔術の事を述ふ。而して第四第五首は、短柄剣術にも通す、要するに我か練體柔術は、我か短柄剣術に、附屬したるものなるを以て、先つ剣道の原則に、重きを置くものヽ如し。

元手には茶巾しほりよしほり懸け右手はたまごを握るとや知れ

元手とは、左手を云ふ。茶巾絞りとは、茶道の用語なれとも、玆には、手拭り絞りと

云ふをあやなして、左小指より一と捻り、捻り締めつヽ、濡れ手拭りをしをしはる如く、上筋(拇指食指の股)を懸け、輕快打する具合ひを云ふ。

斫るときは、必らず上筋を懸けて斫るへし。上筋を懸けされは、太刀筋狂ひ易し、故に小指を締め、拇指を中指に覆ひ、人指は必らす伸はし、中指薬指は次第に、締めて斫るへし。人指を伸せは、小指は自然に締まる道理あり。而して右手は、卵子を握る心ろ持ちにて添へる迄とす。乃ち卵子を握るとは、强く握れは割れる、緩く握れは落ると、云ふ中庸の手心を云へり。

彼の俗流は、双手の諸爪を上に向け、竹刀は面布團の上に摺り込む、是れ華法と云ふへし。否な戯れと謂ふへし、何となれは俗字たまむれは虚に戈を取れはなり。

當流は、茶巾しほりに、手元は低く、刀尖は高く、打込みて、面金に觸るヽを度とす。而して剣術基本の應用に依り、自然に面金に觸れさるに至るは、自然の熟練に委す。故意に之れに倣へは、俗流の華法に陥り、眞剣の使用法に戻る、注意せすんはあらさるなり。

但し、俗流の面を撃つは、當流の喉部を擊突するに似たり、而して俗流の喉部をつくは、鍋竿にて雀を刺すに似たり、當流は、雀刺す似ねせすして、敵の出合ひ頭ら、若しくは敵に接近して、敵の跡退る際に擊突す。擊突とは、我か刀尖を敵の喉部へ投り込む心持ちにて、兩肘を、絞り寄せつゝ、諸爪を上へ向け、敵の喉部の高さに、我か兩拳を水平に擡け、小數歩若しくは摺り込み足にて、擊突す。最れ當流は、刺突と云はすして、擊突と云ふ所以なり。打つ槌は外れす、刺す竿は狂ふ。抑々突きは、眞劍の應用にあらす。西洋人すら、激戰には斬擊すと云ふ。（撿察上殺傷毎に取調るに庖丁類の外は突きたる痕なし）

凡そ、太刀を轉旋するには、小指より次第に、稍々緩めて、其の刀尖を己れの左側後方へ、轉旋するときは、幾分か柄を右手に托し、左手は添ゆる迄にし、又た己れの右側後方へ、轉旋するときは、左の臂を伸ひ上け、右手は添ゆるまてにす。尤も熟練すれは、左手は、柄頭を握りたるまゝにし、右手は小指を緩め、拇指を以て、人指を覆ひ、自在に轉旋するものとす。

刀尖、死もして動かす、且つ鈍ふして冴へさるは、强く緊握するに囚れり。又た打落さ

れ易きは、左り小指の緩るみたるに囚れり。尚は左手に於ては、小指を締め、兩手に於ては、左手を締むへし。擊つにも、突くにも、必らす左手を締めて、右手は、掌握卵子の心ろ持ちにすへし。

若し、之を反對に、右手を締めて、左手を緩るめなは、鈍ふして冴へす、狂ふて利かす、多くは太刀の右側を下にし、平ら打ちになるへし。又は擊ち落され、捲き落されすへし。是れ當流は素振りするに、左片手を以てし、以て左片手を健腕ならしむる所以なり。且つ初心には、素小手にて、基本を演習せしめ、左手は、小指を締め。右手は拇指にて、人指を覆ひ、輪形にし。中指薬指小指は、次第に緩るめ放つや、否や。及ひ左掌に腫豆あるや、否やを驗査する所以なり。

抑說、輕快打の手心を試みるに、鑢皷の類は勿論、職工が竹釘を家根板に打貫くも、輕快打にあらされは、却て其の板を打割るへし。鐵釘を鐵板に打貫くも、輕快打にあらされは、却て其の釘を打曲け、一も目的を遂けさるへし。劍客が猪口に水を盛り、之を白木箸の兩端に置き、箸の中心を切て、水の溢れぬ樣に、手心を試みるも、柔客が

瓜形の石を、手刀にて兩斷するも、皆な輕快打の作用なり。試合中に、絹燃へる臭ひするは、克く冴へたる證たり。而して其の打つや否や、引揚る、最も快速なるもの輕快打なり。併し是れも亦た、幾多の境界を經過して、始めて眞正に克く冴へるものとす。若し初心にして、故意に輕快打にせんとすれは、或は未た確實に打たすして、引揚るに氣を取られ、調子稽古に陷る、弊なしとせさるなり。

此の故に、此の弊を防くに、元に立つ者は、爲し得る丈け、利ぬ利ぬと云ひ、充分に力擊せしめ、力擊の極に至て、自然輕快打に轉化せしむる樣に、仕向け引立つへし。尤も充分に力擊せしむる間には、掌中諸所に腫豆を生しなとして、自然に輕快打の手心を得へし。

又た初心と雖も、往々絹燃へる臭ひすることあり、此の時に善く冴へたりと、褒めて注意を惹起し遣るへし。彼の片手打の利くは、延ひて善く匝へるが故なり、匝へる所ろ工夫を要す。既に輕快打の手心を得たる上は、純氣を要す。漢の李廣將軍一日獵に遊ひ、石を虎と見て射る、矢其の虎ら石を洞す。其の後ち石にも矢の通るもの歟と、二心即ち不純氣を以て、射たるに早や一筋も、石に立たさりしと云ふ。

輕快打は、侵徹力兼津美に侵徹するが故に、手心と純氣を自得せは、鈍器も利刀に優れり。虎と見て石に立つ矢も打つ太刀も唯た武士の純氣なりけり。

最近の事理より推考して、高大無邊の蘊奥をも窮極すへし。然るに初心は、常に意を遠に馳せて、脚下に寶玉を遺するの歎なきを得す。例せは白餡を弄して、眞二つに兩斷せし時もありしならん、微塵に打毀はせし折りもありしならん、此の手心を經過しつゝ、意に留めさるは、脚下に寶玉を遺すると謂はすんはあらす。古句に極意こそ近くて見へぬ眉毛哉と、人々燈下の闇を警戒せり、宜哉。

振りかさし延ひ込む太刀の連れ足は波間に走る兎とや知れ

振り翳しとは、兵字搆へに搆へるを云ふ。夫れ突けと、我か身を敵に奥れて、徐々と攻め懸けつゝ、先々之先に出るを主眼とす。若し突きを懸けられたらんには、殊に精神を沈着して、已れの上體を稍々低くしつゝ、前方へ押出し。其の突きを賺かして擊込み、又た小手胴等へ、先んせられたらんには、切り返へす等、後之先の技倆をも含

むものなり。

延び込むとは、打入る事なり。凡へて打入るには、體と太刀、一致に連れて、玉兎走波の如くすへし。玉兎走波とは、波上月影の形容にして、實物あるにあらす。之を要するに、前進するに歩數を頻繁にするを云ふものなり。故に打入るには、必らす左り右と、左足より起して、兩足を交互し、恰も平生歩行する如くし、急速前進すへし。

古來、前進する歩法を千鳥足と云へり、千鳥足は、一足飛びに、飛び込み得へき間合ひを、千歩するの意味なり。尤も趾蹤は、地より離すことなく、又た跡足を弾ね上げなとすることなく、極々速小歩にするを云ふ。馬術にも調子乗りにて、烈しく驟進するを千鳥足と云へり。

俗流の剣術は、右足を前にしたるまゝ摺り込み、又は鳥飛びにするが故に、前進するに限りあり。踏み切て飛び込むと云へは、頗ふる勢ひ善く聞ゆるも、實際は、其の踏切りたる一足丈けに止まりて、脱け面を撃たれ易く、且つ突き倒され易し、故に必らす千鳥足にすへし。

東京の俗に云ふ千鳥足は、醉歩の事なれとも、我か武術の定語に云ふ、千鳥足は、昔し我か日本を細戈千足國と、稱せし由來に基因せり。是れ常に打込み稽古を成るへく遠きより、馳せ一刀打込むと同時に體當りし、躓さるれは、壁に迄も突き貫く勢ひを逞しくし、而して矢筈に、躍り込み打ちつゝ、兩足を交互蹴り出し、離るれは、復た一刀打込みて、體當りする等、必至に習練する所以なり。

打込みの猛烈なるは當流の特色とも謂ふへく未た曾て他流に見さる所なり義勇隊の如き者、口を開けは、必らす輙く抜刀隊を云ふ、其の精神や嘉みすへし。然り健腕健歩之れに伴ふにあらされは、實行する能はさるへし。是れ當流は打込みを専一に行ふ所以なり。換言すれは、切り込みの稽古を専一に研窮しつゝあるもの、即ち是れなり。

却説、元に立つ者か、ホイホイと相接應しつゝ、左右の足を交互に外側より前へ内へ捲き込み、後ろ外側へ、流し巴紋を畫くを、千鳥の羽番ひと云へり、是れも時々試行するものとす。

立合ひは、成るへく遠く離れ、兩足は八寸許を隔てゝ、唯た平生歩行する體勢のまゝにて、少しく上體を前へ出し、後足の踵を浮へ、徐々と攻め寄せ往き、所謂隙きさへあらは打入ると云へる、初首に法とり、先々之先と心懸くへし。術歌に仕懸け往く丈夫猛雄は勇ましく氣合ひ計りも既に勝ちけりとあり、決して寸歩も、跡退りすへからさるなり。

目錄の傳に、扉切合之事と題して、我よりも往き、敵よりも來る所ろこそ、眞に勝敗を決すへき、勝負の扉なれは、瞬間猶豫せす、直に勝敗を附くへし。間合ひの近接するは、決勝の好機會なるに、恐怯未練が間敷く、跡退りするは、武人の耻辱なり。故に何つ何時にても、立合ひ頭ら出合ひ頭らに、直に勝敗を决すへしと云ひ。又た止むを得すんは、飛ひ退くへしと云へり。其の歌に、飛ひすさる海老は鋭とく見へにけり頰冠ゐ猫の見苦しき哉とあり、以て跡退りは、醜にして怯なるを、耻ちすんはあらさるなり。

凡そ、九尺以上を隔てゝ、出合ひ頭らに直に勝敗を決す。而して其の進止する體は必

らす浮べ、體は必らす居着せすして腰を据へ、趾指には必らす力を少しく入れ、腮は必らす引付け、口は必らす閉ちて鼻息すへし。若し夫れ、踵を居着すれは、後へ倒れ易く、且つ前へ進み難く、跨がり過くれは、兩股の中心點に、重みを中集するを以て、進退自在ならす。故に趾蹠のみにて、極小歩に中心を保ち、進退し、擊つに連れて體當りすへし。

體當りは、先々之先をして、實際先々之先ならしむ所以なり。若し擊つに連れて、體當りせされは、敵は後之先にて、打返へすへし。擊つて擊たるれは、擊たさるに若かさるなり。

先々之先は、此の方より、打たんと思ふ處ろを向ふより、其の先を懸けるを、復た此の方より、其の先を打つなと云ふ、六ヶ敷き次第にはあらす。唯た始終一貫、先制之氣あるを云ふ。土州術歌 先を取れ先を取らるな先を取れ身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあれ

後之先は、稍々待ち受けて、返擊又は返突する意思を有して、勝を制するを云ふ。

敵に於て、後之先の意思あらは、我れは尚ほ更に巳れを捨てゝ、先々之先に出て、極

猛烈に體當りすへし。然るときは、敵をして躊躇せしむるのみならす、敵は後之先を施すことを得す、後之後（即ち受太刀也）にて敗すへし。總べて相打は、擊て体當りせさる、手先き計りの小競り合ひに多し。何そ必らすしも相擊は、胴の斬擊にのみにあらさるなり。（和佛折衷擊劍に此の語あるを以て云留）

氣は猛けて心ろ泰かに身は輕く雲間に遊ふ隼と知れ

此の訓歌は、初首に照應して、氣位ひの何物たるを知らしむ。初首は、氣位ひの最高最廣なるを、大陽に寄せ、玆には隼に寄せたり。而して是れより以下二首は、練體柔術の應用とす。

夫れ、隼は趫捷勇敢なる者なり。而して心ろは、泰然濶大なり。何を以て之を知る、曰く隼其の者は、鷲を見て直に擬ます、先つ天に冲り、空中を盤旋す、鷲其の者が、瞰々凝立して、天を仰き悲鳴するに至て、一搏擬ひと云ふ。是れ、隼の氣既に鷲を呑む、鷲は、呑まれて心ろ塞がり、逃る氣力もなく、遂に其の食餌となれり。若し隼が、鷲を見るや否や、卒然突入したらんには、鷲も亦た忽焉逃け得るやも、未た知るへから

す。故に先つ天に冲るは、飛ひ入る間合ひを測るなり。且つ下瞰し、遠巻きに攻るの氣勢を以て、鷲の心ろを塞くなり。

凡そ、高き又は遠きより、瞰視するときは、容易に際涯を詳了し、恰好の間合ひより、驀入するときは、鋭利なるものなり。故に心は、隼の泰然濶大なる如く。氣は、隼の勇猛激烈なる如く、身は、隼の擧止敏捷なる如くして、以て精神を沈着し、懸待其の宜きを謀らすんはあらさるなり。若し夫れ精神を沈着せされは、當に懸待すへき機會に遭遇しつゝ、其の機會を利用する能はさるなり。故に必らす精神を沈着して、以て泰然たらすんはあらさるなり。

但た、心ろ泰かならんとして、心ろ驕りが間敷きに渉るへからす。孔子云君子泰而不驕小人驕而不泰と、實に士君子の心ろ泰かなる所ろ、吾人の須らく法とるへき所ろなり。

流しける風に柳きの姿たこそ應し返しの極意とや知れ

夫れ、垂糸柳は、心志に毅然たるものありて、肢体に彊硬なる所ろなく、吹き來る風烈け、避けて送り流し、流しては彈ね返し、賺しては打ち返し、而して靡けを屈ます、

撓めど折れす、克く風烈を凌くなり。根を締めて風にまかせる柳き見よ靡く枝には雪折れそなしと云ふ、即ち彼の堅木は、風烈に抵抗するか故に、雪に折れ、風に損す。獨り垂糸柳は、逆はす、爭はす、根强く取て、幹枝は風に任かす所ろ、眞に我か應し返しの、微妙なりとの意なり。

應し返しは、敵より仕懸けたらんに、滑脱其の鋭鋒を避けて、其の鋭氣を挫き、又は足を掬はれたらんに、之を利用して、際疾く引き返し、且つ大「小」く字に懸けられたらんに、之を抱き返へす等、棟體柔術第十一段以上の、裏の手を指稱す。

此の應し返しに熟棟すれは、精神沈着して、如何なる境遇に處するも、敢て窮迫せす、綽々として餘裕あり、汝爲さんと欲せは爲せ、吾れは、汝か爲す所ろを利用せん、汝何ぞ遲々する哉、と云ふ意氣込みにて、氣既に敵を呑み、以て懸待其の宜きを取り、機智敏捷なるに至るへし。所謂應し返し、即ち裏の手の應用を、得手とするに至ては、先に手出したる者の、負けなりと假定するも、大早計にあらす。術語に大事を取れは、待に如かすと云ふ。是れ此の應し返しに熟達して、始めて其の格言たる所以の、深味を

知るへし。

待は、心ろ靜かなり。心ろ靜かなれは、心ろ泰かなり。心ろ泰かなれは、機變縱横裏の又た裏を行く。畢竟、一皆な我か精神を沈着して、以て心ろの夫れから夫れと、行き渉るか故なり。

右は、直接に流旨五首の意味を解説するに過きす、故に流旨は廣く全篇に渉て、始めて完了するものとす。然れとも、其の全篇に説き及ほす所ろのものは、一に源を此に取れり。

因に云ふ堯舜何人ぞ、吾亦人なり、彼亦人なりと云ふ、見識なくんは、萬卷の書も、死讀よ過きす、浮屠八宗に別れ、基督新舊に分つ、劍搏も數百流に別るゝは、寧ろ其の道の改良する所以なり。是を以て、他流人と會せは、先つ其の流名を尋ねるを禮とす。禮は重んせさるへからす、孔子は大廟に入て、事毎に問ふ、孔子豈に物を知らさらんや、之を問ふは禮なれこなり。然るを況んや、吾々が他流を一覽するに於けるをや、乃ち一流の機軸は、微妙に存す、敢て輙く外見すへからす。玆に迂濶な

る話あり、文官某佛國を經て獨逸に往き、練兵を觀る、曰く是れ佛式なるへしと、獨逸武官、切齒憤腕す、文官某、曰く、銃は肩に荷ひ步調す、彈は敵に向て發射す、佛式と擇ふ所ろあるを見すと、武官抱腹絶倒し、曰く日本は、尚武の國と承るに、文官殿は兵事に通せさる乎と、痛く嘲弄せしと云ふ。是れ乃ち他流を見て、物知り顔に、何流なるへしと、推問する如きは、獨立國に向て、他國の兵式なるへしと、云ふに似て無禮たり、豈に譏まさるへけんや。此れ等の言語擧動よりして、武道の通不通、及ひ修業の練不練は、大概察知せらるゝものなり。諺にも、問ふに落ちす、語るに落ると云ふ。夫れ未學の者は、漠然擊劍柔術と云ふに過きす、以て素人(シロウト)たるを知るへし。武道通の人は、必らす先つ發端に流名を問ひ、繼くに武術上の定語を以てす、以て一見識ある、武人たるを知るへし。然り之を其の人の、武張つたる体格、凛々たる顔目、鐵骨たる拳腕、柘榴たる耳瘤、等あるや否やに照らせは、一見直ちに其の眞僞は、判斷するを得へし。又た或は之れに反して、容貌婦人の如き者もなきにあらすと雖も、何處にか犯すへからさる、威嚴の在るを見て知るへし。又た稽古道具を着するに至ては、其の裝ひを見て、其の位ひを知るへし。且つ精神の沈着したる具合ひ、又は他人の稽古を見て、一勝一敗其の心に感通するものある如き、自然の擧動、若しくは批評する所ろの如何に依て、其の虛實を知るへし。

概して武人は、木訥寡言なる者に、實力多く、喋々辨說する者は、却て實力なし。好しや辨說丈けの實力は、之れあるにもせよ、謙虛は喋々する丈け、淺薄なるを以て、武道不通の人に等しき者と、見做らさるゝへし。故に武人は、務めて謙德を重んすへし。

凡そ高慢を云ふ者は、必らす下手(ヘタ)なり、上達すれは、上達するほと、己れの拙き所ろが見へて、中々高慢など云はるゝものにあらす。左れは、其の心ろして、人を見るへし。人は、自ら着實に知る所ろのもの、愈々多けれは、自ら足れりとするの心ろ、愈々少なきものなり。之を換言すれは、高慢は、進步を停止したる證據なりとす。故に高慢する者は、早や既に退却する傾向あるも、決して進取の氣概は、有せさるものと知るへしと、古人も云へり。

世に名人と稱せらるゝ者は、必らす自ら未たなりと云ひ、人に下手と呼ばるゝ者は、却て自ら上手ぶる、世は奇怪千萬なるものなる哉。（自跋に未上堂の語あり是れ眞に未たなるを以て云ふものなり）先師の訓歌に、必ろより外にあらじと思ひいるまでしも道の限り知られすと、進取の意思、躍々として測り知るへからさるなり。

第七章　兵字搆へ

夫れ、兵字の冠點は、太刀、又は鐵拳を頭上に、振り翳したる所ろに象どり。中畫の一文字は、腰を締めたる所ろに形ちし。結尾の八字點は、兩足を前後に踏違へたる所ろを顯はす。即ち試合の搆へを、側面より見て、兵の字の如くなるを以て、劍搏共に兵字搆へと、名つくと云ふ。

凡そ、試合の搆へは、氣膽の消長に關して、利害を異にす。劍術にして、上段に搆へるは、未た必らすしも害なしとせす。中段に搆ゆるも、亦た未た必らすしも利なしとせす。氣勇猛敵を呑むと、氣沮喪敵に呑まるゝとに依て、利害始めて判然たり。實に氣膽の作用甚た大事なり。例せは、双方火撃す、形勢未た優劣なし。此の時に當り、先んして全

身を暴出する者は、氣鋭とくして勇往奮進す。後れて壘壁を楯とする者は、氣沮みて頭また擡くる能はす、遂に敗す。之を西南の役に驗し、普佛の戰に徵す、乃ち守る者は、地形を撰ひ、掩護を頼み、而して敗するは、何そ、曰く、氣奪はるれはなり。攻る者は、楯を棄てゝ進み、而して一卒も損せさるは、何そ、曰く、氣勝るれはれり。即ち試合上に於ても、亦た然り。是を以て當流は、古來兵字搆へを本領とし、時に或は精眼に搆ゆと雖とも、打込むときは、必らす轉旋力を利用し、大きく上段より兩臂を伸はし、打込むを嘉奬せり。抑々、眞劍勝負は、平生に習慣する所ろの、比例を保ち遞減するものなり。若し平生小技に技癖せは、眞劍に臨み、刀尖死して寸分も動かさるへし。故に平生大技に習熟慣練して、以て天性を爲さすんはあらさるなり。（板間劍客にすら上段は氣位ひ高く敵を呑むに威るを知るか故に失敬と挨渉せり當流は挨拶するに及はさる掟なり）

常に兵字に搆へたるまゝ、始終徐々と攻め掛け、若し敵に先んせられたらんには、我れは必らす敵の面を一刀兩斷すへし。敵より突き來るも、我れは必らす敵の面を撃て相打にすへし。敵より胴へ來るも、我れは必らす敵の面を撃て相打にすへし。面の急所なる

には、多少の前後も、何處の局部も、及バされさなり。且つ相打にする面は、一層强撃にし、繼くに體當りすへし。然るときは、假令へ其の一勝負は、負けとするにもせよ、敵は、相打の强撃に懲りて、再たび先を懸け得さるものとす。抑々、面を撃ち習ひ得バ、其の他の小手や胴等は、別に習練工夫を要せすして、苦もなく撃ち得るものなり。故に先進たる者は、後進を引立るに、務めて稍々輕く、後進の胴へ打込み、後進が其の胴を顧念せす、何つにても、面を撃ち慣るゝ樣に教導すへし。

柔術も、亦た兵字搆へを至要とす。即ち片足を前へ、片足を後へ、程善く踏違へ、腰を堅固に据へ、猛虎負嵎の勢ひを逞ふし、自衛沈體に搆ゆる、是れなり。時に或は、輕身浮體に搆ゆと雖とも、彼の乙に形容ぶりて、巧みに跼蹐する如きは、賤しめて斥けすんはあらす。

總へて當流は、眞摯質實を以て本領とす。時に變化滑脱するは、素よりなりと雖とも、當流は、當流の本領を發揮して、以て先師に報ひすんはあらさるなり。

第八章　心氣力一致

試合ひは、千變萬化なり。神出奇沒なり。之れに應するは、輕身浮體にし、影の形に從ふ如く、首尾相應し、動作自在ならさるへからす。夫れ、術語に心氣力と云ふは、分解して三つとなす。曰く心、曰く氣、曰く力、是れなり。心は、鏡の照映する如きを云ひ、氣は、玉の充滿する如きを云ひ、力は、器の利用する如きを云ふ、而して力はワザと訓す。此の三原素一致運動して始めて、機に臨み變に應し勝を制す。積年辛苦し、錬磨する所のものも、亦た一言に約すれは、此の三原素を一致せしむるに在り。實に此の三原素を一致せしめ得たるときは、上達したるときなりとす。

凡そ、目に見て、手足應せす。心ろに感して、技倆出てす。左支右吾如何とも爲し難きは、初心若しくは中絶せしものゝ常體なり。

斯の如きは、外より之れに乘せさるも、内自ら分裂相睨し、掣肘相控し、以て心手衝突す。猶は烏合の兵を驅て戰ひ、首將は右せんとし、副將は左せんとし、後軍は進まんとし、前軍は退んとするときは、敗潰踵を旋らさゝるに至るへし。訓練素ある者は、三軍一致して敵に臨む、戰ふて勝たさるはなく、攻めて拔さるはなし。所謂心氣力の一致も、

即ち三軍の一致に於けるか如し。
畢竟、熟達の好果たりと雖も、常に克く意を玆に注き、理想を凝らし、工夫を重ね、以て
劍術は、太刀筋を正しく、太刀捌きを大きくし、柔術は、懸待を敏とく、技倆を逞まし
くし、而して心と、氣と、力と、一致するを得は、目に見て手足疾く既に應し、心ろに
感して技倆早や既に出つ、合せすして行はれ、思はすして至るものなり。
要するに我か心鏡玲瓏、以て機先を照映すへし。我か氣勢高廣、以て虚實を監察すへし。
我が技倆快活、以て機會に應用すへし。是に於て、心氣力を三種神器に寄せて、長歌を
謳ふ。

振氣館三種之歌

朝に三種の、神器あり――武術に寄せて、心、氣、力　心は鏡みそ、氣は玉そ――力は
ワザなり、劒きなり　良將に寄せ、智、仁、勇――八頭の鏡は、智によそへ　八
坂の玉は、仁に寄せ――十束の劒きは、勇に寄す　勇は武に依り、智は文に――依
りて文武の、其の中に　仁義の智勇、辨まへて――眞の德や、備はらん　忝しけ
なくも、畏こくも――天津日嗣きを、知ろしめす　我か大君の、御寶は――我か武
の道の、奥義ぞと　仰き守れる、武夫が――兵字揣への、體と太刀　一致に連れ
て、まんまろく――玉の如くに、充ち溢れ　清き心ろの、水鏡み――見へぬ機先き
の、影映る　以心傳心、曾たならぬ――微妙や言ふに、言ひ難し　濁らは月も、
宿るまし――凝硬は太刀も、冴へるまし　巧くまは敵も、覺りなん――怯るまは技
も、鈍ぶからん　機敏決心、唯た無想――往くに象なく、跡もなく　奮ふて吾れ
も、入もなく――切て放てよ、媚るなよ　雲に聳ひし、不二嶽は――巍然屹立、動
かぬそ　清けき琵琶の、湖うみは――潤く湛へて、濁らぬそ　平素の習ひ、大技
に――本を務むる、こそよけれ　根に培かひて、大幹に――枝も小枝も、榮へなん
嗚呼、心氣力、一致せた――心手自然、唯た自然　隙きを賺さす、機を失せす――
爲して成らぬは、なかりけり」

第九章　無念無想

夫れ、勝敗は、術策より寧ろ唯た機是れ乘するの、敏捷に富むを要す。其の敏捷に富ん

と欲せは、必氣力一致して、而して須らく無念無想なるへし。

初心は、立合ひの始めに當り、豫想して以爲らく、敵は何々の得手あり、吾れ何々して之を防きなん、敵は何々の技倆あり、吾れ何々して之を擊たなんと、是れ敵の得手を察して之を防き、敵の技倆を知りて之を擊ち、敵の虛實を悟りて之れに乘する、其の機智も亦た必要なりと雖も、故意に企圖計畫すれは、常に陰にして陽ならす、甚しきは奇巧多くして、却て敗す。例せは、身に痛部ありとせん、之を防き、之を避くる、念慮あれは、却て再三其の痛部に觸るゝは、何人も經驗する所ろなるへし。畢竟、守る所ろは、却て隙きを生し易く、巧む所ろは、却て心ろを奪はれ易し。此の微妙を観得する者は、達人となり。此の微妙を覺悟し得さる者は、神妙に達するを得さるなり。（一刀流の目錄傳に妙劍と云ひ絶妙劍と云ふ是れも亦た無念無想に外ならさるなり尤も一刀流の流號は一刀齊か氣物の精理一刀の上に在りと云ひしを以て一刀流とは云ふ）

無念無想は、先つ其の心ろを正ふするに在り、恐懼する所ろあれは、其の正しきを得す、恐懼する所ろあれは、其の正しきを得さるなり。近く無念無想の作用を例せは、初心と雖とも、心ろに快ろよく、其の氣衍ひて陽々とし、我れを忘れ敵を忘れ、思はす知らす、

唯た機是れ乘す、是れ無念無想の作用なり。劍術にして、釣り合ひつゝ思はす、叱面と叫擊せん。柔術にして、挑み合ひつゝ、知らす曳と捨身に懸けん。我れにして我れ知らさるなり。又た敵に先んせらるれは、劍術にして知らす切り返へさなん。柔術にして思はす應し返へさなん。一に皆な思ひ設けしにあらさるなり。寧ろ事後絶妙の感、髣髴として我か心ろに肯んする所ろあらんのみ。活達玆に至る、勝も心ろに快ろよし、負るも亦た心ろに快ろよし、中心の愉快殆んと謂ふへからさるなり。

併しなから、初心は、幾分か念慮に渉て、無謀を制すへし。初心一足飛ひに、達人の地位に到らんとするは、生兵法大疵の諺言を免れす。故に先つ切紙目錄免許各々位々に依て、一段其の上へに上へにと企望すへし。隴を得て蜀を望むは、人の情にして事の順なり。周子も曰く、士者希賢、賢者希聖、聖者希天と、天は明にして私なし。天明無私の境遇は、取りも直さす、無念無想の地位なり。比するに、切紙は士の位ひなり、目錄は賢の位ひなり、免許は聖の位ひなり、武聖にして始めて、無念無想の眞味は、共に語るを得へし。然り是亦以心傳心、蓋し無言心語するのみ。

不動智に、曰く、兎角思案して後に出候へそ、金言妙句も住地煩惱にて候ろ。石火の機と申すも、閃りとすると否や、光りの間に働らくを申候。譬へは、右衛門と呼ひ掛けられて、ヲット答ふる心ろを、不動智と申候。右衛門と呼ひかけられて、何の用かあらん抔と、思案して後に、何の用かと云ふ心ろは、住地煩惱にて候、（中略）一心の置く所は、何れに置くそ、敵への身太刀の働らきに、心を置けバ、敵への身太刀の働らきに、心を取られ、敵を切らんと思ふ所に、心を置けは、敵を切らんと思ふ所に、心ろ止まり、我れ切られしと思ふ所に、心を置けそ、切られじと思ふ心ろに偏し、人の太刀搆へに、心を置けそ、其の太刀搆へに泥み、兎角心ろの置く所なし。或人曰、心を餘所へ遣れは、心の行く所に、心ろ止まり、敵に負けるほとに、我か心を臍の下へ押籠て、餘所へ遣らすして、敵の働らきに由て轉化せよと、云ふ、尤も左もあるへきことなり。然れとも、佛法の向上の位ひより見れは、臍の下に押籠て、餘所へ遣らぬと云ふは、ヅット段が、卑し是れ向上修行にあらす、稽古初心取入りの時の位ひなり。心を右の手に置けそ、左の用が缺げ、左の手に置けそ、右の用が缺け、目に置けそ、耳の用か缺け、足に置けば、手の用か缺け、一所に置けは、皆な用か缺け、候程に、何所にも無そと、何所にも置ねば、我か身心ろ一盃に行き渡り、餘所に迄ひろごりて、大なる心ろに成り申候。歌に思はじと思ふは物を思ふかな思はじとだに思はじや君、是れ天正の頃ろ、東海寺の名僧澤庵が、兵法と禪宗とを引合せて、書き述へたる物なり。異に悟りを啓くに至ては、唯一無念無想に歸す、如斯矣。（大覺が電光影裡截春風の頌亦無念無想を云ふ）

有學無學一也と云へる術語亦、無念無想を意味せり。夫れ有學の極と、無學の極は、殆んと一なるものにして、之を例せは、無學の者は、時として小手や胴なとの防具を忘れて、必死に働らくことあり。是れ即ち此の氣敢は、無念無想にあらされは、克く爲す能はさる所ろなり。之れに反して、生中(ナマナカ)半熟の者は、彼れ此れ念慮に渉るが故に、存外に敗を取れり。術歌に心ろ根に兎や角せんと思ふこそ敵の奴隷と早やなりにけりとあり故に立向はゝ、唯た無念無想、先々之先と心ろ懸けて、猶ほ無學必死の覺悟にて、働らくへし。而して克く精神沈着し、克く心身泰陽たるときは、靈妙の感覺に依て、敵の意向を看破し得るものなり。術歌に敵しげみ門戸の出入り闇夜(ヤミ)の路目は心ろから屆くものな

りと云ひ、眞向鏡み敵の變化も動靜もうつらでうつる一氣貫通と云ふ、此の敵の妙慨を得れは、靈妙の知得と云んか、瞑目の感應と云んか、見へぬ機先の影は、自然に映り來るものなり。

凡そ、人の心意と動作の關係は、形と影との如く、心意の實體は、必らす動作の上に、影相を現出するものなり。古歌にも、爲すわざにおのが心ろはかくれぬを人は知らじとおもひけるかな、と云へり是れ、吾か心裡に巧くむ所ろ、人は知るまじと思ふは、愚なりとの諷諭なり。左れは術歌に、思ひなく巧みもあらですらすらと吾か身一ッを扱ふそよき、と云ふ要訣も、之を以て會得すへし。

第十章　氣位

天明無私の境に入て、眞如の月の影清く。無念無想を觀すれは、氣位ひを生す。氣位ひは無象たり、敢て輙く言ふへからすと雖とも、己が氣を高きに置き、卑きを瞰下する如く。陽に居て、陰を制御する如くして。而して精神沈着、中心勇猛、以て人を呑むに成るものなり。

夫れ、善く戰ふ者は、人を致して人に致されす、善く敵をして自ら來らしむへく、又た自ら來るを得さらしむへし。之を劍術にして、敵の太刀は我か專制の下に屈せしめ、敵をして自ら禦かさるを得さるへく、又た自ら禦くを得さらしむへし。之を柔術にして、敵の動作は我か命令の下に從はしめ、敵をして自ら懸るを得さるへく、又た自ら懸るを得さらしむへし。守て必らす固きは、其の攻められさる所ろをも、警戒周備すれはなり。要するに氣位ひの優勢なる者は、泰陽とし精神を沈着して、以て擒縱自在也、七擒七縱、唯た夫れ意の如くならさるはなし。

氣位ひの未た備はらさる者は、懸中待なく、待中懸なく、懸は、懸のみに偏し。待は、待のみに失す。而して稍々大會に臨めは、逆上し。少々勁敵に逢へは、屈撓す。又た卑怯未練の者に至ては、素より氣位ひの何たるを辨せす、平生狎れ合ひの人に對しては、憤躁し。弱小に向ては、侮慢し。廉立式塲に出れは、卑屈千萬なり。之を龜の內誇りと云ふ、即ち龜は潛穴倨傲なるも、人影を見れは、畏縮して、爲す所ろを知らさるなり。抑

抑、種々の外襲精神官能を刺激するに、毅然として微動することなく、超然として從容たるは、錬磨の最大目的となす所ろたり。玆に公侯華族は、長所ありと謂はさるを得す、夫れ幾千萬人の中に立て、文詞を朗讀するも、終始流暢たるもの、即ち是れなり。是れ他なし、精神沈着、態度鷹揚、以て人を呑むか故なり。

凡そ、心ろ廣く體胖かに、正大の氣を養ひ、事に臨んては、殊更に精神を沈着すへし。心悸靜定せされは、立歩し得るの河流も、亦た溺れん。水波靜定せされは、映寫し得たる水中の月も、亦た散らん。此の故に精神を沈着して、以て如何なる情況に處するも、靜止理想的（事理應用）の判斷力を失はす、如何なる紛雜に接するも、局外客觀的（岡目八目）の分別心を棄さす、勝負に毀譽を思はす、剛毅勇猛人を呑み、吾が精神の沈着せるを以て、中心の欣榮とし、人に呑まれて、吾か心悸の靜定せさるを以て、武夫の耻辱とし、專ら心膽を鍛錬すへし。果して克く斯の如くなれは、剛毅勇猛人を呑み、汝爲さんと欲せは爲せ、汝何そ能く我れに對して爲し得んや、と云ふ意氣込みにて、我か氣を以て敵を覆ひ、以て專制す。以て命令す。擒縱殺活一に我か心手に在り、敵より之を見て、近つくへからす、犯すへからすとなす、即ち其の氣位ひ、是れあり。

第十一章　龍之卷

龍は、聖獸なり。聖人も龍を以て語る、龍は、陰るゝときは九地の下に潜み、動くときは九天の上に顯はれ、戰ふときは首尾共に至り、震ふときは天地も亦た崩る。利刄腰下に潜むと雖も、男兒一たひ鞘を拂へは、天下を治め、或は天下を亂し、八方に盈滿す、變化測るへからす。須らく聖獸の心を以て、武夫の心とすへし。之れに因みて、龍之卷と名つくと云ふ。

鑑劍德陰陽兩氣者勝負也

鑑劍德とは、武の威德を以て、大は四海を治め、小は一身を護り、或は敵を亡ほす、等の功德を考へるにと、云ふことなり。但し日本刀は、劍を二ッに割りたる、形ちに成るものなりと雖も、皆な劍を以て通す。故に劍術と云ひ、刀術と云ひ、其の意は一なり。

陰陽兩氣者勝負也とは、陰陽兩氣別れて二ッとなる所ろ、即ち勝負の生する所ろなり。

天に位ひするは、陽にして勝の象たり、地に位ひするは陰にして負くるの象たり、故に曰く、陰陽兩氣は勝負なりと、武の根元を云へり。

陰勝則陽退陽勝則陰退陰陽元是一氣也

陰陽兩氣者勝負也と云へる語を受けて、陰陽極端に反對するの、不可なる事理を云んとす、乃ち、之を試合ひの上にて云へは、陰勝つ時は陽退くが故に、待に失して受太刀となる。陽勝つ時は陰退くが故に、懸り過きて却て働らき不出來也。故に攻るに守勢を以てし、守るに攻勢を以てし、以て、懸中有待、待中有懸、宜しく懸待其の機を察し、進退其の度を節すへし。

陰陽元是一氣也とは、天地大極一根なり、此に通すれは、無象の妙を得ん。無象は有象の主たり、故に無象の妙奥に造詣するには、其の遺筋を履みて、其の手段を學はさるへからす、即ち武教の起る所以なり。克く自得して無象の妙奥に造詣すれは、吾れもなく人もなく、萬法是空自顯なり。是を以て、有形の敵に習熟せし後は、少しも此に心ろを住むへからす。此に心を住むるときは、陰陽孰れか偏執して無象の妙を得さ

るなり。畢竟陰陽は、元是れ一氣なるか故に、一致に化せすんはあらす。唯た之を一致に化せしむるは、心術錬磨の工夫に存す。

克養其一氣者自成英雄也

是れ克く其の一氣を養へと、智勇を長す、乃ち英雄となる道理なり、併しなから人の智勇を長するは、道場にのみ求むへからす、講堂にのみ望むへからす、汎く益友に交はり、先賢に親つき、餘暇あれは、以て武を修め、文を學ふ、即ち是れ智勇を長する所以なり。然るに武藝さへ達すれは、英雄となるもの丶如く、速了するは愚なりと謂ふへし。

蘇轍は魏公の言貌に接して、以て作文の氣を養はんと欲す、其の書に曰く、文は氣の形する所ろ、孟子は、浩然の氣を養ふ、故に其の文も寛厚宏博天地の間に充つ。大史公は、四海山川を周覽し、燕趙間の豪俊と交游す、故に其の文も踈蕩にして、頗ふる奇氣ありと。文章も亦た人の氣に成る斯の如し、然るを況んや武藝に於けるをや、故に克く其の一氣を養はすんはあらさるなり。蘇轍又た曰く天下の奇聞壯觀を求めて、

以て天地の廣大を知る、秦漢の故都を過きて、恣に終南嵩華の高きを觀、北に黃河の奔流を顧み、慨然として古への豪傑を想見す、京師に至て、仰て天子宮闕の壯と、倉廩府庫城池苑囿の富且つ大なるを見て、而して後に天下の巨麗を知る、翰林歐陽公を見、其の議論の宏辨を聽き、其の容貌の秀偉を觀、其の門人賢士大夫と游て而して後に、天下の文章、此に聚るを知ると。今ま之を翻すれは、我か東京は萬機の出る所ろにして、先輩益友名士達人の聚る所ろなり。乃ち之れか謦欬に接して、其の言を聞く、亦以て自ら壯とすへし。實に東京は、英雄を養成する大學林なり。然り適々先輩に進謁すれは、邈乎たる其の容あらん、悄乎たる其の言あらん、其の邈たるや、乃ち其の來るの纔かさるを怒る所以なり。其の悄たるや、乃ち其の意を示す所以なり。德川家康の訓に、人は苦しと思ふ家に立入れは、夫れにて志は立つものなり、と云へるも、畢竟、此れ等の場合を指すものならん。抑々技藝知識は專門に得へしと雖とも、其の一氣を養ふに至ては、深く思ひを玆に致さすんはあらさるなり。

因みに云ふ、鹿兒島人が先覺の士を尋ねて、御話を承りに參りたりと云ふ、質樸の風

習は、武道の本領に適へる、善良の士風なりと、或る人は謂へり。蓋し昔しは、智育を重んせさりし代りに、先覺の話を聞かしめて、以て氣育薫陶を專らにせしこと、猶はスパルタ軍人の教育に粗々相似たりき。而して先覺の話を聞くは、一の聖堂に登るか如く、父母も之を歡ひ、他人も之を羨む、故に競ふて誰殿に、何チウ訓誡を受けたり、何チウ高話を聞きたりと云ふ如きは、其の人の名譽たりしなり。隨て其の語調風采をも移して、大に爲す所ろあらんとしつゝありき。蓋し人の忠を聞て激し、人の義を見て勇むは、吾人の天性なり。之を養ふの方法は、多々あるへしと雖とも、實踐躬行の物語り程に、直接感化せらるゝものはなかるへきなり。

但し青年にして、長老の人に交はらんと欲すれは、大人らしくして、生意氣ならぬ樣に注意せさるへからす。左れは日新齋のいろは歌に、流通すと貴人や君か物語り始めて聞ける面持そよしと、先覺に接する禮貌を訓せり。流通すとは、吾れ善く流通すれとものの畧なり。曾子の云ふ、能を以て不能に問ひ、多を以て寡に問ひ、有れとも無きか若く、實れとも虛しきか若く、するの意なり。今ま世間の青年を見るに、夫れは疾

くに存じ、此れは百も承知と、云ん計りに、暴慢無禮なる者あるか如し。童子訓にも云ふ、人の弟子となり、師に仕へては、我が位ひ高しと云へとも、高ぶらす、師を尊び敬ひて重んすへし。師を尊とされは、學問の道立たす、師たる人が敎を弟子に施さは、弟子は之れに法とり習ひ、師に對して、心ろも顏色も和らげ、敬ひ愼み、我か心ろを虛にして、自慢なく、旣に知れる事をも知らさる如くして下るへし。云云苟しくも、內心に蔽塞するものある時は、外來の光明は、之を照らすことを得さるなり。此の故に弟子の師に聽く、務めて其の心意を虛にし、信仰を專らにすへし。是に於てか師弟兩者の心氣相通して、双美の華實を結ふものとす。

又た、人の吾れに接するに曲を以てするも、吾は直を以て應すへし。人の美事は、人に語るへし上に告くへし、人の過失は、人に語るへからす上に告くへからす。吾人が殊に正を守り、直を行ふは、他人の爲めにあらす、己れの本性を盡すが爲めなり。人の非を咎めて、己れも亦た非に倣ふ如き、不條理は、武人の本領にあらされがなり。

其用志長厚則通三焦虛實往來之氣

其の志を用ゆるの厚きに長すれは、三焦と云へる、身體の上焦、中焦、下焦、其の虛か實かを知るへし。而して實の一氣を練り鍛けは、何つにても、機に臨み應用自在なるへし。此の應用自在なるを往來と云ふ。往來は、往くに象なく、來るに迹なく、陰顯出沒、猶は鬼神の端倪すへからさる如くなるを云ふになん。

天地神明與物押移變動無常因敵轉化耳矣

天地神明與物押移とは、三焦虛實往來と云へる龍臍に通すれは、天地神明の如く、物に澁滯せす、物と押移る、猶は水の器に隨ふが如し。

變動無常因敵轉化耳矣とは、變幻活動專ら敵に因て轉化す、猶は影の形に隨ふか如し。端末未た見へす、人能く知る莫し、天地神明物と押し移る、變動常なく、敵に因て轉化す。動て先を事とせす、敵に隨て敵を制す、乃ち試合ひに於て、吾れ打つとも思はす、面に隙きあり、面を打つ、吾れ勝つとも思はす、捨身に機あり、捨身に勝つ。吾れ捨身を思はさるにあらさるも、く字に虛あり、く字に摑く。吾れ面を思はさるにあらさるも、胴に利あり、胴を薙る。唯た心手自然に委ねて、機會に應用するのみ。蓋

し此の條は、後之先を云ふに在りて、先々之先を云ふに在らす、既に先々之先に達したる以上は、後之先にも察せすんはあらす。然るに敵の働らきに由て、轉化せよと云ふ、要訣を澤庵叟が、稽古初心取り入りの時に位ひなりと、毆せしは、世々の劍師か、澤庵兵法なりと、反駁する所ろなり。敵の働らきに由て、轉化せよと云ふは、後之先を研窮する位ひに進みたる者に於て、忘却すへからさる要訣なりとす。何となれは、先つ太刀を合せたる上にあらされは、其の變化は知るへからされはなり。

雖生得之强豈足恐哉然則武道者武威之大根元也

豁達自在なれは、生得の强者と雖とも、我が一氣の勇を以て取挫くへし、何者か恐るるに足らんや、然らは、武道は武威の大根元なり。抑々、勇に五種あり、一に仁義の勇、二に義勇、三に生得の勇、四に血氣の勇、五に匹夫の勇、是れなり。匹夫の勇は、盜なとに强きを云ひ、血氣の勇は、無分別なるを云ひ、生得の勇は、生れ付きたる猛獸の勇の如きを云ひ、義勇は、義道の勇を云ふ、之れに仁義の勇を合して、始めて武道の大勇と稱す。武道大勇は、小敵を侮とらす、大敵を恐れす、易きに從はす、難きに避けす、剛も吐かす、柔も茹はす、至大至剛の精神に發する者、即ち是れなり。是れは乃ち、武威の大根元なり。

因に、膽力を練ると云ふ事に就き、淺く例を擧れは、未た海洋を見さる者あらん、之をして一日舟に游むしめんに、肝膽寒く、膀胱膨脹し、敢て放尿せんと欲して、而して放尿する能はさる者なり。第二日は、漸く馴れて頻りに放尿せん。第三日は、熟して更に放尿を催ふさす。將士も亦た、始めて軍に臨むや、慷慨悲憤死を決して而して出つ、再三再四恰も演習に往くが如し、乃ち膽力は、度數を積む間に練ると云ふを得へし。唐の張巡は、死するとき起て旋ると云ふ、旋るは放尿の事なり、放尿の膽力に關する斯の如し。

武道者平生不事勝負焉專養大勇而分虛實修德行而知深淺習五常而齊治矣是謂之武道也

夫れ武道は、平生勝負を事とするものにあらさるは、一讀明了なるへしと雖とも、世俗の人が、武と云へは、勝負の上の事のみと誤認し、古今の達人を評するに、彼れは

何つ勝ちたり、何つ負けたりと云ふに過ぎす、武道は、斯の如く淺薄なるものにあらす、先つ武道の師を評せんには、門生に如何なる人物を傑出せしめしか、門下の人を論せんには、如何なる德行を發輝せしめつゝあるか、之を武道具眼の識となす、是に於て先師の訓言を引證す。

大猷院様、小野治郎右衛門、柳生但馬守、兩人へ御尋ねありて、兵法は何の爲めに致し候哉と、命有ければ、治郎右衛門、御請は、人を切候爲と申上候。但馬守には、人に切られぬ爲に仕候と申上、但馬が申分、君命に叶ひ、但馬守へ御師範役被仰付候、吾流は左にてはなく、勝負などにかゝわらす、武の大勇を養ひ、忠孝の二つを用ゆるの修行にて候、能々鍛錬可被致候事。

文化三年丙寅孟多上院武教體意となす云云。

却説、専ら大勇を養ひ、而して虚實を分つ、德行を修め、而して深淺を知る、五常を習ひ、而して治を齊す、是れ之を武道と謂ふなりとは、専ら大勇を養へは、事に臨み、精神沈着して、敵の虚實を分ち知り得へし。德行を修めは、我か心の足るを知て、慾張ら

さるへし。仁義禮智信以て治國平天下の本領を覇す、是れ之を武道と謂ふとの意なり。

第十二章　虎之卷

氣當りは健雷や日本武不動多門の勢ひと知れ

健雷は、常陸の國の鹿嶋神靈にましまし、天孫降臨の時、先鋒將帥として劍を按し玉ひ、此の國を渡すや否やと宣ふ、武威の氣猛きに、惡神共平伏すと言ひ傳へ、同國武者修行に、出立の時に、鹿島社参詣すと稱せしも、畢竟、健雷神の武威の氣當りを、欽慕するに由るぞかし。

日本武とは、　日本武尊を申し侍へり。尊が駿河に狩り倉し給ひしに、賊其の野に火を放ちぬ、尊劍もて草を薙きはらひ、向火して其の賊を亡ほし給ひしも、武威の氣當りそかし。

不動多門は、佛體なり。佛法は、物によそへて道理を表す、愚痴凡夫は、佛像を見て、唯た難有と妄信す。尋常の識者は、佛像の寓意を囈語と嘲罵す。非凡の活眼者は、道理を得て、道理に信服すと云へり。伊達政宗、不動を見て、曰く、是れ何者そ、何そ

其の貌の威嚴なるやと、侍者、曰く、其の威貌俊嚴なるは、守護の形ちなり、而して心ろの動かぬ所ろ、名けて不動明王と稱すと、政宗、之れを聞き曰く、武將たる者の心得となるへきものなりと、果して活不動の如き名將となれり。彼の不動明王は、瞋目搤拳攫搏自在、右手に劍を握り、左手に縄を取り、威嚴赫々手向ふ者あらは、取挫んする擬勢を示せり。多門は、毘沙門天なり、嚴肅なる武裝を整ひ、鋭利なる武器を提け居れり。彼の摩利支天は、猪突に跨がり、一直線に突貫しつゝ、南面而觀北辰の機能を、三面六擘に寫す、即ち武の達人たるを示せり。是れ等の寓意擬勢に、加ふるに、健雷神や、日本武尊の武威を以てし、以て敵を壓迫するを氣當りと云ふ。

抑々、達人たる者は、鋭氣充滿し、前後左右天地六方に注意す。乃ち、六方に配る眼は巳が身の修行一つにあるものと知れ、とありて前方は言ふ迄もなく、後方より打懸らんとする者あるも、左右より飛ひ付んとする者あるも、天より落來らんとする者あるも、地に陷穽あらんとするも、注意周到す、是れ達人の達人たる所以なり。而して武人が摩利支天を信仰するも、寓意の微妙に觀通せんと、欲する信念の餘に出るのみ。

故ゟ俗人か、水天宮なとに於ける信心とは、大に異なれり。然るに切紙九字之大事なとゝ云ひ、聾啞の如き手似ねをなして、摩利支天の秘法靈驗ありなとゝ云ふは、智者の取らさる所ろたり。拔刀隊自叙實錄の長歌に、摩利支天の加護ならんと云へるも、吾れと吾が身の怪しほと願ふは無念無想哉と受け結ひて、所謂南面而觀北辰の、機能に應したるを云ふに在るのみ。

念もなく思ひもあらぬ空々ゟ有ると風勢の行衛なりけり

夫れ氣滿ちて、念も、思ひも、何もなき所ろ、無念無想なりとは云へ、亦た以て無念無想は、無心無意の謂にあらす、空々裡に有ると云へる、有る物なくんはあらす。風は空々に、何もなき樣なれとも、物體に觸るれは、破るゝ音あり。左すれは、風も幾分か形體あるへし、人も幾分か智畧なかるへからす、と云ふ意味なり。初心の空は、空々裡に無心なり。達人の空は、空々裡に有心なり。深く之を味ふへし。

體と太刀一致に連れてまんまろく心ろもまろく是そ圓滿

是れ心氣力一致の謂ひなり。之れが裡面より之を云へは、體に根さゝす、體を働らか

さす、ナヨッチヨット手先き計りにて、撃ち突きするが故に、體と太刀と、離れ離れになりて、小技に流れ易し。殊に左方より打込むに、左足を踏込ます、全く手と足と離れ離れになれり。故に左方より打込む時は、左足を踏込み、右方より打込む時は、右足を踏込み、終始體と太刀一致に運るゝ時は、申分なし。乃ち是れぞ圓滿なりと、嘉奬の意なり。之を再言すれは、體と太刀一致に運れて、鞍上に人なく、鞍下に馬なく、唯た一氣の圓滿なるを云ふ。

切り結ふ太刀の下こそ地獄なれ至極は懸れ先は極樂

眞劍は、防禦小技になり易し。故に我か鍔拳にて、敵の頭まを打割ると覺悟して、深く踏込みたるとき、漸く我が切先き、敵の眉間に達せんとす。是れ即ち、眞劍は、切先き三寸許にて、斬るへきものなるに、拳鍔にて撃て、と云ふ敵ある所以なり。但し或る流にても、此の術歌を燒き直したるもの歟、至極は懸れとあるを踏み込み見れは、と作り替へたる如く、思はるゝものをも見たりき、畢竟、此の句は普及せらるへ丈けに、此の術歌の至訣なるを知れ。

敵に皮を切られて、我れは骨を切ると云ふ、術語は決心激發を云ふものなり。互に及場に拔き合せ。鎬き相削ると雖とも、未た一刀兩斷するに至らす、其の小手を受るに至て、早や是れ迄なりと、思ひ切て踏込み、一刀兩斷すと云ふ。舊藩は少年一件の爭ひ（イサカ）に於て、年々三四回つゝは、果し合ひナゥ武强の餘弊、明治八年迄は現に之れありき。其の生存者に就て、太刀の前後を問へは、曰く互に拔き合せ、支へ合ひしが、腕に薄手を負はせられて、激憤決前唯たナエイと切り殺したりと、答ふる事實、何人と雖とも、一徹に出てゝ現場の摸樣も、事實に符合せり。故に眞劍は、踏込み、踏込み、確實に切り込ますんはあらさるなり。（因に記す決鬪は法律の禁する所是亦知らさるへからさる也）若し彼の板間裡客の如く、ナヨッナヨット小手を掠め撃ちする技癖を習慣せは、眞劍に臨み、敵を激發せしめて、却て我れは敵に一刀兩斷せらるゝや、前例の如くなるへし。故に須らく踏込み、踏込み、踏込み過る程に、踏込み、拳鍔にて、敵の頭まを打割る心得あるへし。

勝負とは引きしほりたる梓弓放ても尙は放ても尙は

凡そ、快ろよく仕遂けたる跡は、敵を切り倒したる勢ひ、脱けて虚になり易し。故に幾人斬り倒しても、尚ほ跡に敵あると、心得へしとの意なり。平生も其の心得にて、一撃したらんよは、直ちに第二の太刀を打込む、用意を專一にし、放ても尚ほ、放ても尚ほ、と云ふ精神を確實にすへし。尤も彼の長柄竹刀者流の者の如く、一撃して敵に背面を向けるなどとするは、不心得千萬なりと謂ふへし。彼等は放ても尚ほ放ても尚ほ、と云ふ始終持滿の心持ちなき者なり。（俗流は一勝負の付きしとは云へ退り途かへて脊と脊を合せるに至る傚ふへからす）

思ひなく巧みもあらぬ無想には虎さへ爪の置く所ろなし

夫れ、思ひ巧みする所ろなく、恐れ臆する所ろなく、唯た無念無想なるときは、猛虎と雖とも、爲す所ろを失ひ、爪の置く所ろなきを云ふなり。舊註は、虎と云ふに因みて云ふ、猛虎馳せ來る、乳母赤兒を棄てゝ逃け去る、猛虎は赤兒の無念無想なるに感して、喰ひ殺さすして立歸りしなりと。併し之を事實なりとすれは、異論も起るへし。何となれは、虎にあれ、熊にあれ、人を喰ふ性の者にあらす。適々、人を害するは、人に逢ふて驚き、人に追はれて迫り、窮鼠嚙猫に過きされはなり。然も亦た、無念無想の功德を、宣揚せんと欲せは、此れ等の假設例もなかるへからさるなり。近頃ろ千島へ、回航せし人の話に、熊を射撃するに、射手は無念無想にて、立ち居れは、熊も五六尺前へに、人立ちして敢て觸れす、乃ち此の時、熊の月影を狙撃し斃すと云ひ、此の術歌の妙慨を、稱讚せしことありき、記して以て參考となす。

或人が、猿を突んとするに、飛ひ上りたり、潜りたり、竹刀の先きを取らへたりして、突く事ならす、切齒しなからも、猿に愚弄せられつゝ在りし、婢來てモシと云ふ、ヲイと答へなから、突きたるに、何の造作もなく、突き得たり。變を以て、角せん兎やせんと、我か胸中に一物あれは、鏡に影の映る如く、彼れに察知せられて、突き損す。故に出拔けの如くにして、偶中ならさる所ろ、即ち味ふへき所ろなり、と知れ云云。
（寛政十二年申正月刊行 劍術秘傳獨修行卷之下）

又た猿の話に於ては、槍家種田某が、何々、誰れが何々と云ふ如く、隨分多々あるも、詮すれは、猿の敏捷に乘せられ、釣り出され、爲めに突き損するのみ。故に吾れ徐々と迫り、輙く突かす、徐と控へて、氣當りすれは、猿は、其の敏捷に賺かす藥津美を

失ひ、柱より落ちて哀泣すへし。平生の試合に於ても、竹刀を棄て丶、賺し込まんとする者あるときは、吾れ輙く擊たず、徐と控へて、氣當りすれは、敵は狐疑を生し、右顧左愕し、自ら逡巡を耻ち、敗を表せん。

吹く風も雪も霰も咲く花も勸むる業の工夫とはなる

凡そ、吾れに得たる心ろあれは、見るもの聞くもの、皆な、吾か得たる道の工夫となり、補益となり、啓發の種子となるものなり。古人、高砂の尾の上の松を櫻と、詠したることあり。物は、見樣、聞樣にて、君子は義に喩り、小人は利に喩る、其の人の精神の凝結する所ろに感受す。

昔し、或る人が、函根山は、カキコクイ所ろなりと云ひしかと、書客は、寫生の事に悟り、輿丁は、擔肩の事に思ひ、惰夫は、搔痒の事歟と、惑ひたりとなん。

劍士、習字法の五訣を聞き、我か劍法に移したりと云ふ、其の習字法は、執筆正。用鋒尖。起重。行健。收停。是れなり、先つ執管を第一とすると云ふを聞き、成るほとと劍道の茶巾搾りの事に移し。執筆正とは、筆管を眞直くに持て運轉し、俛仰反側す

れとも、定まるに及んては、絲を垂下したる樣にあるへしと云ふを聞き、又た成るほと丶我か太刀を縱橫轉旋するも、斬るに至ては、太刀筋正しかるへしと云ふに移し。用鋒尖とは、刀槍を運用する如しと聞けは、取りも直さす、太刀先きの活氣を思ひ。起重とは、何れの書にても、筆の打込み重かるへしと聞けは、太刀の打込みに移し。行健とは、筆尖を引き往く、中途は輕くして、筆力の脫けぬ樣にと聞けは、我か劍搏の氣合ひ三氣呼吸始中終の中頃ろ輕くして、氣力の脫けぬ所ろに移し。收停とは、止まりの所ろを確と押へる心持ちにし、點畫の中にて、毛先きの纏まる樣にすと聞けは、面なり小手なり、何の所ろを打ても、引揚ける太刀先きは、敵に注くと云ふに移し。而して書家の筆法も、我か劍道に移して、大に得る所ろあるを歎ひしと云ふ。故山岡鐵舟居士は、劍法筆訣其の蘊を同ふすと云ひ。渡邊會計檢査院長は、劍道財政其揆一なりと云ひたりき。

宮本武藏は、阿曾山の舞を見て、兩刀を發明す。其の巫女が、兩刄を以て天地に象とり、陰陽に別れ、合して一刀となり、自在に變化する有樣を見て、甚た感心し、日來

心ろ掛けし劍法の蘊奥を得たりと、歡ひしとなん。越前少將秀康は、舜を見て豪氣を發す、秀康泣く、左右其の故を問ふ、秀康曰く、彼れは一少婦、天下第一の名を得る、而して我れは堂々たる一丈夫たり、然るに未だ天下第一の士と稱せられす、故に悲むと云ひ。佐々木了伯は、嘗て左右に問ひ曰く、昨平語を聽く若何、皆な曰く甚た樂むへし、但た演する所ろ、赫々功名の事に係はる、而して君獨り泣て已ます何そや、了伯歎して曰く、吾れ今にして、汝等我が用を爲すに足らさるを知れり、顧ふに、高綱は、名馬を乞ひ、先登を約す、必すへからさるの前に於てす、其の心ろ固より生還を期せす。高宗は、馬を兩軍屬目の中に立てゝ、而して扇眼を海波數百歩の外に射る、不幸一發不中則自刎して、海に投するあるのみ。吾れ二子の心事を推窮して、此に至れは感慨に堪へすと、以上見樣聞樣の的例となす。抑々、飴の柔軟粘滑なるを見て、曾子は、其の親に進めんことを思ひ。盜跖は、戸の關に塗らんことを思ひしが如く、一物を見るに就て、其の德の相反する斯の如し、故に曰く、其の人の精神の凝結する所ろに、感受すと。噫

第十三章　心之巻

心

心に物あるときは體究屈なり、物なきときは心ろ廣く體胖かなり
心に我慢あるときは愛敬を失ふ、我慢なきときは愛敬至れり
心に慾あるときは義を思はず、慾なきときは義を思ふ
心に飾りあるときは僞を搆ふ、飾りなきときは僞なし
心に奢あるときは人を侮とる、奢なきときは人を敬ふ
心に私あるときは人を疑ふ、私なきときは疑なし
心に誤あるときは人を恐る、誤りなきときは恐なし
心に邪あるときは人を害ふ、邪なきときは人を害ふはす
心に貪ほりあるときは人に諂ふ、貪ほりなきときは諂はす
心に怒あるときは言葉激し、怒なきときは言葉和かなり
心に堪忍あるときは事を調ふ、堪忍なきときは事を破る

心に優なきときは悔多し、優あるときは悔なし
心に自慢あるときは人の善を知らす、自慢なきときは人の善を知る
心に賤しきときは願ひ起る、賤しからさるときは願なし
心に迷ひあるときは人を咎む、迷ひなきときは咎なるてとなし
心に誠あるときは分に安んず、誠なきときは分に安んせす

右は正德の頃ろより武敎の一として傳へるものなり須らく銘肝すへし

意進理進業進

凡そ、智力感情の作用を實行するは、意進なり。意進は、何事に限らす、吾が爲さんと決心して爲す、力らの總稱たり。若し意進力に乏しきときは、理進業進の兩者は、共に活氣なし。故に躬自ら企圖を愉快に持し、以て常に意進力を奮起せしめすんはあらさるなり。

果して意進力の振起しつゝあるときは、假令ひ意外の故障に遭遇するも、猛火の熾んなるが如く、之れに觸るゝものは、從て燃るの料となり、益々意進力は、振起せらるるものとす。

吾人の意進力は、困苦の爲めに屈するものにあらす、却て其の困苦に反抗する愉快其の者が、意進力を作興するは、猛火に觸るゝもの從て燃るの料となり火勢を增加すると、一般なり。孟子も云はすや、人は、艱難に生き、安樂に死す。と實に困苦は、吾人を玉にするの賜ものなりとす。然るに懶惰なる者は、常に閑暇なきを以て辭となすと雖とも、眞心斯の道に熱心なれは、寸暇なきを憂へさるなり。

夫れ、熱心なる者は、克く學課を履行し、終て直ちに竹刀を肩にし、直ちに馳せ來て、直ちに演習し、直ちに歸る、決して多時を消費せさるなり。之れに反して懶惰なる者は、幾多の閑隙あるも、竹刀を肩にするの意進なく、曰く、明日より更らにせん、曰く、來週より新たにせん、曰く寧ろ來月よりせんなとゝ、徒らに日を送る、畢竟、冷淡なれそころ、閑隙なきを唱ふなれとも、熱心なれそ、萬障繰り合せ得さることはなきものなり。

又た、或る一部の人衆に於て、相手の寡なるを唱ふと雖とも、玆に六八相集り各々一

試合つゝ當り合ふときは、十五組みとなるにあらすや、故に眞心斯の道に熱心なれは、決して閑隙なきを唱へす、又た相手なきを云はす、要するに或る人の言の如く、諺には、好きこそ物の上手なれとあれとも、實際は、上手こそ好きなれと、云ふへくして之を好く丈け、之れに上手なるを、證明せらるゝとは、穿ち得て痛切なるを覺ふ。願ふに劍搏は、元是れ勝負なり、勝負は、直接に人の意進力を作興するものにして、而して吾れ人に勝つほと、愉快なるものなし。先つ之を彼の碁に例せん、老手に對し數目を置きなからも、勝ては、躍然として快を呼ぶ如き是れなり。是を以て、上級下級相隔つる塲合に於ては、上級は、讓て下級に負け、其の人の意進力を誘ひ、斯の道の隆盛を謀るへきなり。

尤も、上級者か下級を引受け、其の上下隔絶する樣に見せて、氣合ひを脫くは易しと雖とも、其の下級者をして、已れと互格（同等）の位ひに見せ、糸を引張り合ふ如くするは、餘程の上達にあらされは、爲し能はさる所ろなり。故に務めて鋭氣を入れて、而して輕く相接應（アヒシライ）すへし。乃ち上級者が、下級の氣を沮喪せしむるは、幾分か上なる迄にして、下級の氣を引立るは、上の上乘なるものなりと知るへし。

急だらり急

是れ、冒頭の急は、入門の初にして朝鋭なり。間もなく惰歸を生して、だらりとなる。此の時に自ら感發し、又は父母師友等、之れに刺激を與へて感奮せしむるを得ハ、必然上達すへし。最後の急は、永續して終身之を學んて、倦まさるものなり。今は小學生徒も、熟知せる事なから、之れが例を古人に取れは、孟子は年少ふして學に志ろさす、既にして苦學に堪へす、學を廢して家に歸る、孟母適々機を織る、乃ち其の機を寸斷す、孟子驚き其の故を問ふ、孟母説て曰く、汝が學業を中途にして廢するは、此の織物を斷つが如く、全功を收むへからすと、孟子深く感激して、再たひ學を勵み亞聖となれり。唐の李白は、業の成らさるに屈して、師を去る途に老嫗の鐵杵を磨するを見る、李白之を怪み、之を問ふ、老嫗答て曰く、鍼を作らんと欲すと、李白は其の耐忍勉强力に感憤し、踵を旋したりと云ふ。小野道風は、自ら惡手に失望して、迚も能はすと、筆を投して庭園に出つ、偶々青蛙あり柳枝に飛上せんとす、飛ひ

付く能はす、然るに屈色なく、却て失敗する毎に、決心を堅ふし、千辛万苦して、遂に目的を達せり、道風大に感發し、爾後碎心砣々書境に入れり。將軍タメルランは、戰ひ利あらす、敵の追躡を恐れ、將さに自害せんとす、偶々蟻一粒を曳き、壁に攀ち登らんとするを見る、幾十回も落ちて、漸く蟻穴に入る、是れよりタメルランは、失敗毎に蟻の事を思ひ、奮發せしと云ふ。是に於て、孟子李白道風タメルラン等も、亦た我が術語に所謂急だらり急の三境界を踐て、而して名を成せり。故に曰く、中だらりとなるとき、自ら感發し、又は父母師友等、之に刺激を與へ、感奮せしむるを得ば、必然上達すへし。と但し稽古服の新調を初心に強るは、氣の毒なからも、初急の時に新調し置けバ、中だらりのとき、再奮せしむるに便利あり。然らば氣の毒にあらす、熟心の耐久を擔保せしむる所以なるを了知すへし。

抑々、最大快樂の地に上達せんと、欲する割り合ひに、酸辛艱苦も亦た屢々至るものなり。此の苦節に處するや、毅然として堅忍不屈の勇なくんはあらす、人の今日に艱苦する所ろは、他日に快樂となる素養なり。而して天稟の非凡ならんより、寧ろ勉強且つ耐忍の常人に超越する者、克く德器を成就するは、一に玆に素ありて存す。

夫れ術歌に、瀨戶の內早き小舟と思ひけん彌增す沖のはやてしら浪、と云ふ先つ試みに、初心に向ひ、汝は進歩せりと云へは、初心は、滿面喜色を顯はし、眞に然るか、吾も亦た然思へりと勇躍せん、是れ瀨戶の內早き小舟と思ひけんと云ふ場合なり。是れより三四年も經るに從ひ、汝は進歩せりと云へは、いな拙き所ろのみ見ゆると、答んとす、是れ彌增す沖のはやてしら浪と云ふ境界に入りたるものなり。此の境界や目標比準なく、大洋の陸を沒して、洋々たる時なり。此の時に倦怠心を生して、中だらりとなり易し。此の時や、哥倫布が、水兵の奴輩に向ひ、其の棹を返へさんとするを叱斥せし如く、我か確乎不拔の精神を以て、其の我か良心を誘惑せんとする、倦怠心を排斥せすんは、佳港に達する能はさるなり。

又た、倦怠するにあらさるも、勝負上に就き、鈍きを感し、快々として樂しからさる時期も、亦た少しとせす。是れ、心氣力の一致せさる時にして、心か氣か力か、孰れか前後したる時なり。復た前日迄は、七三(例比)の上級に對抗し、氣張り合ひ壯快を覺

へしも、今日五々（比例）の同級に達せんとして、却て氣張り合ひ惡しき時期も來るへし。是れ前日迄は、寡を以て衆を撃ち、奇に出てゝ正を制したるも、今は同數の兵を提督して、以て正々の陣堂々の軍相對す、意の如くならさるは、一時止むを得さるなり。此の時期を耐忍勉强せは、多々益々辨するの地位に達すへし。抑々、舊地位を出てゝ、新地位を占めんとするは、進歩なり。進歩しつゝある時は、多くは心か氣か力か、何か前後しつゝあるか故に、仕惡くゝ。停滯しつゝある時は、多くは心も氣も力も、何も一致しつゝあるか故に、仕易しとす。

凡そ、天氣の靜穩なるは、大風雨の後に在り、百花の爛熳たるは、大霜雪の後に在り、且つ高きに登る、一層を重ぬるの苦は、一段を加ふるの快なると、一般に、此れ等前述する所ろの、酸辛苦難に頻々遭遇するほと、駸々として進歩するの徵證たり。唯た之を凌きて、之れに打勝つこそ、肝要なれ。佛は、難行苦行して精神を鍊ると云ふ、其の語に難來れ難は吾を鍛ふ恩師也と、云ふを以て之を味ふへし。傘破嵩も曰く、人は已れに克ちて、其の素質を脩飾し、勉めて其の美質を養成し、天下に事あるに當て、倍々之を鍊磨する元氣あるにあらされは、天下に赫灼たる聲名は轟かし得難しと。國難に當るも、劍搆に於けるも、元氣は即ち一なり。百折不撓益々元氣を振起すへし。

第十四章　試合定義

試合定義　試合と稱するは、互格の者、彼我二人相對し、共に敵氣を服膺し、共に基本を活用し、以て相爭鬪するを云ふ。

元來、武道は、修身及ひ體育を主眼とす。而して勝負は、目的とせさるものなり。甲（小野）は、人に勝つか爲めにすと云ひ、乙（柳生）は、人に負けさる爲めにすと云ふ、丙（龍之巻参看）は、之を駁して曰く、甲乙の言は、皆な非なり。吾は吾か身を修むる爲めにすと、丙の識見高し。

夫れ勝負は、修身體育の二大目的間に隨伴するは、素よりなりと雖とも、抑々人は護身の權を持す、生れなからにして攻防の氣概を有す、例せは、赤子に向て、馬鹿と云へは、必らす拳を堅めて打つへし。微蟲將さに眼中に入らんとすれは、必らす瞼たを閉ちて防くへし。是に於て勝負は天性に出つ、復た言ふに及はさるなり。若し之を目的の一とす

れは、騎虎の勢ひ、唯た勝負是れ爭ひ、武道の何たるを辨へさるに至る、而して思想卑劣ょ陷いらさる者はなし、猶は之れを譬へは、世に無俸給仕官あるにあらすと雖とも、俸給を目的とせさるは、國家官吏の至誠なり、是れ國家官吏の清廉純潔なる所以なり。若し國家官吏にして、俸給の爲めにすとせは、志操無下に賤しく、彼の不正を働らき、不義を營む、盜賊と殆んと擇ふ所ろなかるへし。故に武道は、修身及ひ體育の二大目的に限れり。假りにも勝負を目的とするときは、內に貪恣を醸し、外に奸黠を藏はんとするも、藏ふ能はす。而して其の弊獨り技藝の上にのみ止まらす、其の人の性善を害し、一般の風紀を破り、德義頗る頽敗す。是を以て勝負は、適々進歩の程度を比較するか爲めに、試み合ひするものに過きす、宜しく節制する所ろなかるへからさるなり。然らは如何して可なる乎、曰く、唯た公正の方法に依り、天地に俯仰して、耻るなき所爲を以てする是れなり。

第十五章　審判定義

審判定義　審判と稱するは、眞劍勝負に於ては、自ら決する所ろの効力を、試合上

の規格に依り、判決するを云ふ。

試合上の規格は、眞劍勝負に於ては、自ら決する所ろを、劍術にしては、太刀筋及ひ前後輕重等。柔術にしては、施術及決心威力等。之を鑑別して、其の勝敗を點數表に照らす。畢竟、進歩を勸奬するの必要、並ひに德性を薫誘するの主眼を以て、審判す。

進歩を勸奬するの必要とは、何そ、曰く、先々之先、是れなり。先々之先に出たるものは、後之先に比して、稍々輕くも、之を取るの類、是れなり、其の他は之れに準す。

德性を薫誘するの主眼を以てすとは、何そ、曰く、節義廉潔度量等の德操を嘉奬し、加點することある、是れなり。夫れ節義の節は、みさをと訓し、常に守る所ろありて、惑はさるを云ひ。義は事の宜きに適ひて、正當なるを云ふ。廉潔の廉は、稜角の意にして、物體の正しく成形し、廉角截然亂れさるを云ひ。潔は、水の淸淨にして、一點の汚物を含まさるを云ふ。共に人の儼正端直にし、取るへき理なき物を取らす、受くへき義なき貫を受けす、思想の純粹なるを云ふ。度量は、胸中寛裕にして、變に逢ひ、輕々しく心を動かさゝるを云ふ。是れ等を見て、以て優劣を審判すへし。尙は本篇第四章箴砭に擧示

せるものに照らせは、明了ならんとす。

却説、審判官は、公平無私なる、達眼を以て活斷すへし。他人の之れに容喙是非するを許さす。尤も審判官其の人と雖とも、一たひ判決せしものは、自ら變更するを得す、是れ言責を重んするに在り、若し其の常を得さるものあれは、獨り統監に於て修正す。

審判官は、傍議を顧みす、速斷すへし。速斷は、假令へ其の判決を誤るも、遲疑するに愈さるのみならす、瞬速なる程に、公正を得るものなれはなり。

但し疑はしき場合ひは、統監に向ひ、相通するに心目を以てし、或は言語を以てし、以て決を求むる等は、獨斷專決に過くるの嫌ひなく、却て長上を尊むに出てゝ、鬪士双方及ひ觀客一般に、滿足なる感覺を、與ふるものなるを、忘却すへからさるなり。

審判官は、鬪士自ら降參りと答ふるも、其の充分ならさるときは、否々と云ひ、打消すへし。又た甲の擊搏充分ならさるとき、未たと云ひ、若しくは默過したる後には、乙の擊搏十二分なるにあらされは、相殺と云ひ、無効にし、更に勝負を決せしむへし。

審判官に於て、臨時中止を要せは、十々と云ひ、停止せしむへし。鬪士自ら中止せんと欲せは、暫らくと請ふへし。審判官は勿論、鬪士相互の間と雖とも、總へて可及的は、簡潔なる武術上の定語を用ゆへし。尤も判決を斷下して、後に其の理由を要すれは、徐に之を說明するを例とす。

審判官は、鬪士より上級者を以てす。故に鬪士に上級者出れは、他の上級審判官出つへし。是に於て、秩序正しく威儀行はれ、一言の下に服す。但し相撲行司に類する擧動、及ひ傍人を笑はせる如き、諧謔的の言語は禁絕す。

第十六章　平均時間

夫れ、一時間に幾組みつゝ、演練し得るやを知るは、講武大會等の場合に於て、終始の時間を、豫算するに必要あり、即ち左に表を示す。

等差／種目	上級 試合	上級 平均時間	中級 試合	中級 平均時間	下級 試合	下級 平均時間
剣術	十一二組	五分	二十組許	三分	十五六組	四分
柔術	八九組	七分	十五六組	四分	十一二組	五分
備考	柔術の形には長短あるも概括して一時間に平均すれは二十二三組とす之れに試合の時間を加へて豫算を立つへし					

右の表は、劍搏共に普通三本勝負試合ひを、一時間に平均したる率にして、各自の試合ひに就ては、多少の差異ありと雖とも、結局一時間には、必らす此の率に歸着するものとす。

故に注意を要すへきは、晴れなる試合ひには、初心と免許の人は、多々ならさるものにして、概ね中級の一時間に於ける、（劍術二十組許　柔術十五大組）豫算を以て時間を豫定する是れなり。之を例せば、劍士四十名あらんに、之を折半して二十組となし、其の内に上級二三組あり下級三四組あるも、概して一時間に仕遂け得へし。上級下級は極端を示すに過きす。尤も一組みの試合ひに、六七分時を費す者なきにあらすと雖とも、之れあれは次の組みは、澁屈に堪へす、もとかしくや思ひけん、忽ち一二分時にて、勝敗を決せり。前者六七分時を費せば、後者一二分時にて終る如く、長短相和して、時間の平均力を保持するは、奇と謂ふへし。

又た、新兵の如き相打ちがちなる、極々の初心のみなれは、初心は、上級の長き時間に迄は、持續する能はす。左れはとて、中級の短き時間には、復た短縮する能はす。之を詳言すれは、上級の長き時間に迄、持續する能はさる原因の一は、初心は面を冠ぶり慣れさるを以て、麻痺昏倒せんとするものなれはなり、是れ兼て不勉强の罰なりとす。而して中級の短時間には、復た短縮する能はさる所以のものは、相打ちがちなるが故なりとす。（中絶せし者多々あれは氣のみ猛けて早し故に上級下級を通して平均中級に等し）

是に於て、道具着裝の遲速は、試合上に關係を有せり。餘り早や過るも惡しく、又た遲そ過るも惡しく、至極の程合ひありとす。何となれは、餘り早や過るときは、麻痺昏倒し。又た遲そ過るときは、心氣急迫ずれはなり。此の故に大會に於て、順次に繰り出すときは、一定の法則として、已れより四番目の前より、道具を着け初め二三番目には、着裝整頓して、控へ居るへし。

彼の町道塲などの、不規律なるものは、試合ひに費やす時間よりは、寧ろ道具の着け方と、入り替はりに徒費すと、謂はさるを得さるなり。又た賞品あれは倘は遲し、概ね凡情如斯也、故に懸賞は好まずと雖とも之れあるときは一時間十七八組となれり。

却說、初心の試合は、審判官に於て、當初の一二本を取り後るれは、其の四五六本は、だ

らりだらりにて、先つ氣の弱き者、自ら撃たれて、早く引き込まんとするか、或は所謂衆て不勉强の制裁として、痲痺昏倒せんとするかにあらされは、容易に勝敗は決せす。恰も、鷄の最後に於ける、苦闘の如く、離れ際悪しく、観者は、爲めに欠伸せんとす。是を以て、初心の試合は、當初の一二本は、稍々輕くも取りて、跡一本若しくは勝負と云へる、其の第三本目に注意し、或は之を預り置き、繼て其の第四本目を見て、勝敗を決し、若しくは相殺して、更に勝負と命し、又は一方の者、繼て二三本入れは、輕くも之を取る等、彼れ此れ、以て初心に對する審判は、胸心の働らき出來盛りの試合ひに比すれは、甚た面倒なりとす。

總へて、中級即ち出來盛りの試合ひは、所謂一撃一條痕一搏一掌血のみ、誠に善く判然たりと雖とも、下級即ち初心の試合ひには、審判官の胸心を要すること、前述するか如し。尤も極下級は、太刀筋の曖昧なるに依り、極上級は、太刀捌きの瞬速なるに依り、審判官は、極々の達眼者に任せすんはあらさるなり。但し何れも故障（劍術にして組打面解ける等柔術にして意地張り合ふ等）を生せそ、審判官に於て注意し、其の次々の試合ひを促嗾して、而して試合上の懸待

には、妨けを與へす、程善く豫定の時間に、當嵌る様に仕向ける所ろ、審判官其の人の方寸に存して、巧拙あり。

夫れ、免許の試合ひたるや、一進一退一叫は、一叫より激し。一打は、一打より迅へ。氣鋒凜々観者をして、肩凝り、筋張り、時の立つを知らしめすと雖とも、目錄にして七八分時を過き、切紙にして五六分時を過きたらんには、必らす席上に雜話、起りて靜粛ならさるへし。審判官は、席上の雜話を制止せんと欲せは、劍士双方を励まし、奮闘決戦せしむるに如かさるなり。

凡そ、平日に於ても、遣り放題と云ふ如き、従來時間の無制限は、矯正せすんはあらす。果して玆に注意すれは、必氣の急く所ろ、次第々々に動作を活潑にし、所謂先々之先に出るの慣習を造り得へし。亦た以て其の人の爲めに、諜つて進歩を督促する所以なるを、諒せすんはあらす。

第十七章　禮式

夫れ、道場に、相見て一揖す、何そ禮に醇なる。勝士は敗者を追はす、何そ義に勇なる。

是れ即ち古來武道場は、靈場として神の在すか如く、鞠躬恭禮終始誠敬を盡せしに、基つくものとす。

武道上の敬禮式は、二樣あり、一は上覽の時に於てする最敬禮式是れなり。一は相互ひの間に於てする是れなり。先つ最敬禮式より始めん、

凡そ、上覽の席を稱して首座と云ふ、首座の左方へ就くを上級劍士(柔士亦同)とす。

劍士は、竹刀を左腰へ提け、登場口へ兩名並立して、首長へ注目し最敬禮を行ひ、而して上級たる者、首座へ背を向けさる樣に、轉回しつゝ跡退りし、首座の左方へ就き、彼我九尺以上を隔てゝ相對し、互に氣を入れ、眼を敵の眼に注き、徐かに蹲踞し、趾蹠をつき、兩瞳を合せ、兩膝を左右へ披らき、互ゐ目禮して、居合の法に依り、右片手にて竹刀を拔き出し、稍々刀尖を地に垂れ、左手も添へて、直ちに立ち合ふへし。柔術も亦た之れに準す。

劍術は、道具着裝に時間を費すを以て、登場の初めには、面道具一切を着裝して登場す。而して終りには、元の地位に蹲踞し、互に目禮し、半ハ首座へ向きなから、壁際へ跡退

りて、次の試合の妨けにならさる樣にし、先つ竹刀を左膝の前へ、斜めに卸ろし置き、小手を竹刀の上に脫き、續て面を脫き、更に小手を面の中に收めて、右手に面の緒を摑み、左手に竹刀を提け、初めの登場口へ、復して並立し、首長へ注目し、最敬禮を行ひ、徐ろに退き去るへし。元是れ素面にて君主へ謁見するは、御目見被仰付とて、名譽なるものなりしに依れり。勝殘りの場合は、一人にて行ふ、昔しは敬虔にして額つくものなりしか、今ま立禮することに改めたり。

平日は、相互の敬禮にして、上級の者と雖とも、一旦は下級の席に就き、上席を讓るものとす。而して終りに復た目禮し、劍術は面を脫きて、後に挨拶し。柔術は直ちに起て二三歩進み出て、挨拶すへし。又た上級者に對したるときは、下級たるものは、御跡と呼ひ、徐ろに退くへし。是れ吾れ一人にては未た物足らぬへしとの謙なり。

鬪士の相對する、中間を通過すへからす。先輩の面前を遮斷すへからす。止むを得すんは上體を屈め、挨拶して過くへし。其の他總への慣習規則(其日の稽古を止めんとするとき師に挨拶等も)は實行すへし。

演習中は、決して外見(ロツミ)すへからす。殊に已れの勝ちたる塲合に、觀客の方を見るへからす、是れ等は、思想の上に、見苦しく思はるれハなり。

凡そ、柔術の演習中は、知らす放屁する程に、精神と腹力を入れて、修業するにあらされは、進歩も亦た鈍しとす、此の時之れを笑ふへからす。是れ等の塲合に於て、規律の綏嚴、士氣の弛張を徴せらるゝものなれハなり。又た席に在る者は、互に耳語すへからす、是れ初心若くは中絶せし者の、僻目として已れを誹らるゝか如く、邪推を起すものなれはなり。

古への武士は、儀容を整肅し、秩序を崇重す、是れ教育の素あれハなり。無教育の者は、擧措粗放、言語野鄙にし常に、噪しく、暑には袒裼し、寒には襟卷し、或は妄りに投足し、或は頻りに飲食を希ひ、懶惰を以て磊落となす等是れ直接に其の人の品位を高下するのみならす、大に滿舘の風紀に關す、豈に愼戒せさるへけんや。

彼の町道塲なとの試合を見るに、負けたる者の辭として、嘘叱敗矣とか、殘念したりとか、云ひ譯けがましく、卑劣根性を吐露するのみならす、或は竹刀を放投け、或は道具

を踏み越へ、或は胡座(アグラ)し、或は倒臥し、禮儀作法の何たるを知らさるものゝ如し、實に彼れ等は、術使ひにして觀せ物的の賤業者と、殆んど思想上に擇ふ所ろなきものなり、近づくるへからす。(不出來の時の申開きに彼等は膏藥を貼するを例とす決して倣ふへからさるは勿論可笑々々)

凡そ、敬禮は、上下の分を明かにし、秩序を正ふするものなれは、生徒たる者、嚴に敬禮法を守り、毫も風紀を紊亂することあるへからす。凡そ、下たる者は、上たる者に對し、其の命令の主旨等を尋問すへからす、若し命令を了解し得さるときは、謹て再たひ教を乞ふへし。是れ元温故學舍の規則なり、常に温故學生を稱するは、此れ等の要素正確に行はれ、軍人教育の精神峻嚴にして、上下敬愛の情も、亦た藹然として其の間に存す。而して天眞爛熳不飾不媚、實に神田街書生の比にあらされはなり。抑々、敬禮服從の兩法は、軍を治むるの要領たり。之れに依て軍紀立ち、之れに依て風紀正し、豈に等閑に附すへきものならんや。

第十八章　入門概則

第一條　本舘は、現役軍人及ひ軍人志望の學生にあらされは、入門

を許さす。

理由　凡そ、人は、類を以て集る、而して同類相集れは、一の風習を生するは、自然の理勢なり。秩序正しき人物集合すれは、令せすして自ら秩序正しき慣習を成立す。志操確實なる人物相會すれは、云はすして自ら志操確實なる精神を増發す。周圍の人物、一に皆な勤勉なれは、獨り懶惰なる能はす、若し之れに反して、周圍の人々懶惰なれは、尋常の人に在ては、先つ獨り勤勉するも能はす、周圍の思想、自然に傳染すればなり。是に於て、類を限るに本條を以てす、此の類以外の人間に至ては、本館の特色を認得する能はすして、怪訝せんとす、甚しきは、武道の至高なる觀念を解せす、武術の至大なる功用を知らさるなり。

夫れ、試合は、僅々二三分時に過きさるも、其の人の性質氣概一瞬百出殆んと網羅せさるなし、而して満館の氣風、大に之れか消長を助く。彼の名將窒林登(ウエルリントン)は晩年イトンに歸り、群童の嬉戯活潑なるを觀て、曰く、瓦得路(ウオートルロー)の戰は、此處に於て克ちしと、蓋し郷友の勇壯活潑なる氣風に、薫陶せられたる素養に依り、瓦得路の戰に克

ちしを云ふ。本館の期望は、全く此に在り、竹刀の先きや、疊の上の勝負に、强ひのみにては、何の益かあらん。所謂武道の大勇を練り上げ、他日名成り功遂けて本館へ歸り來り、此處に於て、金鵄勳章を得たりと云ふを聞かは、満願成就實に之れに過きたるはなし、此の目的を期成するか爲めに、氣風の上へに、注意を置くこと、嚴密なりとす。

第二條　本館は、入門せんと欲する學生は、先進兩名連署捺印したる紹介証に、學業履歴書を添へ差出すへし。但し將校は、武友とし優待す、即ち此の概則外とす。

理由　凡そ、人を知るの難きは、聖人も猶ほ病めり、然れとも其の擧動を見て、其の中心を知り、其の履歴を査して、其の志行を知り。其の既往を鑑みて、其の將來を知り。其の交友を問ふて、其の人となりを知る。蓋し中らすと雖とも、遠からさるなり。是れ先進兩名の連署捺印したる紹介證と本人の學業履歴書を要する所以なり。而して人を紹介するは、紹介せらるゝ者より、紹介する者の、識量を見るに足れり。

何となれは、兼て善き友と交はれは、善き友を紹介せん、若し悪しき友と親しめは、悪き友を紹介せん、諺にも、友は汝か鏡みなりと云ふにあらすや、乃ち、友の善悪は、其の之を友とする人の反照なれはなり。

知人七條の一に曰く、問之以是非而觀其志、二に曰く、窮之以辭辨而觀其變、三に曰く、咨之以計謀而觀其識、四に曰く、告之以禍難而觀其勇、五に曰く、醉之以酒而觀其性、六に曰く、臨之以利而觀其廉、七に曰く、期之以事而觀其信、概ね斯の如くにして、而して之れか許否を與ふものとす。既に入門を許諾したる以上は、之を推すに至誠を以てし、之を喩すに信愛を以てし、假りにも偶言を放たす、苟しくも空想を持せす、誘言を愼み、罵詈を戒め、光明を主とし、以て公平に處置すへきものとす。

第三條　本館は入門式として、扇子一對納呈するを例とす。

理由　元來本館は、束脩月謝なとは言ふ迄もなく、道具疊炭油費等、一切絶無たり。扇子納呈の點も、尙は本意ならすと雖とも、此の法を設けされは、種々禮物を持參

せられて、謝絶に困りしこと、屢々なるを以てなり。故に此の法を設けて、此の他には、一切贈答することなく、相互に心ろを淸うせんことを期す、是れ本條を設る所以なり。

顧ふに維新以前は、生徒自ら贄を執て師に事ふ、師は淡然泊然として求むる心ろなし、然り、師弟の誼を結ふに至ては、互に懇篤敬愛至らさる所ろなく、恰も父子の親に於けるか如く、生涯榮辱喜憂を倶に共にし、師は、生徒の榮達を以て名譽とし、生徒は、自得を以て師恩とし、相互に武夫淳厚の風習餘澤を存せしものなりき。其の德器を成就せし子弟が、其の師に眷々たるは、何ぞや、即ち是れ其の師に眷々たる眞心其の者か、其の德器を成就せしめたる一大原素なれはなり。但た道は師を以て自ら居るにあらす、僅かに一日の先進を以て、靑年の後進に待つのみ、然れとも滿館淳厚の古風を以て、充たされつゝあるは、竊かに中心の欣榮とする所ろなり。

第四條　本館は、他流に染みたる者、及ひ腋臭又は吃り等の患ある者、

若しくは品行不正の者、並ひに政黨關係の者は、拒絶す。但し一ひ入門したる以上は、中絶するも、門人たる資格を失ふことなし。

理由　夫れ、他流に染みたる青年は、槪して輕佻なり、浮華なり、之を忌み嫌ふこと、蛇蝎の如くなるは、獨り流義立てるのみならす、抑々故あり、夫れ世上の風潮、文弱なる今日は、尙は更に古への武士より、一層頑然志操の根底を固めて、漸く中庸を得んとす。何となれは、周圍の文弱を以て、常に武强を調和し去れはなり。殊に都會は、濁水蕩々殆んと天を蹴り、地を卷き、浸潤漸濕の勢ひは、或は遂に有爲の青年を浸して、其の汚泥を及はさんとす。此の故に、流義立てよりして、以て輕佻を斥け、眞摯を尙ひ、浮華を賤しめ、質實を貴ひ、當流の特色を發揮せしめすんはあらさるなり。麻中の蓬は、矯めすして直しとは云へとも、此の條を設けて、以て純粹を擁護すと云ふ。

夫れ、武人の見識は、他流を睥睨すへくして、他流を崇拜すへきものにあらす、隨

て他流の事の耳目に觸るゝ時は、冷淡に聞きなかし見なかし、決して敬服の体をなすへきものにあらす、結局我か本尊たる我か流義を、信愛するの誠意を始終すへきなり。併しなから眞心敬服すへきものにありとすれは、斷然入門替へすへし、誰れにも遠慮には及はさるなり。又た隨身中の事は、喋々すへきものにあらす、之を喋々すれは、後進に他流崇拜者の如く誤認せらるれはなり。（隨身とは國元にて初心の時より入門し其の流義を修め居なから江戸勤番等の都合に依り客分として或道場に往き演習するを云ふ）

元來、當流の眞摯にして、天眞爛熳たるは難く。或流の輕佻にして、乙に面白き所作は易し。當流の眞摯にして、天眞爛熳たるは、何人か俄かに之を似ねんと欲するも、決して似ねる能はさる所ろなり。或る流の乙に面白き所作は、當流の初心にして、一見直ちに似ね得らるゝ、易々且つ平々の業なれは、如何に之を巧みにするも、手柄らにならさるなり。又た似ねて似ね得らるゝ位ひの業は、修習するにも足らさるへし。

抑々、武藝は、精神敎育に連れて、進歩するにあらされは、眞正なる武藝とは、稱

すへからす。左れはクーザンも云へり曰く、武藝（戰爭の意）なる者は、諸般の藝術中、最も高尙にして、無比の精神と、實力とを要するものなりと。實に吾人立脚の地盤も、建國尙武の遺風も、一に皆な精神に存す、豈に啻た流義立てするのみに止まらんや。

凡そ、坐作進退言默動止は、皆な其の人の特性を、外形に顯表する所以にあらさるはなし。而して外形に顯表するは、必らす精神の作用を俟て發す。故に一切の顯表は、必らす精神の之れか根源たるありて、始めて成るものとす。即ち精神の猛けたる者は、他日快刀亂麻を斷つの氣象、太刀先きに顯はれて、凛々たる所以なり。今世は學校的の出入に擬し、中絕すれは、除名せられたる如く誤了する者あり、學校は、科業に期限ありて、餘人を容れすと雖とも、武道は、之れに反す、是れ但書を置く所以なり。又た本條に揭る各項は、一種の傳染病なりと知るへし。

第五條　本館は、本館制定の練體柔術服、及ひ四分一柄の竹刀は、各自持參すへし。

理由　此の新調は、當流に對する、志操の確實を證明するのみならす、熱心の耐久を擔保するものとす。尤も劍術は、器に依て變化を生し、柔術は、衣に依て應用を異にす。乃ち先師の規典に遵ひ、講館一定の服制を要する所以なり。從來の經驗に徵するに、其の一着も新調せす、或は俗流亂取り服を、繕ろひ直しなとしたる者は、永續せす。概ね三週間乃至二三月にて、だらりとなれり。是に於てか其の一着も、新調せさる者は、眞心修業せんとするにあらすして、偶々遊戲にすると見て大過なし。實際斯の道に熱心なれは、其の熱心の餘波として、二着も三着も、新調したきものなれはなり。又た年少の輩は、父母の許諾せしや、否や、未來將校たる品位を保ち得るや、否や、僅かに一着新調の有無に依てト知せらる。而して壯幼に拘はらす、新調せさるものは、人の煙草を貰ひ呑みすると、一般に呑みたくも、呑れすと云ふ如く、氣の毒なること多し、是れ此の條の設けなかるへからさる所以なり。元來本館は、國家公益の爲めに謀るものなれは、其の主旨を擴張するときは、柔術服も、竹刀も、館給として、至當なるが如し。然れとも斯くするときは、耐久成業

の志操なき者も、濫りに入り來りて、管理上に言ふへからさる不都合を生し、且つ今日の門人は、明日の他人となる如き、不愉快を醸すは、勢ひの免れさる所ろなり。

要するに、一着新調の有無は、入學受驗の及落に均しく、玆に於て撰擇せらる、此の撰擇法は、簡單にして一大關門たり、或る人は、本館の生徒を稱して、關羽なりと云へり。蓋し其の五關たる、一に曰く、軍人志望の學生たる事、二に、曰く、先進兩名の紹介を要する事、三に曰く、他流に染まさる等の事、四に曰く、劍搏兩道を修練する事、五に曰く、本館制定の服を新調する事、是れ五關なり、五關を突貫するは、關羽なれバなり。

第十九章　舘則

第一條　本舘は、軍服洋服若しくは袴着用にあらされは、出席すへからす。

理由　夫れ、武道場は、吾人の精神を、鍛錬する所ろなるを以て、敝衣たりとも、袴は必らす着すへし。其の儀容を整肅にするは、他日軍門に入て將士たるへく、或は社會に立て紳士たるへく。前途有爲の學生たる、素養なれはなり。

第二條　本舘は、日々竹刀を持ち來り、持ち歸るへし、且つ生徒たる者は、出席するや直ちに稽古支度すへし。又た道場内に於て、吹煙雜話すへからす。

理由　夫れ、日々に竹刀を持來り、持歸りするは、頗ぶる煩に堪へさる如くなれとも、給を父母に仰きて、得たる物を放置し、他人の用に供すへきにもあらす、殊に都會は、横路に入り易く、危險なる所ろなり。併しなから本舘は、正々堂々たる將校及ひ將校生徒たらんと欲する學生のみにして、幼者と雖とも、操守あり、節義あり、品行の嚴正なるは、更に意を加へすして、自ら嚴正なり。去れは、之れか豫防の策を講するは、蛇足に過きすと雖とも、他人の爲めに、自ら摸範とならさるへからす。是れ即ち正々堂々たる將校の日々持來り持歸りて、好摸範を示さるゝ所以なり。未來に將校生徒たらんと欲する學生は、先輩將校の好摸範に法とりて躬行し、亦た以

で已れより、後進の者の爲めに、摸範とならさるへからす。

生徒たる者は、出席するや直ちに稽古支度すへしとは、一人稽古支度せすして、見學し居れは、其の影響は、忽ち他人に及び、三五名の徒ら消光者を生す。元來、見學は必要なりと雖とも、稽古支度せすして、見學するは、他に弊害あるを以て、許すへからさるなり。

青年にして進爲の勇なく進取の氣なく、動もすれは事物に嗜き嫌ひをなし、又は恥辱がましく人後に潜みて、見學する程に害なる者はなかるへし、是れ見學を禁する所以なり、吹煙は、發育に大害あり、雜話は、修業に妨碍あり、共に禁止する所以なり。

第三條　本館は、劍術を先にし、柔術を後にす、新入門者は、劍術基本演習の元に立ち得るにあらされは、練體柔術を習ふことを許さす。但し初一週間は、居合の稽古のみ敎習すへし。

理由　當流の練體柔術は、當流の短柄劍術に、附屬したるものなるを以て、先後する所ろあるを諒知せすんはあらす。尤も、本館は、劍術のみ修業するは妨けなしと雖

劍術を學習せすして、柔術のみ演習するを許さす。而して柔術は形を修練せすして、亂取りのみ行ふを許さす。皆な、以て武士道の基ひする所ろを、先にすと知るへし。居合ひの如き、初めに之を習はしむるは、武士道の觀念を高めしむるに在り。尙ほ熟練するも日々之れを輪順に修業すへし。

先進者は、其の新入門者を、兼て知ると知らさるとを問はす、所謂同胞兄弟一人を增すの歡迎心を、顯はして懇切にし、諸道具の束裝法までも、敎へ示すものとす。是れ等の場合には、已れ初入門の際は、如何なりしかを顧れは、自ら懇切にせさるを得さるへし。（因に云ふ人の相撲を見るも已れの筋張れり矧自ら演習するに於て多小の胸痛み節痛みは患となすに足らさるを說示す）

第四條　本館は、特別の事情ある者及ひ幼年に對し、月賦償却の法を以て、練體柔術服の新調を契約するを得る、但し一ヶ月、怠納あれハ、既納の分は、返納することなし。

理由　入門概則に於ては、從來の經驗を述へしか、復た志操は却て確實なるも、學資に稍々富裕ならさる、特別の事情ある人もなきにしもあらす、是れ特に此の條を設

けて、其の素志を遂けしめんと欲する所以なり。其の方法は、先つ館服を貸與し置き、全額完納を俟て、新調の服を渡して、此の契約を解くものとす。其の內に怠納あれは、沒收す。故に月々怠納なく償却すれは、本人の所有となる、一ヶ月怠納あれは、損料となる、是れ合意の契約に成立するものとす。幼年は概ね此の條に依るへし日に月に發育するを以てなり。

月賦の月割りは、入門の月は、竹刀等の費用あるを以て、入門の翌月より、練體柔術服の償却を月割りにす。全額壹圓八十五錢なれは、月賦の第一月は、金參拾五錢を納む、此の時に練體柔術服の小袴を渡して、月賦の第二月より、仝第六月に至る間は、月々金參拾錢つゝ納め、完了したるとき、練體柔術服の上衣を渡して、全く本人の所有となす。

又た本館の貸與服にも、限りあるを以て、人毎には此の申込みを、承諾し得さるへし。

尤も此の契約を取結ふには、入門概則に依て、紹介したる先進の內の一名、保証人

となるへし、斯の如く契約を嚴密にするは、管理上の不都合を防くか爲めなり。

第五條　本館は、將校又は本館生徒の父母方臨席あらは、一同起立し敬禮すへし。但し此の他の者は、何等の懇請あるも、武道場は、觀せ物にあらすと云ひ聞けて、拒絶すへし。

理由　古來武道は、決して縱覽を許さす、武道の重きを持せしものなり。舊藩にては、壁の隙きより覗く者あれは、斬り棄て御免（殺人公許）とて、其の覗く者は、打ち果す掟ありし程にて、眞に武を尊ひ術を秘せしものなりき。苟しくも之を忽かせにせは、人に見せると思ふ念が、動作に出てゝ、巧美となり、觀客に媚ひて、輕佻となり、曲藝する傾向を惹起するれはなり。而して俗眼者は、斯道の達眼者が、奬勵せんと欲する目的に相反して、稱譽を濫りにする弊を免れす。演習者も、亦た觀客は俗眼者たりと察すれは、頻りに巧美にして、以て瞞着せんとする弊を釀せり。（相撲は見せ物なり見せ物にして倘ほ內稽古場にて立ち見する者あれは怪我するさ云て追ひ拂へり相撲は古武士の風ありさす）之れに反して、斯道の達眼者が臨めは、肅として正當に修練するの効あり。是れ生

徒の父母及ひ先輩將校へは、何人にも縱覽を許さゝる、嚴則の除外法として、却て時々貪臨を懇請する所以なり。實に世の父母及ひ將校は、斯道の通不通は暫らく論せす、物の大體に通して、事の要領に明かなるものなり。故に子弟の爲めに、輕佻を嫌ひ、眞摯を尙ひ、浮華を賤しめ、質實を尊ふ、自然の影響は、必らす正道に、誘導せらるゝものなれハなり。

第二十章　進敍式

凡そ、進敍式を嚴肅にするは、壇を築き、斧鉞を授け、以て將帥に任する、故事の理由に均しく、斯道と、其の人を重んしさせんか爲めなり。此の意旨を體認して、以て須らく鄭重にすへし。

得業証書（紙は羽子を用ひ流旨五首を形容銅刻したるものを用ゆ）

何野　誰

右積年劍搏兩道鍊磨之功特に顯著也乃ち流規に依り黑帶位に敍し目錄傳を授け以て本館の雋秀たるを證す

年月日於師席裁之　振氣館印

黑帶位進敍式之祝歌（一同唱和し直ちに胴揚けを行ふへし）

世にも稀れなる、切り返へしー五十二ヶ手の、早技は　見るさへ眩ひ、するそかし獅子奮迅の、、勢ひに　捨身に彈ねて、く字に懸け――四間四方も、尙は狹まし　縱橫無碍に、轉旋し――圓滿自在に、大技に　仕懸ける氣合ひの、勇ましさ――長柄の撓な〔ヘシ〕ひ、取り拉く　爲めに設けの、第五段――すらりと渡る、圓ろき橋　氣當り强く、詰め掛けて――十々〔トウト〕の聲か、降參りとか　聞かねは止まぬ、敵へにて――修練の敵の、

積み果ては　無念無想に、豁達し――萬法是空、自顯なり　左は去りなから高妙に
――登る非凡の、勇なくは　爭て佳境に、達し得ん――既に佳境に、達したる丈夫猛
雄の、人々に――位ひ授けそ、床しけれ　當時屈指の、達人は――雲集霧合、立ち並
ひ　幾層の榮を、添へにける――斯る名譽の、黑帶位　授けらる身の、譽れなり――
雄々敷く見へて、勇ましく　凛々乎たる、精神は――百折不撓、啻たならで　武士
の手本と、仰がるゝ――胴揚けの聲も、うるはしく　英名四方に、轟ろけり――武道
の譽れ、身の譽れ　胴揚けの聲も、うるはしく――英名四方に、轟ろけり　武道の
譽れ、身の譽れ――矢――當――曳（胴揚けは極丁嚀に御ろすへし）

第二十一章　將校生徒送別講武會

凡そ、將校生徒、受驗、及第者に對し、送別講武會を開き、終日稽古をなす。是れ其の及第せしは、取りも直さす、武道鍛錬、一着初歩の目的を遂けしものなればなり。終日稽古は、朝より晩に至るを例とす。但し昔しは、出銅壹貫文白米貳合と握飯（晝食）持參と、定り居る程のものなりしを以て、今も之れに準すへし。被送別者は、多少、寄贈

して留別をなせしも、招待員は、一切の寄贈を、謝絶す。而して何等の名義を以てせらるゝも、堅く執て受ることもなし。尤も別段に饗應することもなく、互に淡泊質素を旨とすへし。斯の如く、規約を立てゝ、當日は、名譽ある將校を招待して、榮を添ゆへし。中絶せる武友を案内して、交を温むへし。悲壯なる琵琶を奏して、興を助くへし。勇壯なる劍舞を演して、快を取るへし。其の及第者を祝するの餘響は、後進を刺激し、其の後進をして健羨奮發吾れも亦た之れに倣はんと、欲するの度を高めしめすんはあらさるなり。

此の會日をトして、前章の進級式を行ふは、從來の慣例たり。蓋し技藝の熟達は、人物の上達に次き、早晩將校生徒たるへき、見据へある者を第一に取れり。以て此の進級式は、早晩將校生徒たるへき、見据へあるを宣言布達するの意も、亦た寓すと謂ふへし。昔し柳生但馬守宗矩は、人を見るに敏活にして、武士道の心ろ懸け善き者は、技藝の未た充分ならぬに拘はらず、武級を進めしに、技藝は忽ち進歩せしと云ふ。之れに反して、武士道の心懸けに乏しき者は、奈何に技藝は、群を拔くも、顧みさりしと云ふ。而して

善く士道を勵まし、善く武士を造るに、宗矩は最も長所ありしと聞けり。柳生の芳名を今日に迄も、殘せる所以は、茲に在て存する乎。劍捕兩道は劍捕兩道に据由して、人物性行學力智能に、至るまて鑑察し得るものなり。

柳生の如きは、妙悞を得たる達人にして、其の鑑察力の、鋭利なりしは知るへきなり。余輩は企て丶之れに擬すへきにあらさるは、言ふまてもなき所ろなりと雖とも、希くは、進叙せらる丶者、信して奮發し、激して勉强せは、誘告の効驗あらん、洋語に之をサゼスシヨンと云ふ、即ち觀念を注入するの意味にして、人の身分位階は最も有力なる誘告となれり。例せは昨日迄は、白帶生たりしか、進めて黒帶位に叙す、乃ち、黒帶位の氣位ひ備はれるにあらすや。

誘告の例證に、曰く、汝は士官となれりと、誘告せらる丶ときは、態度音調一に士官の風を生し、若し又た、汝は、商人となれりと、誘告せらる丶ときは、萬事商人の如く、振舞ふと。是に於て知るへし、吾人か武道を修むると云ふ、至高の觀念は、吾人を善良に導くことを。且つ、花は櫻木人は武士と稱せらる丶に至らしむることを。

却說、左の歌は、本館の佳例として、送別會に唱することゝなせり。

最も賢こき、母君の――敎への道の、嚴そかに　育て上けたる、常盤松――緑りの
色の、千代八千代　懸けて渝らぬ、操はもて――學ひのわさに、敏ければ　衆に
抽んて、武夫の――名譽極まる、武璽てふ　免許の位ひに、進みける――君を壽ぶ
く、今日は又た　鹿島立ちにも（昔し回國武者修行に出る佳例を云ふ）彌增り――江田島（今ま兵學校あるを以て云ふ）行き
の、首途ぞと　謠ひし春の（明治二十五年四月十六日也）花盛り――今や實りて（果して仝年八月及第す）江田島に
君を送るぞ、芽出度けれ――君を送るぞ、芽出度けれ（一同唱和し胴揚けを行ふ進叙式の如し）

右は、事後より之を見れは、寧ろ當然の樣なれとも、未必の前に於て、江田島行き云云を豫め言ふ、克く克く見据へる所ろあるにあらされは、容易に斷言すへからさる事体なり。何となれは、若し此の豫知先見を明言して、而して萬一も之れに進へは、武藝の上にまても、信を失ふ恐れあれはなり。然るに斷言す、劍捕兩道の進步に、据由する所ろの確實なるを、証認するに足るへし。時に客あり、問ふて曰く、免許は、後進をして、矜式せしむる所以なり。何そ其の氏名を明記せさる、答ふ曰く、本館の歷史としては、

之を特書せすんはあらす、然れとも茲に其の何野誰れたるやは、明記せすして明知せらる、是れ免許の免許たる所以なり。又た問ふて曰く、春四月既に武聖てふ免許の位ひに進みけるとき、尙ほ勉强せ奮發せとの、結句ありしは如何、曰く、學んて厭はす、敎へて倦ます、是れ武聖の武聖たる所以なり。問ふ曰く賢母在堂、家庭敎育の嚴正なるは聞く所なから敢て問ふ、答ふ曰く、兩親世に在るも斯の如く、兄弟共に海軍に入て、莨將校たるは稀れなるに、況んや未亡人の獨りの手に於て、成育せられたるに於けるをや、是れ賢母の賢母たらるゝ所以なり。是に於てか、第四章（二十六七頁）を再讀せは、思ひ半に過きなん。

第二十二章　寒稽古

凡そ、寒稽古は、寒霜酷烈の最中を擇ひ、午前二三時頃ろより演習するものなり。尤も實施の際に臨み、日時等は告知すへし。

概して寒稽古は、一月陸軍始め式の翌日より、三旬間とす。其の無缺席者には、五人に一個の比例を以て、メタルを賞與す。其の凡例は、三旬間の演習度數に得勝點數を合算して、最高點者より、順次に賞與す。尤も無欠席者中の演習度數最下點者より、順上りに勝殘り試合ひを決せしめ、統監は、臨時加減點を與ふるを得る、即ち施術の法に適せす無理なるとき、又は手段卑劣なると認むるとき、減點をなす。當さに勝つへくして、潔よきに失したるとき、又は壯幼不釣り合の爲めに、敗したるとき。若しくは技倆意表なるとき。加點を與ふ。メタルは竹刀を以て光線を象とるもの是れなり。（優秀章はメタルを以て視るへからす）

演習度數計算法は、劍術は、幾人に渉るも、一たひ面を冠ふりしより、其の面を脫く迄を以て一點とす。柔術は幾人引受るも、一たひ登場せしより、休憩する迄を以て一點とす。要するに演習度數の計算法は、上減下增の傾向にして、武級の上下を通して、平均を得さしむるに在り。

第二十三章　試驗

凡そ、大試驗は、春秋兩季皇靈祭日に行ひ、小試驗は、臨時に行ふ。

大小試驗の成蹟は、肩章に表彰す。之を表彰するにあらされは、次上の段を習ふことを許さす。肩章一條乃至四條（初生七級）五條乃至九條（切紙約束即ち六級）十條乃至十四條（切紙五級）十五條乃至

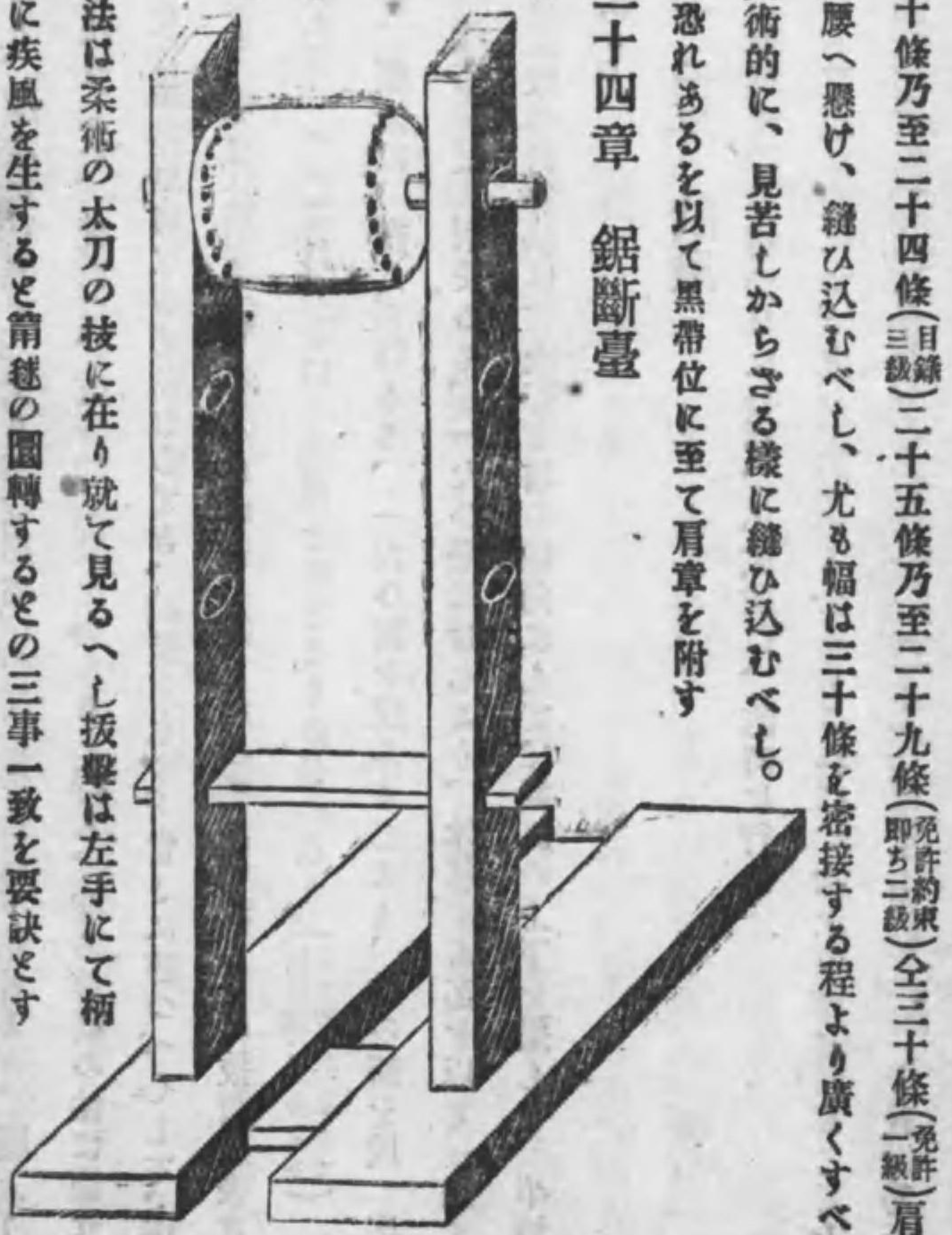
龜井伯爵閣下於金州撮影　小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

陸軍憲兵大尉正七位勳五等隈元實道先生

十九條（目錄約束即ち四級）二十條乃至二十四條（目錄三級）二十五條乃至二十九條（免許約束即ち二級）仝三十條（免許一級）肩章は、右肩より左腰へ懸け、縫ひ込むべし、尤も幅は三十條を密接する程より廣くすべからず。而して美術的に、見苦しからざる樣に縫ひ込むべし。

但し濫りにするの恐れあるを以て黒帯位に至て肩章を附す

第二十四章　鋸斷臺



此の鋸斷臺は居合ひの用に供するものなり革の箭毬に充るに綿を以てす常に拔擊疾風して永く箭毬の圓轉するを要す居合の作法は柔術の太刀の技に在り就て見るへし拔擊は左手にて柄を打握ると切先きに疾風を生すると箭毬の圓轉するとの三事一致を要訣とす

第二篇　振氣流短柄劍術

第一章　劍道

夫れ、劍道は、我か　先王の遺法なり。　神武天皇韴靈（フツノミタマ）の劍を以て、中洲を平げ給ひ。日本武尊叢雲の劍を以て、東夷を伐ち給ひ。　歴朝將帥を拜するに、節刀を授け給ふ。隨て、武家に、髭切り膝切り、小烏、等の寶劍ありき。抑々我か細戈（クワシホコ）の餘光は、外つ國までも輝きて、自ら細戈千足國と稱せしなり。　皇祖　皇宗此の靈秀なる邦土を開肇し、統を垂れ、敎を立て給ふ道義は、劍道の淵源なり。劍道は、道義の精華なり。劍道を以て、道義を培養し、道義を以て、劍道を錬磨す。乃ち、先王の遺法を繼承するに庶幾からん。而して我か帝國固有の劍道は、以て我か帝國固有の、國體を發揚する所以の素あり。

世界萬國、互ひに、內を尊ひ、外を卑しむは、愛國心の初起にして、專ら、其の歴史を尊尚するより發す。猶は、古戰場の如きも、見るに足るものなきも、人をして低徊し、去

る能はさらしむる所以のものは、其の地に附隨する、歷史的の觀念、深く人心に浸漬せるものあれはなり。

是を以て、我か帝國は、我か帝國固有の劍道を隆盛にし。以て、精神敎育の基礎となすときは遠く神代より傳りて、此の純粹なる國風をなせし、歷史的の觀念、始終一貫して、以て日本人士の本領本義を、顯彰するに足るへし。

夫れ、所謂大和魂なるものは、豪邁進取の精神にして、能く獨立の行爲を高尙にし、能く對外の思想を堅確にす。而して腰間三尺の秋水は、大和魂ひに依て、形ち造られたるものと謂はさるを得す。是に於てか、日本刀を見れは、光芒威靈、吾人の心目をして爽快ならしめ、爲めに脫塵の思ひあらしむ。實に古を思ひ、今を擦し、亦た以て、自ら豁然たるものなくんはあらさるなり。

我か國は、天祖鋒鏑を以て、尙武の國粹を示現せられて、宇宙無雙の劍道と、世界無比の歷史と、萬邦無類の國體と、三個鼎持し、以て完璧無疵なる、一天地を造り、以て吾吾に傳へられたり。吾々が、平生に在ては、左迄に思ひ設けさる所ろのもの、急場に臨

めは、突如として顯はれ、最後の運命を決す。即ち、双手劍法の應用是れなり。是れ、所謂大和魂に、伴ふ所ろの特性にして、急場に臨めた、斯の特性の外には、一切の技藝器具は、復た用をなさす。然り而して、我か　先王の遺法たる双手劍法に熟すれは、片手打の應用は、自在なるも、之れに反せは、甚た不可なり。本館生徒の爲めに、假りにも西洋の片手劍術を、採るとせんか、特性上の反戾は、勿論、歷史的の觀念と、體育上の發達とに、患なきを得さるなり。青年は、身體の發育期中に在るものにして、身體未た孱弱なり。故に双手を用ゆれは、忽ち、双手の平均を得へし。之れに反して、片手のみ用ゆれは、忽ち、片手太りて、片手利きとなるへし。是れ、西洋の片手劍術（フエンシング）に、紅蟹流の號を、附する所以なり。且つ、青年は、識慮の啓發途中に在るものにして、中心未た虛冲なり。故に我は、我が　先王の遺法たる、劍道を敎ゆれは、乃ち、歷史的の觀念を高め、祖先の遺風を想ふへし。若し、外國の物を以てすれは、忽ち、內卑外尊の傾向を增長せしめんとす、倘は、幸ひに、然らすとすれは、外來物視して、重きを之れに置かさるを奈何せん。嗚呼、我か帝國は、帝國自ら帝國固有の、劍道あるあり、何そ外國

の物に擬するを要せん。之を約するに、我れは我か　先王の遺法たる劍道を、繼承自奉し、補瑑發揚し、以て一旦緩急あれは、我か神州國民の特性を、顯彰すへきなり。

嘗て、乃木將軍閣下は、岩倉右大臣公より、親しく囑せらるゝに、先王の遺法たる、我か帝國固有の、劍道を再興し、帝國の士氣を、振起せしめんことを以てせらる。閣下之を諾せられて、今に至るも、尙ほ益々壯に、率先躬行せらる。是れ、大にして天下の模範、小にして後進の矜式、進んで斯道の名譽、退て弊館の光榮、實道等、感激、殆んと言ふ所ろを知らさるなり。

參照　陸軍偕行社記事第百三十二號に、巡歐日誌あり、抄して警醒の藥石となす。

擊劍は、不思議にも、歐洲軍人の好む所ろにして、而して擊劍塲は、軍人間、最も神聖の塲所として、尊信せらる。蓋し劍道は、古來唯一の武藝として、重んせられたること、洋の東西を問はす、全く同軌一轍にして、而して刀劍は軍人の魂魄なりとの事も、亦た東西同說なりしか上に、此の風たる歐洲に於ては、古より今に傳はりて、決して相變することなきか故に、歐洲軍人は、頗る刀劍を重んし、又た擊劍

塲を尊信す。（恐らくは日本は廢刀令に際し劍變せしを以て今ま再興最中）

夫れ、歐洲軍人は、朋友は勿論、同官同職の者は、其の知ると知らさるとを問はす、一見舊の如く、言語動作實に簡單親密なること、骨肉の如し、從て朋友同窓同職の間には、改まりたる禮式なるものなきを、一般とする程なれとも、擊劍塲にありては、全く之に異なり、知ると知らさるとの別なく、正しき禮式をなす。是れ擊劍を重んし、擊劍塲を一靈塲となせはなり。（靈塲の一語を以て懦夫も立つの光景を察すへし我か日本は之れに幾倍せし至誠を以てするか）

世人、動もすれは、歐洲は、學問工藝の淵源にして、學問工藝の外に談あることなく、擊劍談の如きに至ては、齒牙に掛けさるへしと思ふか如しと雖も、歐洲の實況、決して然るに非らす軍隊間に於ける擊劍塲の外、大都小市の別なく、至る所ろに擊劍塲ありて、擊劍の盛んなるは、實に吾人想像の及ふ所ろにあらす。文は開明人の愛する所ろなり、夫れ之を愛す、故に又た從て之を保護せさるへからす。之を保護するは、武に依るにあらすんは能はす、武は、大にして國軍となり、小にして一人の腕力となる、故に開明の人は、決して一人一個の腕力を卑しまさるのみならす、大